

特別史跡名古屋城跡

# 御深井丸・小天守西側発掘調査報告書

2024

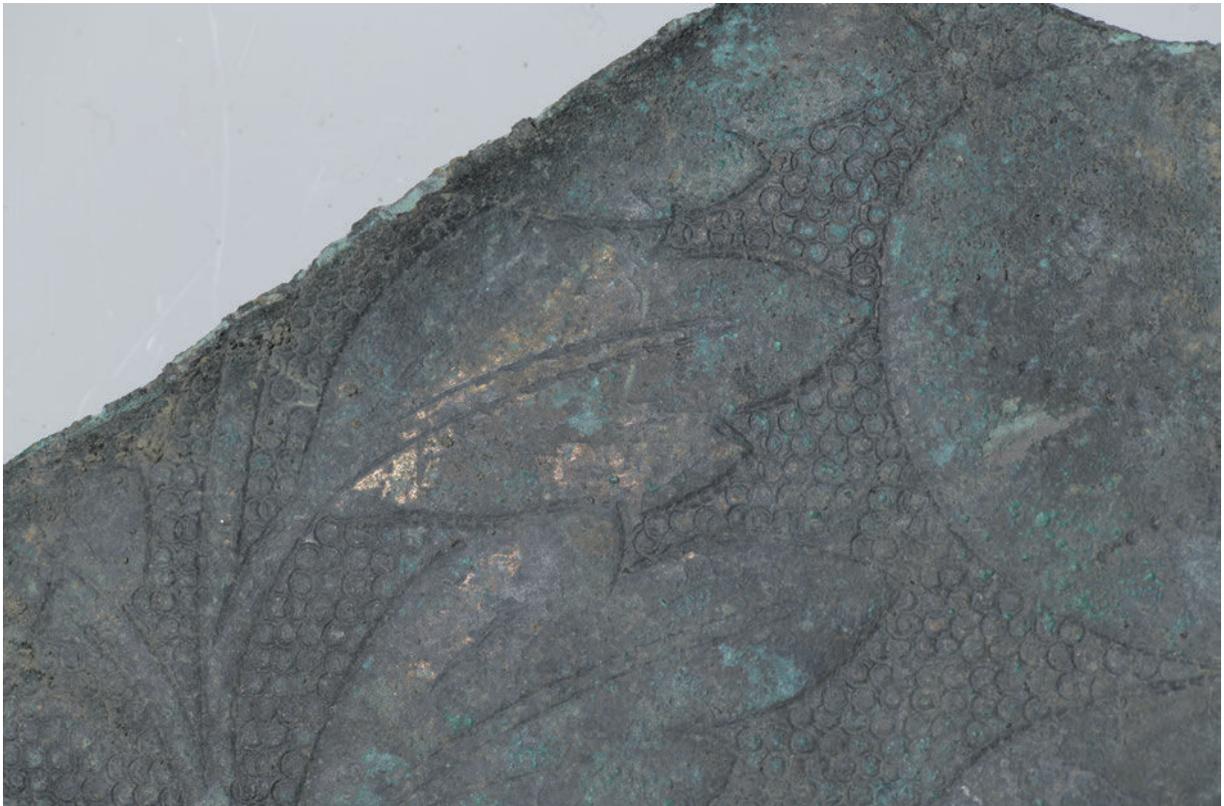
名古屋城調査研究センター



御深井丸 B 区全景 石列 [SB01] (写真下側) 検出状況 (南から)



文様が描かれた飾り金具（御深井丸L区3層出土）



飾り金具拡大写真（牡丹葉の上に鍍金がみられる）

## 例 言

1. 本書は、愛知県名古屋市中区本丸に所在する特別史跡名古屋城跡での発掘調査報告書である。
2. 本調査は、観光文化交流局名古屋城総合事務所名古屋城調査研究センターが実施した。調査は名古屋城調査研究センター学芸員 二橋慶太郎・西本菜由・木村有作・大西健吾が担当した。調査に伴う掘削作業及び測量は株式会社竹中工務店、株式会社竹中土木、株式会社パスコが行った。各調査期間・調査面積は下記のとおりである。

調査期間 令和2年12月14日～令和3年3月24日

調査面積 計118㎡

3. 出土資料の整理は名古屋城調査研究センター職員の大西健吾・郷由香・森朋子が担当し、出土金属製品の調査には朝日美砂子の協力があつた。報告書は二橋が編集を行った。
4. 遺構の撮影は西本・二橋、遺物の撮影については二橋が行った。
5. 出土金属製品の自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。詳細は第4章に記載している。
6. 本書の執筆は第1章～第3章を二橋が行い、編集は二橋が行った。
7. 本調査の図面・写真・出土品等の資料は、名古屋城総合事務所で保管している。
8. 発掘調査にあたり、特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議及び同会議石垣・埋蔵文化財部会よりご指導をいただいた。記して御礼申し上げる。詳細は第1章第3節で記述した。
9. 出土金属製品の調査に当たっては下記の方々のご協力を得た。記して御礼申し上げる(敬称略・五十音順)。

片庭修、杉本和江、杉本圭祐、町田伊佐雄

## 凡 例

1. 調査及び本書では、方位、座標は世界測地系第7系を、標高はT.P.（東京湾平均海面）を使用している。
2. 本書における色調は農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』により記載する。
3. 本書での図版の縮尺は各図に示した。
4. 本書での写真図版の縮尺は任意である。

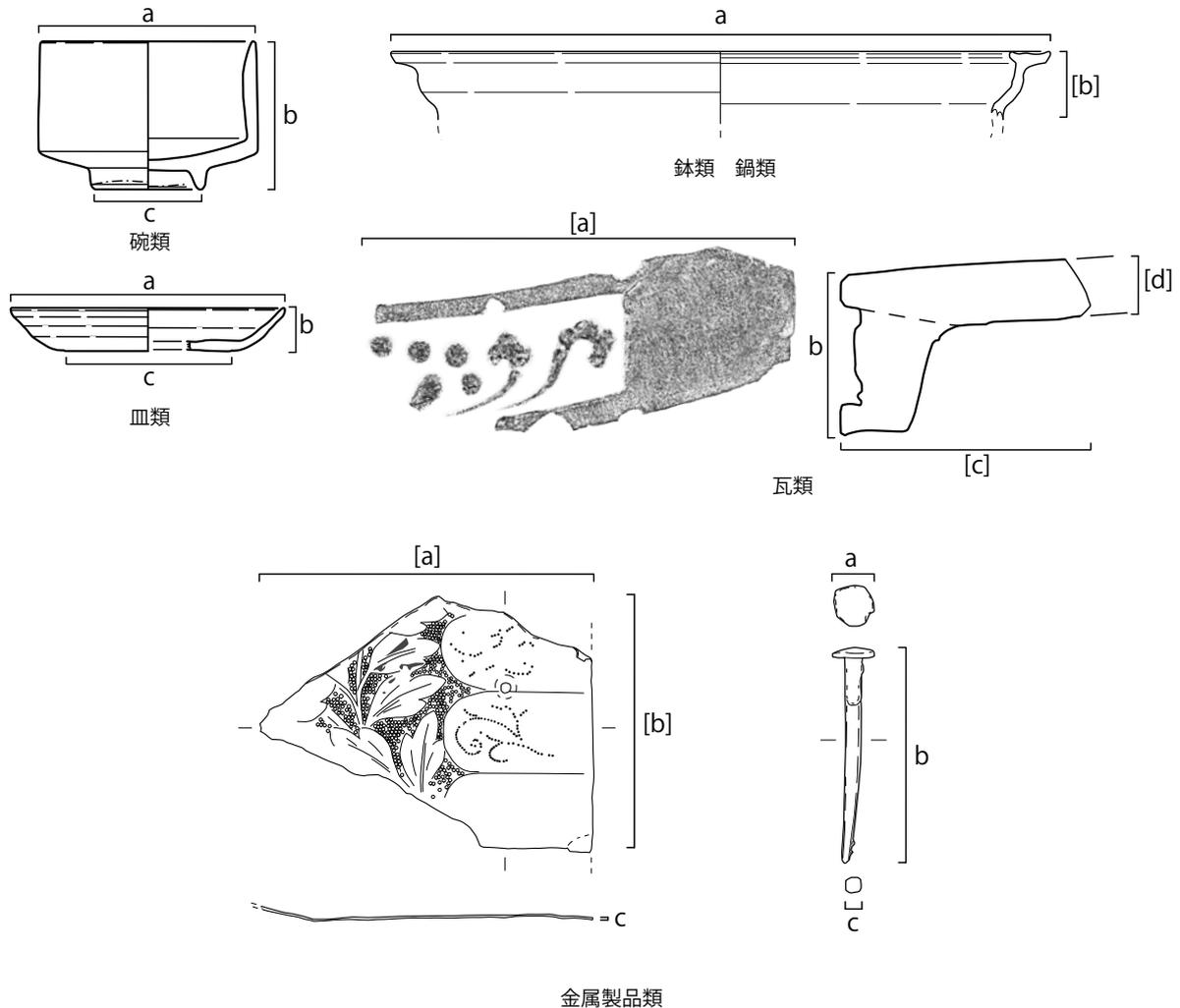
### 遺物計測箇所

土器・陶磁器類の計測箇所は口縁径をa、器高をb、底径をcで示した。鉢類と鍋類は底径が残存している個体が出土しなかったため省略した。

丸瓦、平瓦、棧瓦は瓦当幅をa、瓦当高をb、長さをc、瓦当を除く厚さの最大値をdとした。軒丸瓦はaとbが近接する値となるため、原則bを省略した。

金属製品は横幅をa、縦幅をb、厚さをcとした。

以上の計測箇所について、完全に残存しない箇所は[]、復元等による推定値は()をつけて区別した。



# 目次

巻頭図版

例言

凡例

目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 名古屋城周辺の既往の発掘調査	4
第2章 調査の概要	7
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 御深井丸における既往の調査	7
第3節 調査指導体制	8
第4節 調査の経過	9
第3章 発掘調査の成果	12
第1節 発掘調査の概要	12
第2節 発掘調査の成果	14
第3節 発掘調査成果のまとめ	60
第4章 金属製品の自然科学分析	62
第1節 銅板黒色付着物の赤外分光分析・レーザ元素分析	62
第2節 名古屋城御深井丸より出土した金属製品の蛍光 X 線分析	65
参考文献	72

図版

報告書抄録



## 図版目次

### 巻頭図版 1

御深井丸 B 区全景 石列 [SB01](写真下側) 検出状況 (南から)

### 巻頭図版 2

文様が描かれた飾り金具 (御深井丸 L 区 3 層出土)

飾り金具拡大写真 (牡丹葉の上に鍍金がみられる)

### 図版 1

- 1 A 区全景 (南から)
- 2 A 区サブトレンチ北壁断面 (南から)
- 3 B 区全景 (北から)
- 4 B 区 SB01 検出状況 (東から)
- 5 B 区 SB01 拡大 (南から)
- 6 B 区西壁断面 (東から)
- 7 B 区 3 層中の間知石 (西から)

### 図版 2

- 1 D 区全景 (北から)
- 2 D 区東壁土層断面 (西から)
- 3 D 区南壁 7 層拡大 (西から)
- 4 E 区全景 (東から)
- 5 E 区南壁土層断面 (北から)
- 6 E 区 SK01 検出状況 (北西から)
- 7 E 区 SK01 検出状況拡大 (北から)
- 8 E 区 SK01 瓦出土状況 (東から)

### 図版 3

- 1 F 区全景 (西から)
- 2 F 区東壁断面 (西から)
- 3 F 区 17 層検出状況 (東から)
- 4 G 区全景 (北から)
- 5 G 区 2 層掘削状況と出土金属製品 (東から)
- 6 G 区 2 層掘削状況 (西から)
- 7 G 区南壁断面 (北から)

### 図版 4

- 1 H 区全景 (東から)
- 2 H 区西壁断面 (東から)
- 3 J 区全景 (南から)
- 4 J 区 SK03 断面状況 (東から)
- 5 J 区 SK03 断面状況 (南から)
- 6 J 区 SK03 断面状況拡大 (南から)
- 7 J 区南壁 (北から)
- 8 J 区西壁 (東から)

### 図版 5

- 1 K 区全景 (東から)
- 2 K 区 SK04 検出状況 (北から)
- 3 K 区 SK04 断面 (西から)
- 4 K 区東壁断面 (西から)
- 5 L 区全景 (北から)
- 6 L 区 5' 層検出状況 (東から)
- 7 L 区東壁断面 (西から)
- 8 L 区西壁断面 (東から)

### 図版 6

- 1 M 区全景 (北から)
- 2 M 区 SK05 断面 (西から)
- 3 M 区 12 層、13 層検出状況 (西から)
- 4 M 区南壁断面 (北から)
- 5 N 区全景 (西から)
- 6 N 区 7 層内の軒椽瓦 (東から)
- 7 N 区北西隅テストピット掘削状況 (南から)
- 8 N 区西壁断面 (東から)

### 図版 7

- 1 C 区全景 (西から)
- 2 C 区サブトレンチ西壁断面 (東から)
- 3 C 区管路掘方断面 (北東から)
- 4 I 区全景 (西から)
- 5 I 区管路掘方断面 (北から)
- 6 O 区全景 (東から)
- 7 O 区攪乱検出状況 (西から)
- 8 O 区管路掘方断面 (南から)

### 図版 8

- 1 P 区全景 (南西から)
- 2 P 区 7 層中の礫検出状況 (南から)
- 3 P 区 8 層検出状況 (南から)
- 4 P 区東壁断面 (西から)
- 5 a 区全景 (南から)
- 6 a 区南壁断面 (北から)
- 7 b 区全景 (北から)
- 8 b 区 5 層検出状況 (北から)

### 図版 9

- 1 c 区全景 (南から)
- 2 c 区北壁断面 (南から)
- 3 d 区全景 (東から)
- 4 d 区南壁断面 (北から)
- 5 e 区全景 (西から)
- 6 e 区南壁断面 (北から)
- 7 f 区全景 (南から)
- 8 f 区北壁断面 (南から)

### 図版 10

- 1 g 区全景 (北から)
- 2 g 区全景 (西から)
- 3 g 区北壁断面 (南から)
- 4 h 区全景 (東から)
- 5 h 区西壁断面 (東から)
- 6 i 区全景 (西から)
- 7 i 区 9 層検出状況 (南から)

i 区南壁土層断面 (北から)

**図版 11**

- 1 Q 区全景 (東から)
- 2 Q 区西側トレンチ全景 (南西から)
- 3 Q 区西側トレンチ 8 層検出状況 (西から)
- 4 Q 区西側トレンチ東壁断面 (西から)
- 5 Q 区西側トレンチ西壁断面 (東から)
- 6 Q 区東側トレンチ全景 (西から)
- 7 Q 区東側トレンチ南壁断面 (北から)

**図版 12**

- 1 E 区表土除去状況 (西から)
- 2 A 区近代層掘削状況 (北東から)
- 3 O 区現代層掘削状況 (西から)
- 4 G 区 SK02 掘削状況 (東から)
- 5 C 区フェンス設置状況 (西から)
- 6 E 区雨水排出状況
- 7 B 区遺構面養生状況 (南から)
- 8 B 区埋め戻し完了 (北から)

**図版 13**

出土遺物写真 1(1～2:A 区 3:B 区 4:E 区)

**図版 14**

出土遺物写真 2(5～10:E 区)

**図版 15**

出土写真遺物 3(11:F 区 12～14:G 区)

**図版 16**

出土遺物写真 4(15～20:G 区)

**図版 17**

出土遺物写真 5 (21～28:G 区)

**図版 18**

出土遺物写真 6 (29～35:G 区)

**図版 19**

出土遺物写真 7 (36～39:G 区)

**図版 20**

出土遺物写真 8 (40～42:H 区 43～46:J 区)

**図版 21**

出土遺物写真 9 (47～48:J 区 49～52:L 区)

**図版 22**

出土遺物写真 10 (53～56:L 区)

**図版 23**

出土遺物写真 11 (57:L 区 58～61:M 区)

**図版 24**

出土遺物写真 12 (62:P 区 63～64:c 区 65～67:g 区)

**図版 25**

出土遺物写真 13 (68～69:g 区 70～71:Q 区)

# 第1章 遺跡の位置と環境

## 第1節 地理的環境

名古屋市の地形は、中央部の洪積台地、東部の丘陵地、北・西・南部の沖積平野の3つに大きく分けられ、東に高く西に低い地勢をなすものの、おおむね平坦な地形となっている。

市域東部の丘陵地域は標高30～100m程度である、北東部から南の知多半島へと直接的に連なっている。中央部の洪積台地(熱田台地)は、標高5m～30mの極めて平坦な台地地形であり、6～9万年前に火山降灰の海底堆積物が隆起してできたといわれている。

名古屋城は、市域中央部の北西端に位置し、市の玄関口である名古屋駅、あるいは、中心街の栄から直線距離約2.5kmの位置にある。かつて武家屋敷や寺社が並んでいた三之丸曲輪内には官庁街、名古屋城北には名城公園が広がっている。また、築城に際して城下に必要な米や塩などの物資を運搬するための運河として開削された堀川が城下町の西端を南下し伊勢湾にそそいでいる。

名古屋城周辺の地形特性は、北西方が断崖になっており、濃尾平野の眺望の開ける絶好の佳地であるとともに、天然の要害でもあった。一方、東と南に連なる台地は、城下町の中心部を形成するのに安定した地盤が広がり、その南端には東海道と熱田湊が位置した。

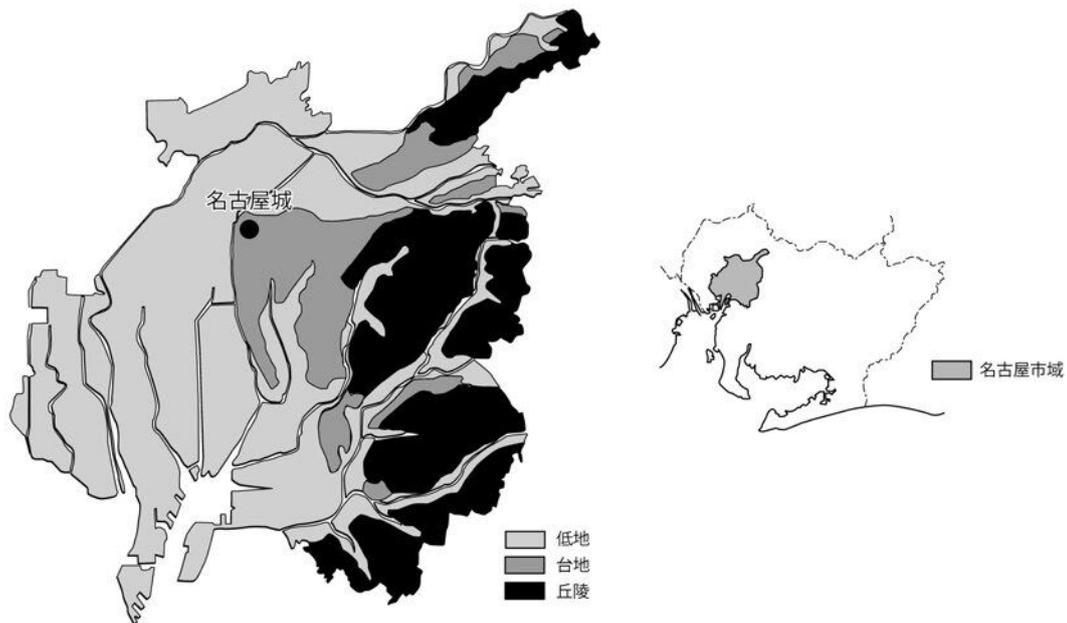


図1 名古屋城の地理的環境

## 第2節 歴史的環境

### 【近世以前】

名古屋の地では5世紀から7世紀にかけて大和王権と強力な関係を築いた「尾張氏」が東海地方最大の豪族として台頭した。大化元年(645)には、大化の改新で中央集権律令国家制が成立し、「尾張国」が誕生した。

平安時代には各地に荘園が誕生し、名古屋では那古野荘、山田荘、富田荘が確認できる。

室町時代には足利一門の有力氏族である斯波氏が室町幕府における尾張・遠江・越前の守護となり、尾

張では織田氏が守護の代官となった。

名古屋の地では、今川那古野氏が鎌倉時代後期から名古屋台地北部の那古野の地を領有しており、大永年間(1521～1524)には現在の二之丸付近に那古野城を築いたとされる。

応仁の乱・文明の乱(1467～1477)により室町幕府が没落し、戦乱の世となると、天文7年(1538)、那古野城は織田信秀に奪取された。天文15年(1546)、古渡城が築かれると那古野城は子の信長に譲られた。弘治元年(1555)、当時、尾張の中心だった清須城に信長が移ると、那古野城は信長の叔父にあたる信光が城主となる。信光の没後は、重臣である林秀貞の居城となり、天正10年(1582)には廃城となった。

### 【近世】

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、当初入国予定であった四男忠吉の死去のため、九男義直に尾張一国を与え、尾張藩が成立した。

家康は当時の尾張国における拠点であった清須城にかわり、名古屋台地に新たに新城の築城を決定、慶長14年(1609)に名古屋遷府令を発した。

翌年の慶長15年(1610)には公儀普請により加藤清正ら西国、北国の諸大名20名を動員し名古屋城の築城が開始された。

名古屋城は本丸、二之丸、御深井丸、西之丸、三之丸の5つの曲輪で構成される。このうち、本書にて報告する御深井丸は天守を有する本丸の北西を取り囲む曲輪である。

今回発掘調査を行った御深井丸の名の由来について、かつてこの付近は大沼(=フケ)であり、名古屋城普請の際に松などを多く埋め立て築き上げたことから「深井の丸」と名付けられていたが、元禄年間ごろより「御」の字が冠せられ御深井丸と称されるようになったという(『金城温古録』)。

近世における御深井丸内の主要施設には、西北隅櫓(戌亥隅櫓・清須櫓)、弓矢櫓等の防御施設のほか、

大筒蔵、御旅筒蔵、穴蔵等の銃砲および火薬の保管施設が曲輪西側を中心に確認される。本書の報告範囲である御深井丸東隅には「御番之衆」が昼夜詰める「御深井丸御番所」、「水道」等が存在したが(図2中央)、その他に主要な建物は存在せず、杉、松等の植栽空間が広がっていた(『金城温古録』)。なお、「御深井丸御番所」は『元禄十年御城絵図』(元禄10年(1697))、「水道」は『金城温古録』(江戸時代後期)ではじめて描かれている。

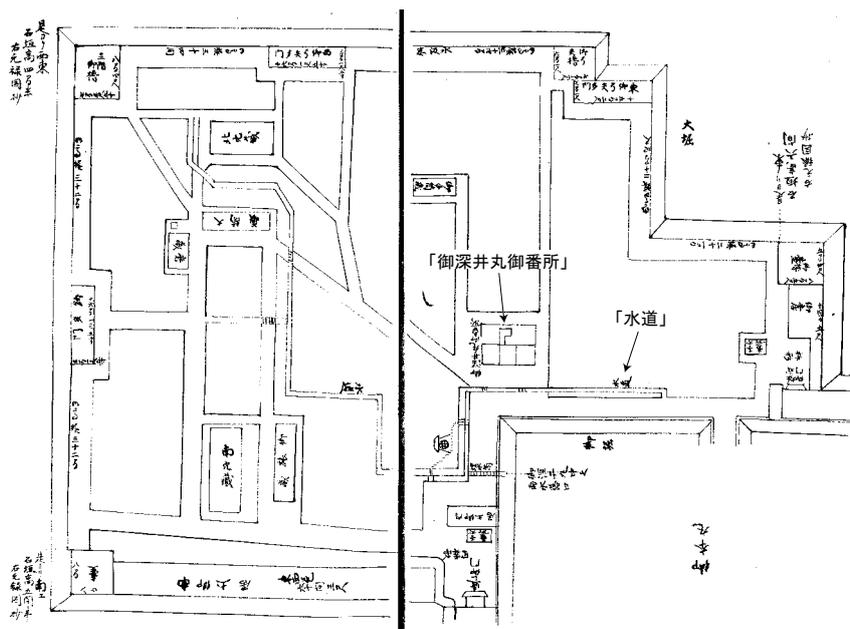


図2 御深井丸大体(『金城温古録』第24冊 名古屋市蓬左文庫蔵)に一部加筆

## 【近代以降】

慶応4年(1868年)、大政奉還により新政府が発足すると、明治2年(1869)、尾張藩は名古屋藩に再編され、明治4年(1871年)には廃藩置県によって名古屋藩と犬山藩が合併し名古屋県が発足した。藩の消滅後、名古屋城は陸軍所管となり、明治5年(1872年)には東京鎮台第三分営が本丸内に設置された。この時、御深井丸においては大筒蔵、御番所ほか近世期の建物群は大半が取り払われ、それに代わり陸軍用地として第一倉庫(乃木倉庫)、第二倉庫ほか各種倉庫群が設置された。

明治26年(1893)から明治43年(1909)の間、名古屋城の所管は陸軍省から宮内省へ順次移され、名古屋離宮と称された。この間、御深井丸では、『名古屋城離宮総図』に示されるように、陸軍の倉庫群は大半が撤去され、代わって園路や樹木が整備されていた。

昭和5年(1930)、名古屋離宮は名古屋市に下賜され、以後市民公園として公開された。太平洋戦争(1937～1945)中は、戦争末期に米軍が本土空襲を本格化し、名古屋市域もその標的となったことから、城内には観覧者や文化財保護のため防空設備が設置された。御深井丸にも防空壕、貯水池が設置されていたようである(『名古屋城防空設備資材配置図』)。戦時中、名古屋城は幾度かの空襲を切り抜けてきたものの、昭和20年(1945)5月11日、ついに天守をはじめとした諸施設が焼失した。

戦後の名古屋城は、天守等から焼け落ちた大量の瓦礫を処理するところから復興が始まった。その際の様子は当時の行政文書(「名古屋城内建物焼失跡地整理作業申請書進達二關スル件」(昭和21年)(1946)等に記載があり、残存状況の良い遺物は後世の参考として回収、保管されたが、多くは瓦礫として城内に存在した防空壕等に埋め立てられたか、スクラップとして売却された。本調査においてもその際に埋め立てられたとみられる遺物を多数検出した。

昭和25年(1950)、文化財保護法施行により、西北隅櫓等の重要文化財指定、昭和27年(1952)の史跡指定地一帯の特別史跡指定を経て、昭和34年(1959)には大小天守閣が鉄筋コンクリート造で外観復元された。御深井丸には、焼失時大天守穴蔵内に残存していた礎石類が移設され現在に至る。

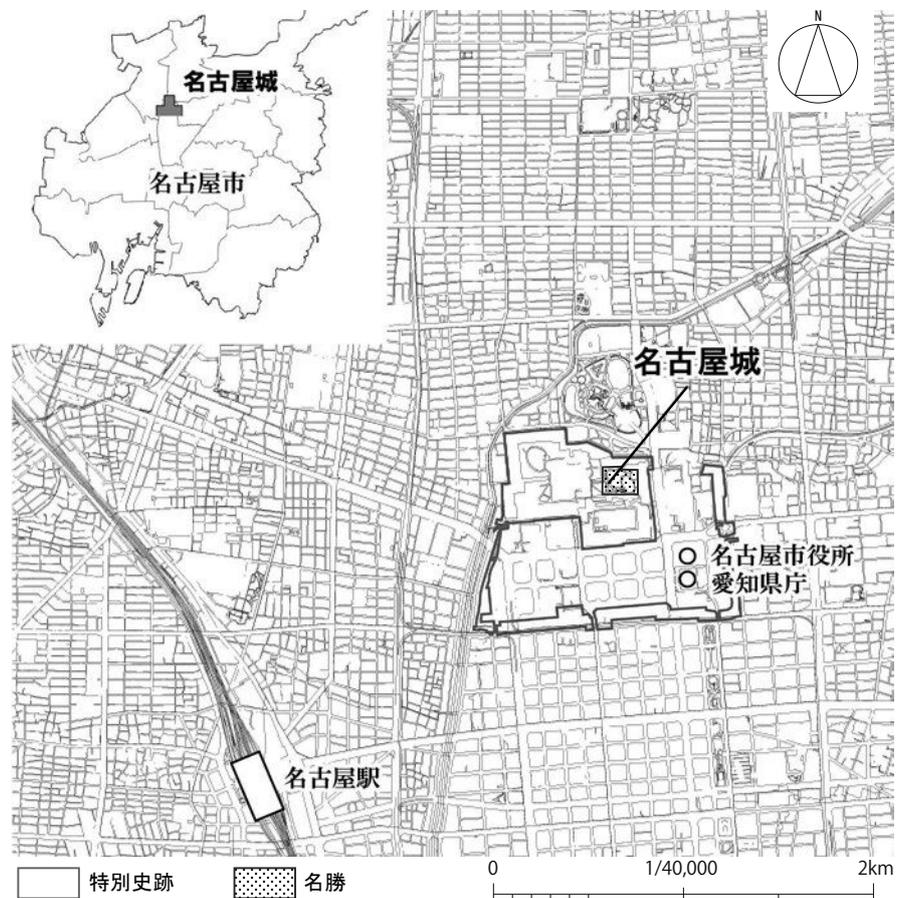


図3 名古屋城位置図

### 第3節 名古屋城周辺の既往の発掘調査

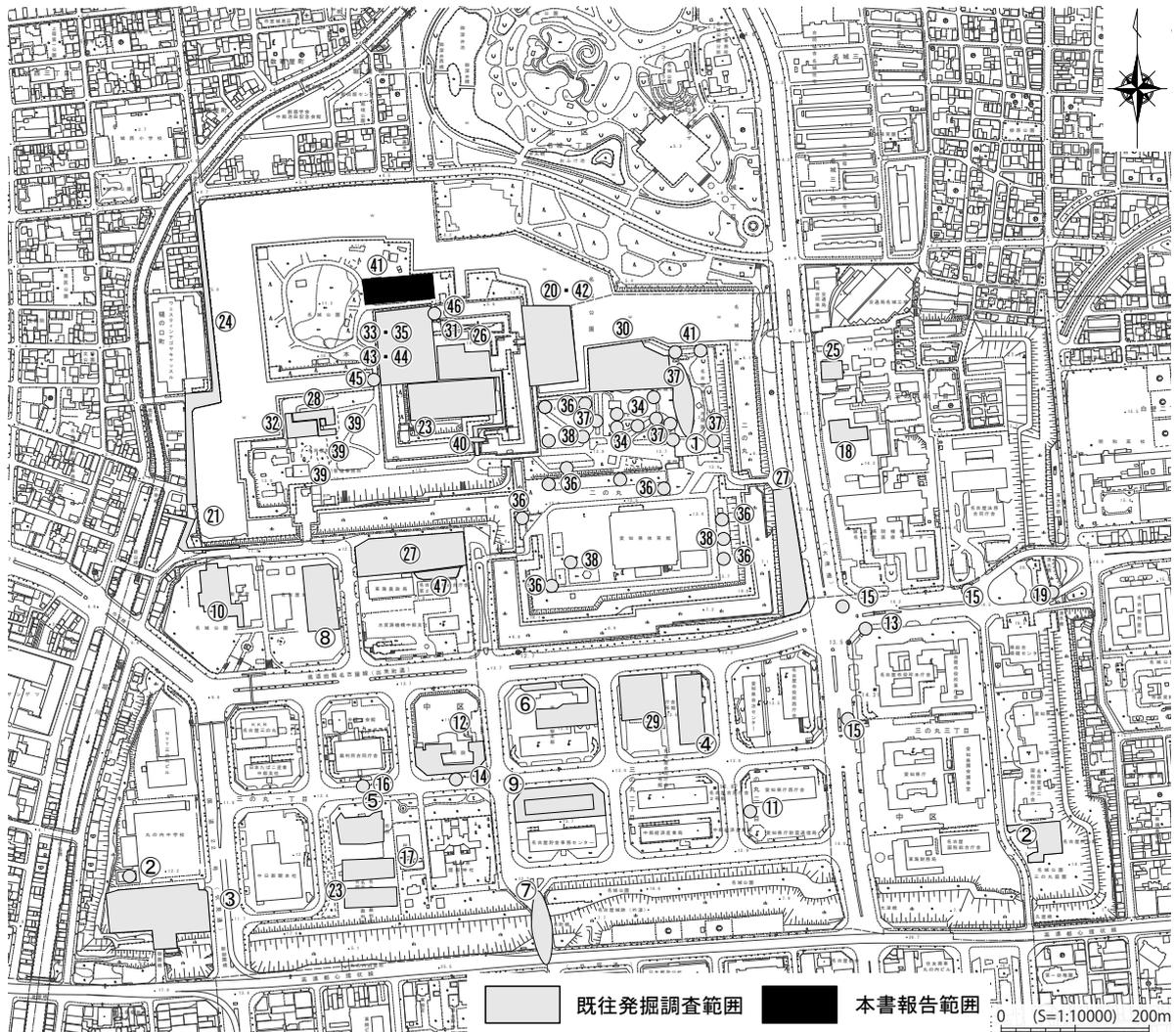


図4 名古屋城既往発掘調査位置図

名古屋城での発掘調査は、昭和50年(1975)の名古屋城二之丸庭園の調査を先駆けとして、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、名古屋城調査研究センターなどにより継続的に行われており、現在までに40か所以上の地点で調査が行われている。出土品については、調査主体の各機関にて保存されている。

特別史跡名古屋城跡では、本丸搦手馬出石垣や本丸御殿、西之丸の米蔵などの整備事業に伴って発掘調査が行われており、名古屋市教育委員会や令和元年(2019)年度の名古屋城調査研究センター設立以降は、当センターが主体となり城内各所で調査が進められている。遺構の残存状況は場所ごとに異なるが、多くの近世、築城期の遺構のほか、築城期の盛土によって埋め立てられた中世以前の遺構、遺物も確認されている。名勝二之丸庭園では、昭和50年(1975)の発掘調査成果から、昭和54年(1979)に遺構の露出展示を含めて、東庭園の整備が行われた。平成25年(2013)には名勝全域を整備していく計画が策定され、整備に先行するかたちで平成25年(2013)から毎年継続的に発掘調査が行われている。

名古屋城三の丸遺跡では、周知の埋蔵文化財包蔵地として、官公庁や裁判所、病院などの公共施設建設に伴って発掘調査が行われており、近世の武家屋敷や城下町に関する遺構、遺物が多く確認されている。

表1 名古屋城周辺の既往発掘調査一覧(1)

No.	発掘調査位置	調査年	事業主体	報告書等
①	名古屋城二之丸庭園	1975～1976	名古屋市教育委員会	『名古屋城二之丸庭園発掘調査概要報告書』(1976)
②	名古屋市公館(1次・3次) 丸の内中学校(2次)	1987～1988	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡-1,2,3次調査の概要』(1989)
③	愛知県図書館	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅰ』(1990)
④	名古屋第一地方合同庁舎	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅱ』(1990)
⑤	名古屋家庭簡易裁判所合同庁舎	1990～1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅲ』(1992)
⑥	愛知県警察本部	1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅳ』(1993)
⑦	本町門	1991	名古屋市教育委員会	『名古屋城本町門跡発掘調査概要報告書』(1992)
⑧	中部電力地下変電所	1992～1993	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡第4・5次発掘調査報告書-遺構編・遺物編』(1994)
⑨	愛知県三之丸庁舎	1993～1994	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅴ』(1995)
⑩	名古屋市能楽堂	1993～1994	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡第6・7次発掘調査報告書』(1995)
⑪	無線統制室	1995	愛知県教育委員会	『代替無線統制室建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(1997)
⑫	名城病院地点	1995～1996	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡第8・9次発掘調査報告書』(1997)
⑬	地下鉄出入口	1998	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡第10次発掘調査報告書』(1999)
⑭	下水道管築造	1999～2000	名古屋市教育委員会	『下水道工事に伴う埋蔵文化財報告書』(2000)
⑮	NTT電話工事	2000	(株)西日本電信電話 名古屋支店	『名古屋城三之丸遺跡-平成12年度NTT電話工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(2001)
⑯	ガス管理設工事	2001	(株)東邦ガス	『名古屋城三之丸遺跡-ガス管理設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(2002)
⑰	地方簡易裁判所庁舎	2001	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅵ』(2003)
⑱	国立名古屋病院	2002	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅶ』(2005)
⑲	東清水橋東交差点	2002	名古屋市教育委員会	『愛知県埋蔵文化財情報19』(2004)
⑳	名古屋城本丸搦手元御春屋門	2003・2005	名古屋市教育委員会	『特別史跡名古屋城跡本丸搦手馬出石垣修復工事発掘調査報告書』(2006)
㉑	名古屋城中下門跡	2003	名古屋市上下水道局 水道本部	『名古屋城跡中下門跡発掘調査報告書-西区樋ノ口町地内400号排水管布設工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書-』(2004)
㉒	地方簡易裁判所合同庁舎	2006～2007	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅷ』(2008)
㉓	名古屋城本丸御殿	2006～2008	名古屋市教育委員会	『本丸御殿跡発掘調査報告書-第1,2,3,4次調査-』(2009)
㉔	樋ノ口町線	2009～2011	名古屋市緑政土木局	『特別史跡名古屋城跡発掘調査報告書(2011)-市道樋ノ口町線整備事業に伴う埋蔵文化財調査の記録-』(2011)
㉕	名古屋医療センター職員宿舎	2011	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡-職員宿舎建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書-』(2011)

表2 名古屋城周辺の既往発掘調査一覧(2)

No.	発掘調査位置	調査年	事業主体	報告書等
②⑥	名古屋城本丸御殿	2012	名古屋城総合事務所	『本丸御殿跡発掘調査報告書-第5,6,7,8次調査-』(2012)
②⑦	名城公園宿泊所、二之丸東駐車場	2014	名古屋城総合事務所	『名古屋城三の丸遺跡 金シャチ横丁事業に伴う発掘調査報告書』(2015)
②⑧	名古屋城西之丸四番蔵	2014	名古屋市教育委員会	『特別史跡名古屋城跡発掘調査報告書(名古屋城西之丸)』(2016)
②⑨	名城東小公園	2015～2016	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡 第12次発掘調査(中央新幹線「名城非常口」地点)』(2017)
③⑩	名勝名古屋城二之丸庭園笹巻山・栄螺山・多春園・御文庫・二子山・権現山・兵舎跡・余芳・外縁	2013～2015	名古屋城総合事務所	『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書(第1次～第3次)』(2017)
③⑪	名古屋城本丸御殿	2015	名古屋市教育委員会	『本丸御殿跡発掘調査報告書-第9次調査-』(2017)
③⑫	名古屋城西之丸三番蔵	2016～2017	名古屋市教育委員会	『特別史跡名古屋城跡西之丸(第2次)』(2018)』
③⑬	名古屋城本丸内堀・小天守	2017～2018	名古屋城総合事務所	『特別史跡名古屋城跡 天守台周辺石垣発掘調査報告書』(2019)
③⑭	名勝名古屋城二之丸庭園栄螺山・北園池・風信・笠巻山・植木屋・前庭・旧将校集会所跡・枯池・外縁	2016～2018	名古屋城調査研究センター	『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第4次～第6次』(2020)
③⑮	名古屋城本丸内堀	2017～2018 2020～2021	2017～2018:名古屋城総合事務所 2020～2021:名古屋城調査研究センター	『特別史跡名古屋城跡天守台周辺石垣発掘調査報告書』(2019) 『特別史跡名古屋城跡本丸内堀発掘調査報告書(令和元年度・令和2年度)』(2023)
③⑯	名古屋城二之丸地区二之丸御殿・向屋敷・馬場	2018～2019	名古屋城調査研究センター	『名古屋城二之丸地区試掘調査報告書』(2021)
③⑰	名勝名古屋城二之丸庭園	2019～2023	名古屋城調査研究センター	『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第7次・第8次』2021年～2023年調査分は整理調査中
③⑱	名古屋城二之丸地区二之丸御殿・馬場	2020～2021	名古屋城調査研究センター	『特別史跡名古屋城跡未告示地区(二之丸)発掘調査報告書 第3次・第4次』(2023)
③⑲	名古屋城西之丸	2021～2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中
④⑩	表二之門附属土塀	2019～2023	名古屋城調査研究センター	『名古屋城表二の門試掘調査報告書 第1次・第2次調査』(2023) 2023年調査分は整理調査中
④⑪	名古屋城御深井丸・小天守西側	2020～2021	名古屋城調査研究センター	本報告書
④⑫	名古屋城本丸搦手馬出境門	2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中
④⑬	名古屋城本丸天守穴蔵	2021～2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中
④⑭	名古屋城本丸天守背面石垣	2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中
④⑮	名古屋城鶴の首(小天守西)水堀側石垣	2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中
④⑯	名古屋城不明門北土橋石垣	2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中
④⑰	三之丸天王坊後園	2023	名古屋城調査研究センター	整理調査中

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

本調査は、御深井丸における地下遺構の残存状況を確認するために実施したものである。

名古屋城総合事務所では、現天守閣の耐震性が低いこと等に対応するため、令和元年(2019)4月に、現天守閣を解体することについての現状変更申請を行った。それに対し、文化庁からは同年9月に、「指摘事項」が示された。その中で、本市が行った申請においては、解体工事やそれに伴う仮設物の設置が石垣等遺構に与える影響について、石垣や地下遺構などの文化財の詳細な現状把握に基づく考古学的検討が不足していることが指摘された。

具体的な点として、現天守閣の解体工事を実施する際に仮設構台・栈橋を設置することとされている御深井丸において、発掘調査が行われておらず、地下遺構の状況の把握がなされていないこと、解体工事が遺構の保存に影響を及ぼさない計画とするためには、地下遺構の状況を把握するための調査が必要であることなどが示された。こうした「指摘事項」を受けて、本市ではそれに対応するための各種の調査・検討を行ったが、本調査もその一つとして行ったものであり、御深井丸の対象地点の全域について地下遺構の遺存状況を把握するため、比較的小規模な調査区を、対象地域全体に設定して実施した。

### 第2節 御深井丸における既往の調査

試掘調査(平成19年(2007)12月17日～12月20日)

御深井丸では、遺跡の残存状況を確認するため、名古屋市文化財保護室により平成19年(2007)12月17日から同年12月20日まで試掘調査が行われている。

調査範囲は図5のとおりであり、計5か所(ア～オ地点)で掘削を行った。掘削の結果、すべての調査区で、地表より0.6～1mでは現代の整地土層の堆積を確認したが、イ～オ地点ではそれぞれ標高10.2～10.4mの範囲で近世の盛土層を検出した。オ地点では近世盛土層を部分的に掘削し、標高10.4mで黒色の中世遺物包含層を検出したが、その他に遺構は確認されなかった。出土遺物は、現代の整地土層中から近世の瓦片、エ地点の中世包含層からは13世紀代とされる完形の山茶碗(小皿)等が検出されている。

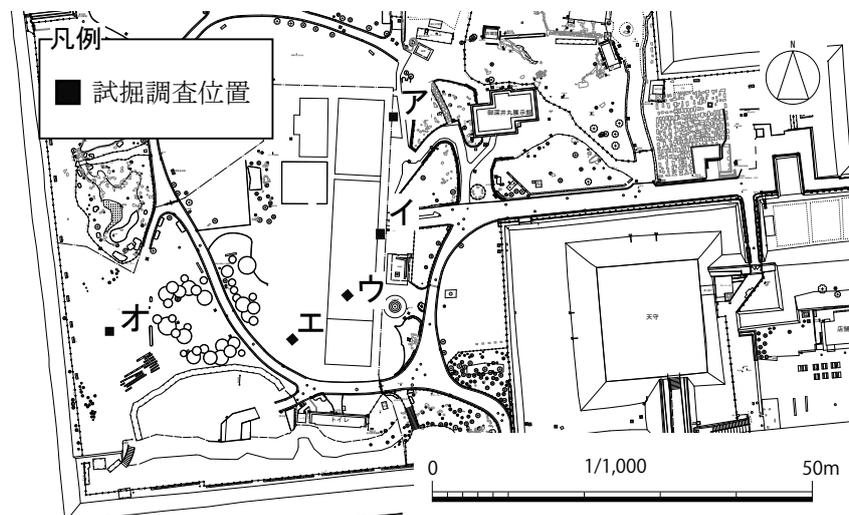


図5 平成19年度試掘調査位置図

### 第3節 調査指導体制

特別史跡名古屋城跡の全体整備や保存活用に関する事項について専門的見地から意見を聴取することを目的として、名古屋市では「特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議」を開催している。建造物や石垣などの専門的事項については「部会」を開催し、専門的視点からの指導、助言を得ている。また各部会ではオブザーバーとして文化庁調査官が出席し、文化庁に対しても適宜報告を行い指導、助言を得た。

今回の発掘調査では主に「全体整備検討会議」、「石垣・埋蔵文化財部会」（令和元年度までは「石垣部会」）で調査の指導、助言を得た。現在、構成員は以下12名である。

[特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議構成員]（敬称略 令和5年(2024)3月現在）

瀬口 哲夫	名古屋市立大学名誉教授	[座長]
丸山 宏	名城大学名誉教授	[副座長]
小濱 芳朗	名古屋市立大学名誉教授	
麓 和善	名古屋工業大学名誉教授	
三浦 正幸	広島大学名誉教授	
藤井 譲治	京都大学名誉教授	

[特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議石垣・埋蔵文化財部会構成員]（敬称略 令和5年(2024)年3月現在）

北垣聡一郎	石川県金沢城調査研究所名誉所長	[座長]
赤羽 一郎	前名古屋市文化財調査委員会委員長 元愛知淑徳大学非常勤講師	[副座長]
千田 嘉博	名古屋市立大学高等教育院教授・奈良大学特別教授	
宮武 正登	佐賀大学教授	
西形 達明	関西大学名誉教授	（令和2年(2020)3月20日開催 第34回石垣部会から）
梶原 義実	名古屋大学大学院教授	（令和2年(2020)7月2日開催 第36回石垣・埋蔵文化財部会から）

今回の調査に関わる部会は以下の日程で開催した。調査状況については、適宜報告し、部会の折や別途現地指導を受けた。

第38回石垣・埋蔵文化財部会 令和2年(2020)10月11日

調査予定位置、文献に残る御深井丸の建物の位置について説明した。古地図等を基に調査位置を再精査すべき等の指摘を受けた。

石垣・埋蔵文化財部会現地視察 令和3年(2020)3月4日 3月8日

石垣・埋蔵文化財部会構成員による現地指導により、調査成果の解釈について意見をいただいた。

#### 第4節 調査の経過

令和2年(2020)12月14日(月)～12月15日(火)

重機搬入。現場作業着手。名古屋城閉園後にC、I、O、P区上の路面舗装撤去作業を実施。

12月16日(水)

P区の路面舗装撤去完了。人力掘削に切り替え。既設管路を検出。

12月17日(木)

O区の路面舗装撤去完了。人力掘削に切り替え。既設管路、現代の攪乱を検出。

12月18日(金)

I、C区の路面舗装撤去完了。人力掘削に切り替え。既設管路(C区では2本)、現代の攪乱を検出。

12月21日(月)

P、O区で管路内埋土の掘削開始。

12月22日(火)

P区で管路内の掘削完了。管路断面から近世盛土の可能性がある土層を確認。ただし断面から遺物等は確認できず。O区で管路内の掘削完了。完掘。

12月23日(水)～12月24日(木)

近世盛土の可能性がある土層の堆積状況、遺構、遺物の有無等を確認するため、P区北西角を部分的に掘削。1mほど掘削し、築城期盛土層を検出したが、その他の遺構、遺物等は確認できず。

12月25日(金)

赤羽構成員視察。P区完掘。調査区を養生し年内の作業終了。

令和3年(2021)1月5日(火)

C、I区で管路内の掘削。I区は掘削完了。

1月6日(水)

C区、管路掘削継続。コンクリート片の大量出土により掘削難航。I区、舗装直下の土層で面的に精査。A、B、D、E、G、H、K、区での機械掘削準備。

1月7日(木)

A、B、D、F区で機械掘削を開始。

1月8日(金)

A区、表土層の機械掘削完了、人力掘削へ移行。C区管路掘削完了。

1月12日(火)

C区、土層観察用トレンチ設定、現検出面より約0.1m掘削。I区で土層断面図作成。

1月13日(水)

A区、旧表土(戦前)下の土層を検出。土層確認のため中央南北沿いにトレンチを設定、掘削。O、P区で土層断面図作成。

1月14日(木)

L区で表土除去開始、当日中に完了。

1月18日(月)

L区調査区北側にサブトレンチを設定、掘削。地表より約50cm下で近世遺物包含層を検出。

A区近世盛土を検出。サブトレンチを拡張し面的な検出を目指す。

1月19日(火)

H区表土掘削開始。

1月20日(水)

G区表土掘削開始。L区サブトレンチを拡張。

1月21日(木)

E区表土掘削開始。G区表土掘削完了。表土下から溶解した金属類、鉄釘、銅板を多量に検出。

1月22日(金)

F区、H区、表土掘削完了。同日中に表土直下の戦災由来土層まで掘削。K区表土掘削開始。L区近世盛土検出。

1月25日(月)～1月26日(火)

C、I、O、P区で埋戻し作業開始。G区、土層断面確認のため金属類等を多量に含む層を一部掘削。L区掘削。近世盛土上で検出作業。近世盛土は調査区北側で溝状に落ち込む。

1月27日(水)

J区表土掘削開始。E、L区検出面精査。E区では多量の瓦を検出。近代の瓦溜りか。

1月28日(木)

C、I、O、P区埋戻し完了。

1月29日(金)

J区表土除去完了。表土下の層に対しサブトレンチを設定し、掘削を進める。

2月1日(月)

A区遺構面精査、F、J区では近代層の掘削を継続。K区表土除去完了。近代層の掘削へ移行。

2月3日(水)

旧天守礎石展示場内のc、h、g区の表土除去開始。F区近世盛土層を検出。清掃後、完掘写真を撮影。

2月8日(月)

c、g区では硬く締まった粘質土層を検出。瓦を多量に含む。この層を近世層と判断し、面的に精査を行う。

2月10日(水)

M、N区で表土掘削開始。a区で表土掘削を開始するも、多量の礫により掘削が困難のため、約70cm掘り下げたところで調査終了。d区表土掘削開始。

2月15日(月)

降雨のため作業中止。午後に排水作業。

2月16日(火)

A区完掘、近世盛土以外の遺構は検出できず。N区表土掘削完了。近代層掘り下げ開始。E区瓦溜りの遺物取り上げ、その後掘削。i区で近世盛土層検出。

2月17日(水)

B区掘削開始。砂岩製の間知石列を検出。E区近世盛土層を面的に検出。完掘。b区表土除去完了、近世盛土層を検出。e区調査終了。

2月18日(木)

N区近世盛土層検出。h区調査終了。

2月19日(金)

H区近世包含層検出。完掘。M区表土掘削完了。近代層を掘り下げに移行。b、g、i区、近世盛土層を精査後完掘。

2月22日(月)

Q区表土掘削開始。

2月24日(水)

B区完掘。石列は1列(計3石)のみの検出にとどまった。対となる石列は確認できなかった。

3月3日(水)

M区近世盛土層検出。

3月4日(木)

赤羽、西形、梶原構成員視察。B、M区等を中心に案内。

3月5日(金)

瀬口座長、三浦構成員(全体整備検討会議)、千田構成員視察。

3月8日(月)

礎石展示場内の調査区より埋戻しを開始。

3月9日(火)

M区近世面精査完了。完掘。

3月12日(金)

Q区掘削完了。現代の盛土が厚く遺構検出には至らなかった。

3月15日(月)

石垣部会現地視察。

3月24日(水)

全調査区の埋戻し完了。調査終了。

## 第3章 発掘調査の成果

### 第1節 発掘調査の概要

#### 1 調査の目的

地下遺構の密度、遺構面の深さを把握するために、御深井丸、小天守西側に計26カ所の調査区を設定し発掘調査を行った。

#### 2 調査の方法

調査区の設定は、基本的に2×2mの調査区をできるだけ等間隔に設置した。絵図等から近世に「御番所」があった可能性があるA区は面的な遺構検出を目指し4×4mとし、御深井丸を東西に流れる「水道」があった可能性があるB、H、L区は、確実な遺構検出を目指し南北4m幅の調査区を設定した。

作業に当たっては、表土のみ機械掘削とし、表土より下は人力により掘削した。掘削下限は原則遺構の密度確認のため近世遺構面までとしたが、A区、P区、N区では土層の時期推定のため必要最小限の範囲で近世層を掘削した。掘削により検出された樹木の根は現地に残置した。

遺物は層序ごとに取り上げた。瓦については瓦当部があるもの、残存状況が良いもの(2辺以上残存)等のみを現地で選別し取り上げた。ただし、遺構内出土の瓦については上記に関わらず一片縦横2cm以下の細片以外は取り上げた。金属製品については、原則として全量取り上げたが、溶融、錆の進行により原形を留めないものはサンプル取り上げのみにとどめた。

なお、Q区は小天守台掘周辺調査(2018年度実施)の名称との区別のため一部の有識者会議ではQQ区と表記している。

#### 3 基本層序

以下の7つの土層を基本層序とした。

〔第Ⅰ層〕 現表土。層の厚さは5～25cmの厚さを測る。

〔第Ⅱ層〕 太平洋戦争時の名古屋空襲による焼土や炭、被熱痕のある遺物が特に多く含まれる土層。被災による純粋な堆積はほとんど無く、大半は戦後に敷き均された整地土と考えられる。層の厚さは5～10cmを測る。

〔第Ⅲ層〕 名古屋空襲前の表土である。暗色で薄く堆積する。調査区により戦後の整地で削り取られ、残存しない場合もある。近現代遺物(ガラス製品、煉瓦等)を含む。層の厚さは5～10cmを測る。

〔第Ⅳ層〕 近代を下限とする遺物を含む層。褐色で所により厚く堆積する。0.5～2cm程度の熱田層由来のシルトブロックを含む場合がある。層の厚さは10～40cmを測る。

〔第Ⅴ層〕 近世を下限とする遺物を含む層。褐色で2cm程度の熱田層由来シルトブロックを多量に含む。遺物は瓦片を少数含むのみである。瓦片を含むことから名古屋城竣工後に整地された層と考える。層の厚さは50cm以上を測る。

〔第Ⅵ層〕 瓦等の遺物を含まない人為層である。2cm程度の熱田層由来シルトブロックを多量に含み、最上位は非常に硬く締まった粘性のシルト質。築城時に御深井丸を整地した層と考える。

〔第Ⅶ層〕 熱田層。熱田台地を形成する土層である。本調査の掘削深度では確認していない。

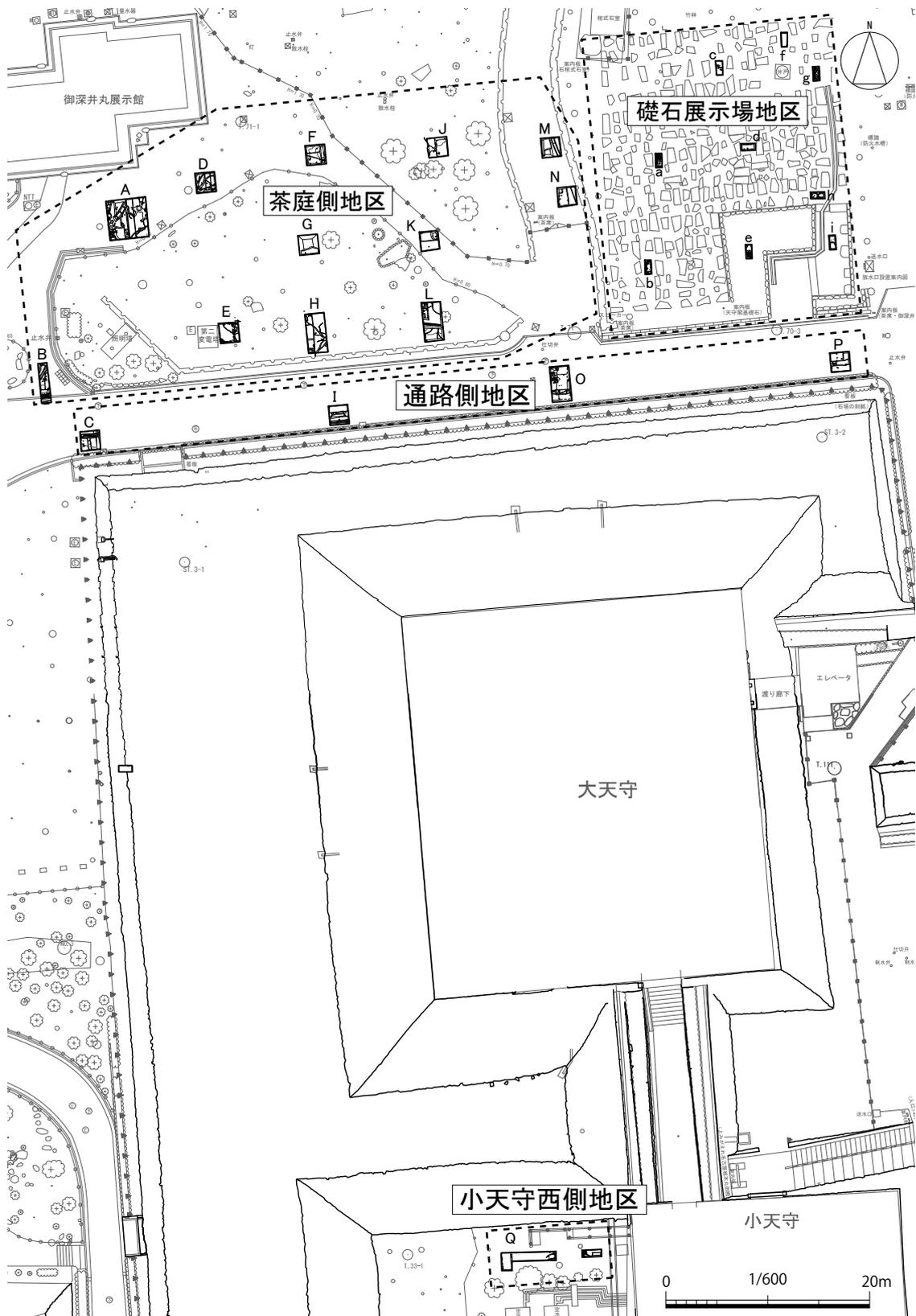


図6 発掘調査区配置図

## 第2節 発掘調査の成果

今回の調査区は、調査地点により茶庭側地区 (A、B、D～H、J～N)、通路側地区 (C、I、O、P)、礎石展示場地区 (a～i)、小天守西側地区 (Q) に大別される。各調査区の調査結果について地区ごとに記した。

### 1 茶庭側地区の調査

#### (1) A区

##### 調査区の概要

A区は、『元禄十年御城絵図』、『金城温古録』等の史料に記された「御番所」(御深井丸番衆、城代組同心らが昼夜常勤した番所)上に設定した調査区である。「御番所」遺構を面的に検出するため、調査区の形状は4m×4mの方形とした。しかしながら、本調査区周辺は樹木が群生し、城内管理用の各種配管が埋められていることから、実際に掘削できたのは調査区西半分の4m×1m程度であった。また、調査の進行にあたっては「御番所」遺構の有無を明確にするため根の影響のない調査区中央に幅0.5～1mのサブトレンチを設定し、掘削した。

掘削の結果、「御番所」の痕跡は確認できなかったが、近世盛土層の厚い堆積を確認した。

##### 層序

標高11.2mより第I層が堆積していた。同層下は調査区北西の陶管掘方(4層)をはじめとした戦後の公園整備の痕跡が著しいが、その範囲外において標高約11.05mで第III層が5～10cm程度の厚さで堆積した。層中にはタイル片等の遺物が含まれていた。明確な第IV層は確認できず、標高約11.0mより第V層が堆積する。第V層は7層から11層に細分されるが、土質が非常に類似することからほぼ同時期の堆積と考える。層の年代は、10層中から出土した御深井釉皿細片の生産年代から19世紀頃を下限と推定している。遺物の生産年代から、近世後期における盛土の痕跡と考える。

##### 出土遺物

A区ではコンテナ3箱分の遺物が出土した。その大半を占めるのは第I～第II層出土の、瓦、陶磁器、ガラス瓶等の近代遺物であった。第V層からは少数の瓦、陶器が出土した。

1は鍋である。陶器。口縁部のみ残存し、内外に鉄釉を施す。瀬戸・美濃産。7層出土。7層からは同様の鍋がもう2点出土している。2は火鉢である。陶器。口縁部のみ残存し、内外に鉄釉を施す。瀬戸・美濃産。8層出土。

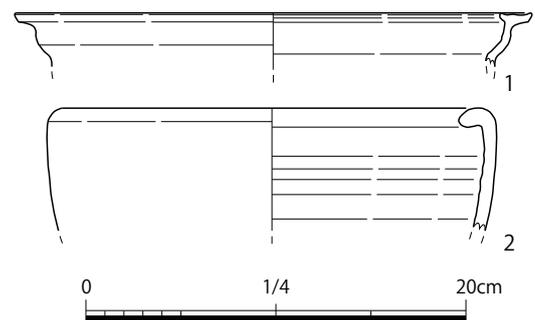


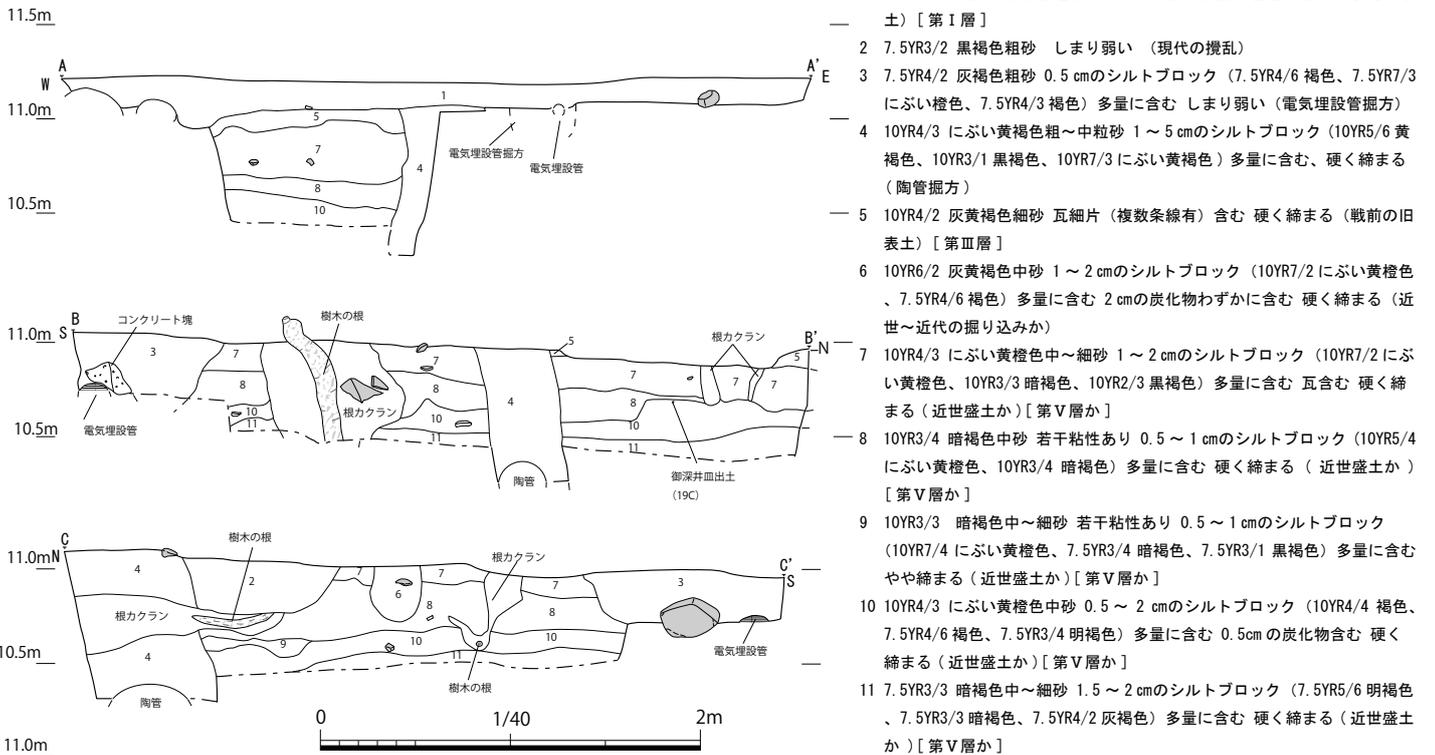
図7 A区出土遺物実測図

表3 A区出土遺物観察表(土器・陶磁器)

NO.	検出地点等	種別	器形	寸法(mm)			重量(g)	成形・調整	装飾		胎土色	生産地	生産年代	備考
				a	b	c			絵付 釉薬	文様				
1	7層	陶器	鍋	270	[28.5]	-	20	ロクロ成形	鉄釉	-	浅黄	瀬戸・美濃	19C前江戸期	-
2	8層	陶器	火鉢	(220)	[65]	-	43	ロクロ成形	鉄釉	-	浅黄	瀬戸・美濃	18C後～19C中江戸期	-

X=-90260.00  
Y=-24416.50

X=-90260.00  
Y=-24413.00



- 1 10YR5/3 にぶい黄橙色粗砂 2 cm大の細礫多量に含む 硬く締まる (表土) [第I層]
- 2 7.5YR3/2 黒褐色粗砂 しまり弱い (現代の攪乱)
- 3 7.5YR4/2 灰褐色粗砂 0.5 cmのシルトブロック (7.5YR4/6 褐色、7.5YR7/3 にぶい橙色、7.5YR4/3 褐色) 多量に含む しまり弱い (電気埋設管掘方)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色粗～中粒砂 1～5 cmのシルトブロック (10YR5/6 黄褐色、10YR3/1 黒褐色、10YR7/3 にぶい黄褐色) 多量に含む、硬く締まる (陶管掘方)
- 5 10YR4/2 灰黄褐色細砂 瓦細片 (複数条線有) 含む 硬く締まる (戦前の旧表土) [第III層]
- 6 10YR6/2 灰黄褐色中砂 1～2 cmのシルトブロック (10YR7/2 にぶい黄橙色、7.5YR4/6 褐色) 多量に含む 2 cmの炭化物わずかに含む 硬く締まる (近世～近代の掘り込みか)
- 7 10YR4/3 にぶい黄橙色中～細砂 1～2 cmのシルトブロック (10YR7/2 にぶい黄橙色、10YR3/3 暗褐色、10YR2/3 黒褐色) 多量に含む 瓦含む 硬く締まる (近世盛土か) [第V層か]
- 8 10YR3/4 暗褐色中砂 若干粘性あり 0.5～1 cmのシルトブロック (10YR5/4 にぶい黄橙色、10YR3/4 暗褐色) 多量に含む 硬く締まる (近世盛土か) [第V層か]
- 9 10YR3/3 暗褐色中～細砂 若干粘性あり 0.5～1 cmのシルトブロック (10YR7/4 にぶい黄橙色、7.5YR3/4 暗褐色、7.5YR3/1 黒褐色) 多量に含む やや締まる (近世盛土か) [第V層か]
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色中砂 0.5～2 cmのシルトブロック (10YR4/4 褐色、7.5YR4/6 褐色、7.5YR3/4 明褐色) 多量に含む 0.5 cmの炭化物含む 硬く締まる (近世盛土か) [第V層か]
- 11 7.5YR3/3 暗褐色中～細砂 1.5～2 cmのシルトブロック (7.5YR5/6 明褐色、7.5YR3/3 暗褐色、7.5YR4/2 灰褐色) 多量に含む 硬く締まる (近世盛土か) [第V層か]

図8 A区平面・断面図

## (2) B区

### 調査区の概要

B区は、『御本丸御深井丸図』、『金城温古録』等の古絵図、古記録に示された、「水道」上に設定した調査区である。「水道」は、上記の記録では本丸から御深井丸へ通じる水路として描かれているが、機能、構造等の記述は無く詳細は不明である。調査範囲周辺では来城者用通路に沿って東西に流れることが想定されたため、調査区の形状は南北4×東西1mとし、遺構の確実な検出を目指した。

調査の結果、「水道」側壁の可能性がある石列を調査区北辺で部分的に検出した。

### 層序

標高11.1m～10.95mより第Ⅰ層が約10cm程度堆積していた。その直下は調査区北半分で電気ケーブル掘方が確認され、その埋土である4層が50cm以上堆積していた。調査区北側においても、管路と推測される掘方(4'層)が後述の石列遺構【SB01】北側で確認される。

これらの掘方から外れた範囲では第Ⅱ層～第Ⅳ層は確認できず、標高約11.05mにおいて石列遺構【SB01】の掘方埋土と推測される5層、5層に削られた6層を検出した。5層、6層の年代は出土遺物が瓦のみであったことから近代以前と推測するが、詳細な時期は不明である。

さらに、6層下の堆積状況を確認するため部分的に掘削を行ったところ、標高10.8mで土質から第Ⅴ層(7層、8層)と推定される土層を検出した。このうち、7層は8層を掘りこむため、土坑等の遺構の可能性はあるが、調査目的に鑑みて今回は平面上の検出のみにとどめた。

### 遺構【SB01】

石材4石からなる石列である。前述の6層を掘りこんだ5層の中に設置されている。石材は「河戸石」と呼ばれる中粒砂岩で、岐阜県養老山地および船木山等で産出される(田口ほか2019)。石材の形状は角錐型で「間知石」と呼ばれるものに近い。

矢穴等の加工痕は無いが、表面にはハツリの痕跡が見られる。1石ずつの大きさにばらつきがあるものの、石面は縦約30cm、横45cmの横長である。奥行きは未掘削のため不明である。

今回の調査では1列のみの検出であったが、石列掘方自体は石列より南へ80～90cm程度の幅があり、本来はもう一対の石列とともに水路を構成していた可能性がある。3層中からは間知石1石および石材破片が多数検出されており、近代、現代の園路造成の過程で一部が改変されている。

石列が埋まる5層の堆積状況、5層に掘

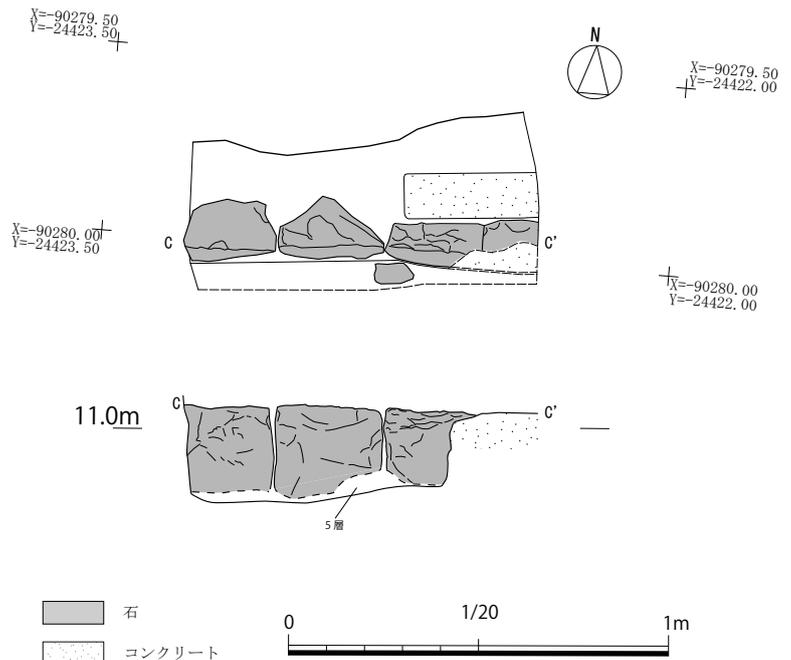
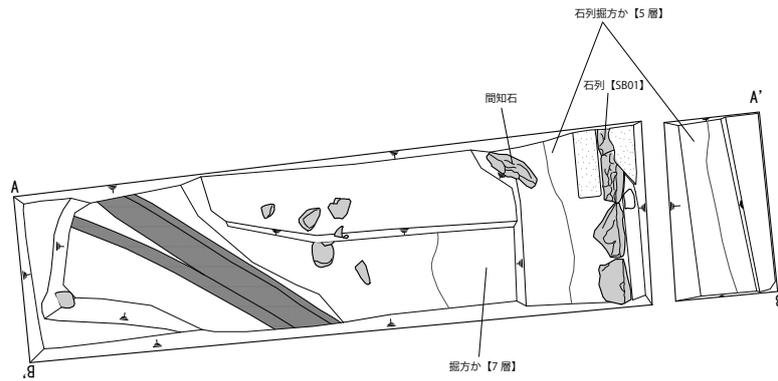


図9 B区石列遺構【SB01】平面・立面図

X=-90276.50  
Y=-24421.50

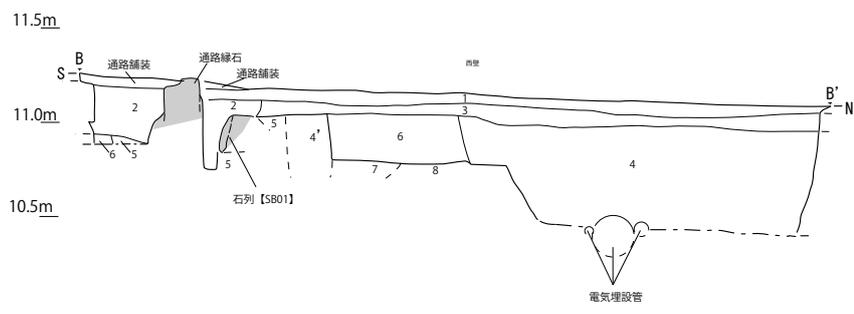
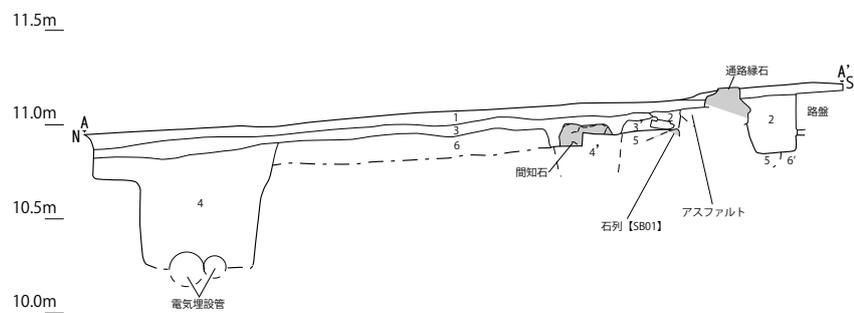


X=-90281.00  
Y=-24421.50

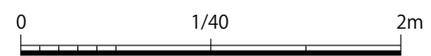


X=-90276.50  
Y=-24424.50

X=-90281.00  
Y=-24424.50



- 石
- 電気埋設管
- コンクリート



- 1 2.5Y5/3 黄褐色粗粒砂 1～5 cmの礫多量に含む 硬く締まる (表土) [第I層]
- 2 10YR3/3 暗褐色中粒砂 2cmの礫多量に含む やや締まる (碎石舗装直下の碎石層)
- 3 10YR4/4 褐色細粒砂 2.5Y5/4黄褐色のシルト多量に含む 硬く締まる (現代盛土)
- 3' 10YR2/3 極暗褐色粗粒砂 コンクリート片、2 cm程度の礫多量に含む (現代盛土)
- 4 10YR3/4 暗褐色中粒砂 若干粘性あり 2～5 cmのシルトブロック (3層と同じ) 含む 1cmの炭化物 (10YR1.7/1 黒色) わずかに含む 硬く締まる (電気ケーブル掘方)
- 4' 10YR3/4 暗褐色中粒砂 2～5 cmのシルトブロック (2.5Y6/6 明黄褐) 多量に含む 硬く締まる (4層と同じレベルで検出。管路掘方)
- 5 10YR2/3 暗褐色中～細粒砂 若干粘性あり 0.5～1 cmのシルトブロック (10YR6/3 にぶい黄橙色、7.5YR2/2 黒褐色、2.5Y4/4 オリーブ褐色) 多量に含む 0.5～1 cmの砂ブロック (10YR4/6 オリーブ褐色) わずかに含む 締まり弱い (石列掘方または石材抜き取り痕)
- 6 7.5YR4/4 暗褐色中粒砂 1～2、5 cmのシルトブロック (5層と同じ) 含む 1 cmの炭化物片 (4層と同じ) わずかに含む 瓦含む 硬く締まる (近世盛土か) [第V層か]
- 7 10YR3/4 暗褐色中粒砂 2～3 cmのシルトブロック (6層と同じ) 多量に含む 硬く締まる (不明掘方・近世か)
- 8 7.5YR3/4 暗褐色中～細粒砂 0.5～1 cmのシルトブロック (10Y5/4 にぶい黄橙色) こくわずかに含む 瓦わずかに含む 硬く締まる (近世盛土か) [第V層か]

図 10 B区平面・断面図

り込まれた6層から江戸時代後期生産とみられる瀬戸・美濃産磁器(遺物番号3)が出土していることから、SB01は江戸時代後期頃の設置と推測される。

#### 出土遺物

B区ではコンテナ1箱分の遺物が出土した。第I層では石列撤去時に生じたと思われる砂岩の細片が複数確認された。第V層からは少数の瓦、陶磁器が出土したがすべて細片であった。

3は蓋である。磁器。体部は丸みをもち、直径約10cmと小型である。合子等の蓋か。外面は呉須による絵付けがみられる。瀬戸・美濃産。6層出土。

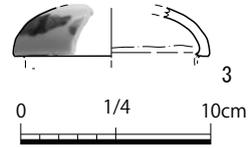


図 11 B区出土遺物実測図

表 4 B区出土遺物観察表(土器・陶磁器)

NO.	検出地点等	種別	器形	寸法(mm)			重量(g)	成形・調整	装飾		胎土色	生産地	生産年代	備考
				a	b	c			絵付 釉薬	文様				
3	6層	磁器	蓋	(103)	[26]	-	10	ロクロ成形	呉須 透明釉	不明	白	瀬戸・美濃	19C中～江戸期	-

### (3) D区

#### 調査区の概要

遺構の残存状況を確認するために設置した調査区である。近世盛土層を検出したが、それ以外の遺構は検出されなかった。

#### 層序

標高11.25mより第I層(1層)を確認し、直下に焼土ブロック、戦災による被熱瓦を多量に含む第II層(3層、4層)が堆積する。層自体は硬く締まり10cm程度と薄い。

第II層下には標高11.1m付近で第III層(5層)、標高11.05mで第IV層(6層)、標高10.8mで第V層(7層)を検出した。第V層は約20cm堆積し、1～3cmの地山由来のシルトブロックを多量に含み硬く締まる。

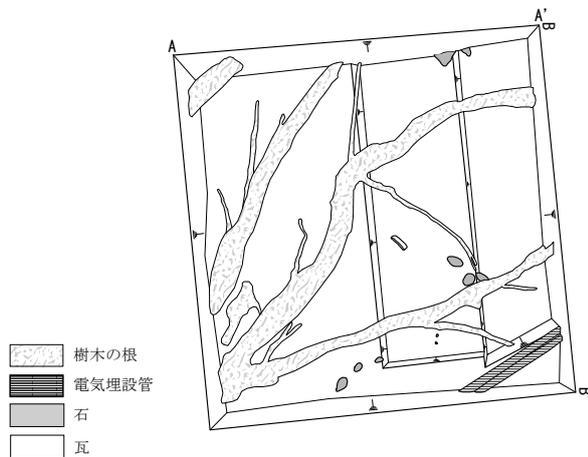
#### 出土遺物

D区ではコンテナ1箱分の遺物が出土した。大半は第I層から出土した瓦細片、ガラス製品等であり実測可能な遺物は出土しなかった。

X=-90257.50  
Y=-24408.50



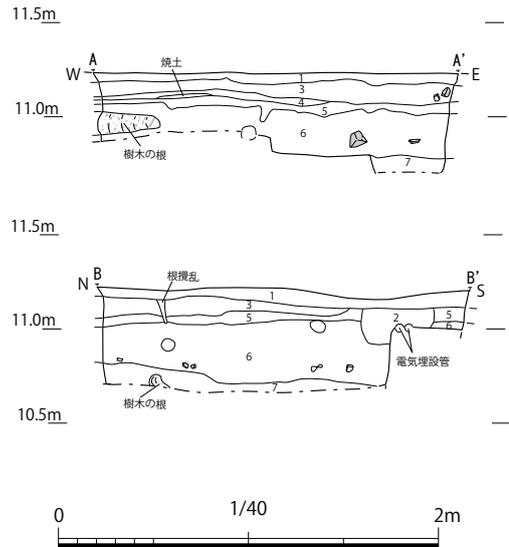
X=-90257.50  
Y=-24406.00



- 樹木の根
- 電気埋設管
- 石
- 瓦

X=-90260.50  
Y=-24408.50

X=-90260.50  
Y=-24406.00



- 1 7.5YR4/2 灰褐色細礫 締まり弱い(表土)【第I層】
- 2 7.5YR4/3 褐色細粒砂 1～3cmの細礫 締まり弱い(管路掘方)
- 3 10YR4/6 にぶい黄褐色粗粒砂 0.5～1cm程度の砂ブロック(10YR黄褐色、10YR6/6明黄褐色)、焼土ブロック(7.5YR4/6褐色)わずかに含む 硬く締まる(戦災層敷き均し層か)【第II層】
- 4 2.5YR3/2 黒褐色粗粒砂 2cm程度の細礫多量に含む 焼土(7.5YR4/6褐色)を局所的、帯状に含む やや締まる(戦災層敷き均し層か)【第II層】
- 5 10YR3/2 黒褐色中粒砂 硬く締まる(戦前の旧表土か)【第III層】
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色粗～中粒砂 0.5～1cmのシルトブロック(10YR6/4にぶい黄褐色)わずかに含む 3～5cm程度の礫わずかに含む 瓦含む やや締まる(近代盛土か)【第IV層】
- 7 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂 1～3cmのシルトブロック(5YR2/2黒褐色、10YR6/4にぶい黄褐色)多量に含む 瓦含む 硬く締まる(近代盛土か)【第V層】

図12 D区平面・断面図

#### (4) E区

##### 調査区の概要

遺構の残存状況を確認するために設置した調査区である。調査区東辺では近代の廃棄土坑、近世盛土層を検出したが、それ以外の遺構は検出されなかった。

##### 層序

標高11.6mより第I層(3層)が10cm程度堆積する。第II層、第III層は確認できず、第I層下に栈瓦片、ガラス片等を含む第IV層(5、7～8層)が確認できる。標高11.3m付近では7層を掘りこむ6層[SK01]が確認された。[SK01]下の第V層は8層、9層に細分され、8層は瀬戸・美濃産の広東碗、灰釉丸碗等近世後期の遺物を含み、9層はシルトブロックを多量に含み硬く締まる。

##### 遺構【SK01】

近代盛土層7層を掘りこんだ深さ30～40cmの近代の土坑状遺構である。土坑内には栈瓦片が多量に含まれ、近代における瓦廃棄の痕跡とみられる。瓦が廃棄された詳細な時期は不明だが、状態の良い瓦が多数出土したこと、出土は瓦のみで他の部材(漆喰等)や被熱瓦が含まれないことから、濃尾地震、名古屋空襲等の天災、戦災に伴う廃棄ではなく、近代以降の建物撤去等に際する廃棄と推定する。

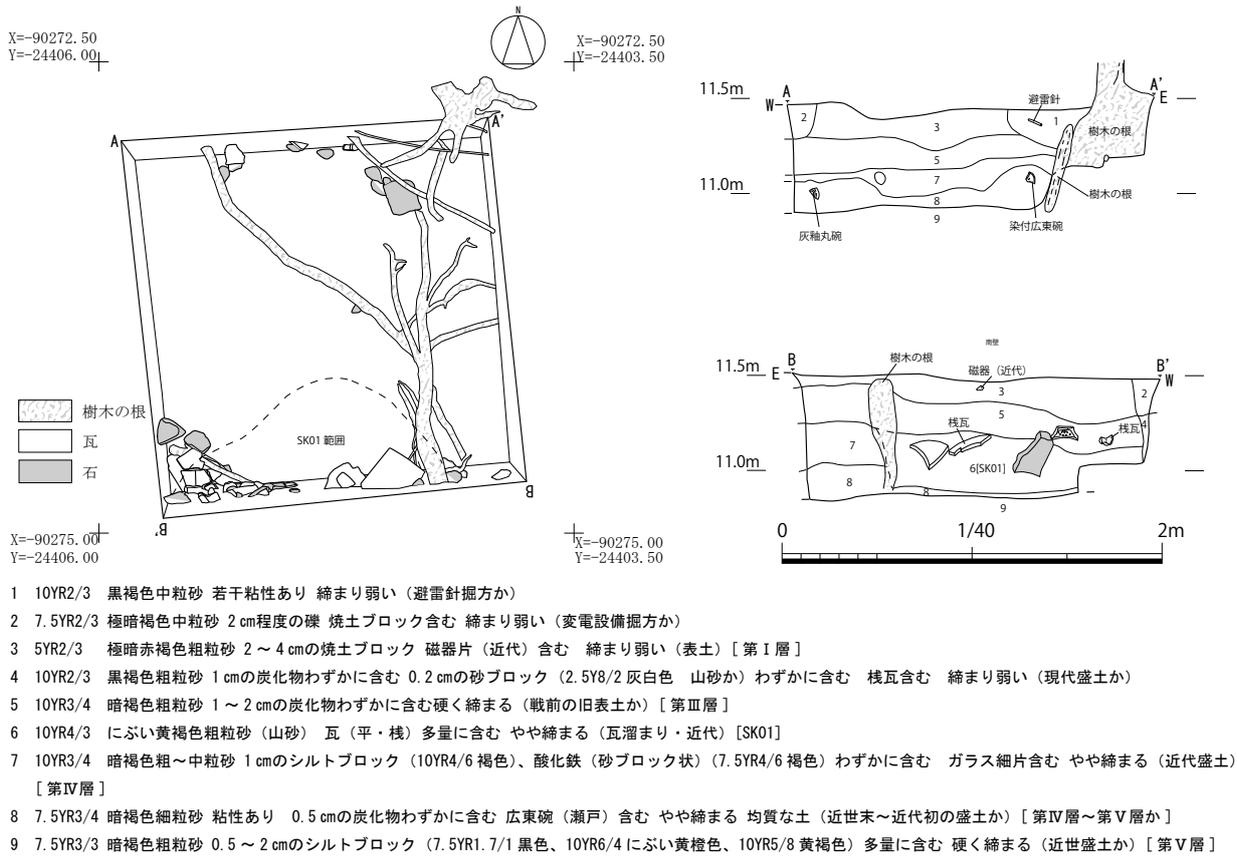


図 13 E 区平面・断面図

### 出土遺物

E区ではコンテナ10箱分の遺物が出土した。6層 [SK01] からは多量の瓦が出土したほか、8層から少数の陶磁器片が出土している。

4は広東碗である。炆器。高台部~体部の一部のみ残存する。呉須により内外に圈線、見込には五弁花が描かれている。8層出土。5は碗である。陶器。高台部~体部の一部のみ残存する。内外は灰釉により施釉されるが、高台部は露胎である。8層出土。6は徳利である。陶器。肩部のみ残存し、内外は灰釉で施釉されている。外面には沈線が施され、呉須で文様が描かれている。6層 [SK01] 出土。7は鍋である。口縁部のみ残存し、内外に鉄釉を施す。A区出土の1と同様のものである。8層出土。以上4、6~7は瀬戸・美濃産か。

8は軒平瓦である。瓦当には唐草文が描かれ、所謂東海式と呼ばれるものである。瓦当表面にはキラコが付着する。瓦当部は顎貼り付けである。6層 [SK01] 出土。9、10は軒棧瓦である。9は丸瓦部のみ残存。瓦当はいずれも十二珠左巻三巴文、64平瓦部には唐草文が残る。瓦当にはキラコが付着する。10は6層 [SK01]、62は7層出土。

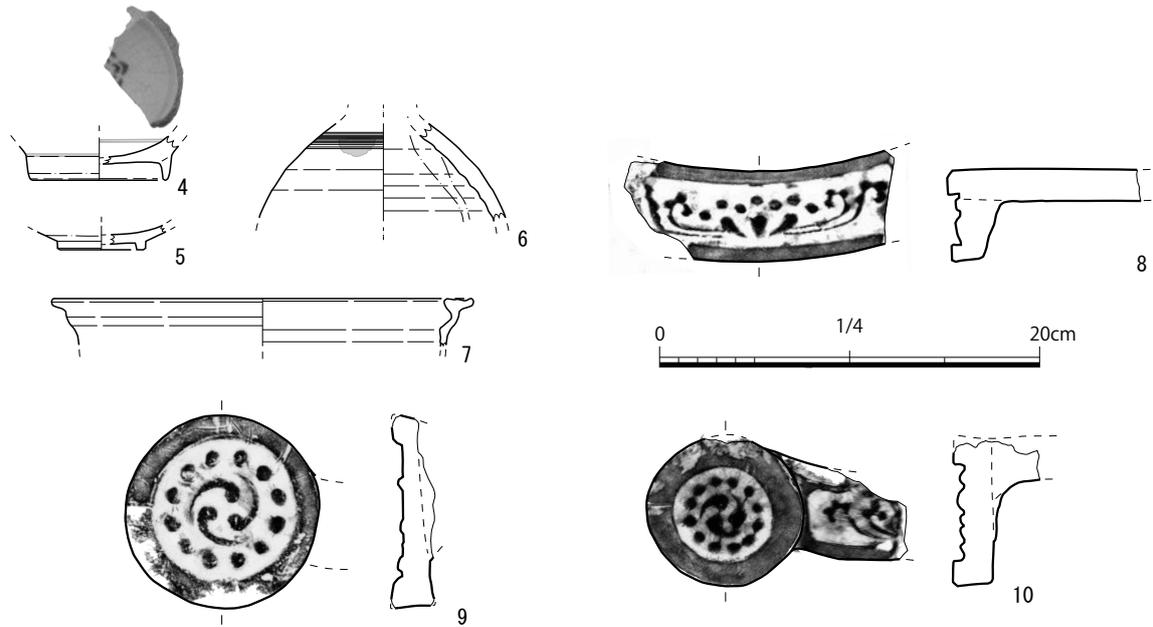


図 14 E 区出土遺物実測図

表 5 E 区出土遺物観察表（土器・陶磁器）

NO.	検出地点	種別	器形	寸法 (mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色	生産地	生産年代	備考
				a	b	c			絵付 釉薬	文様				
4	8層	炆器	碗	-	[23]	(70)	25	ロクロ成形	呉須 透明釉	圏線 見込みに五弁花	にぶい黄橙	瀬戸・美濃	19C前～中 江戸期	広東碗
5	8層	陶器	碗	-	[13]	(44)	16	ロクロ成形	灰釉	-	にぶい橙	-	-	-
6	6層 [SK01]	陶器	德利	-	(52)	-	71	ロクロ成形	呉須 灰釉	-	-	瀬戸・美濃	19C後 江戸 期～明治期	-
7	8層	陶器	鍋	(220)	[25]	-	86	ロクロ成形	鉄釉	-	浅黄	瀬戸・美濃	19C前 江戸 期	-

表 6 E 区出土遺物観察表（瓦）

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	製作技法	備考
			a	b	c	d					
8	6層 [SK01]	軒平瓦	[142]	48	[100]	17	562	東海式唐草文	灰黄 灰	-	瓦当部分にキラコ付着
9	7層	軒棧瓦	[102]	[103]	[23]	-	201	丸瓦部：左巻三巴文 平瓦部：欠損	灰 灰～灰白	-	瓦当部分にキラコ付着
10	6層 [SK01]	軒棧瓦	[136]	[78]	[45]	-	339	丸瓦部：左巻三巴文 平瓦部：唐草文	灰 灰白	-	瓦当部分にキラコ付着

(5) F区

調査区の概要

遺構の残存状況を確認するために設置した調査区である。近世盛土層を検出、調査区東側に幅約50cmのサブトレンチを設定し、近世盛土の堆積状況を確認した。近世遺構は検出されなかった。

層序

標高11.05mより第I層が5cm程度堆積し、その下に戦災時の焼土を敷き均した第II層、同じく戦災焼土処理のためと思われる土層(4層～6層)が続く。その下層では樹木の根や鉛管の攪乱を経て、標高10.85mで土質が均質な盛土層(13層、15層)、標高10.5m～10.6mで熱田層由来のシルトブロックを含む盛土層(17層、18層)を検出した。ともに瓦細片が少量出土したのみで時期の特定は困難だが、土質の特徴から13、15層を第IV層、17、18層を第V層と推定した。

出土遺物

F区からはコンテナ2箱分の遺物が出土した。第I層～第IV層出土の瓦細片が多数を占め、第V層からは少数の瓦細片が出土したのみであった。瓦の他には、第I～II層からガラス製品、陶器が少数出土している。

11は甕である。陶器。口縁部付近のみ残存する。体部は外反し、口縁部は断面三角形となる。内外には自然釉が付着している。15層出土。

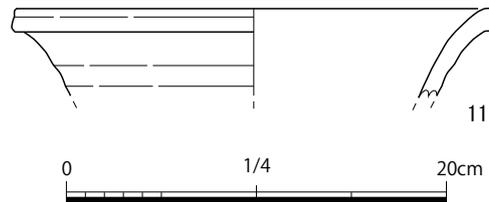
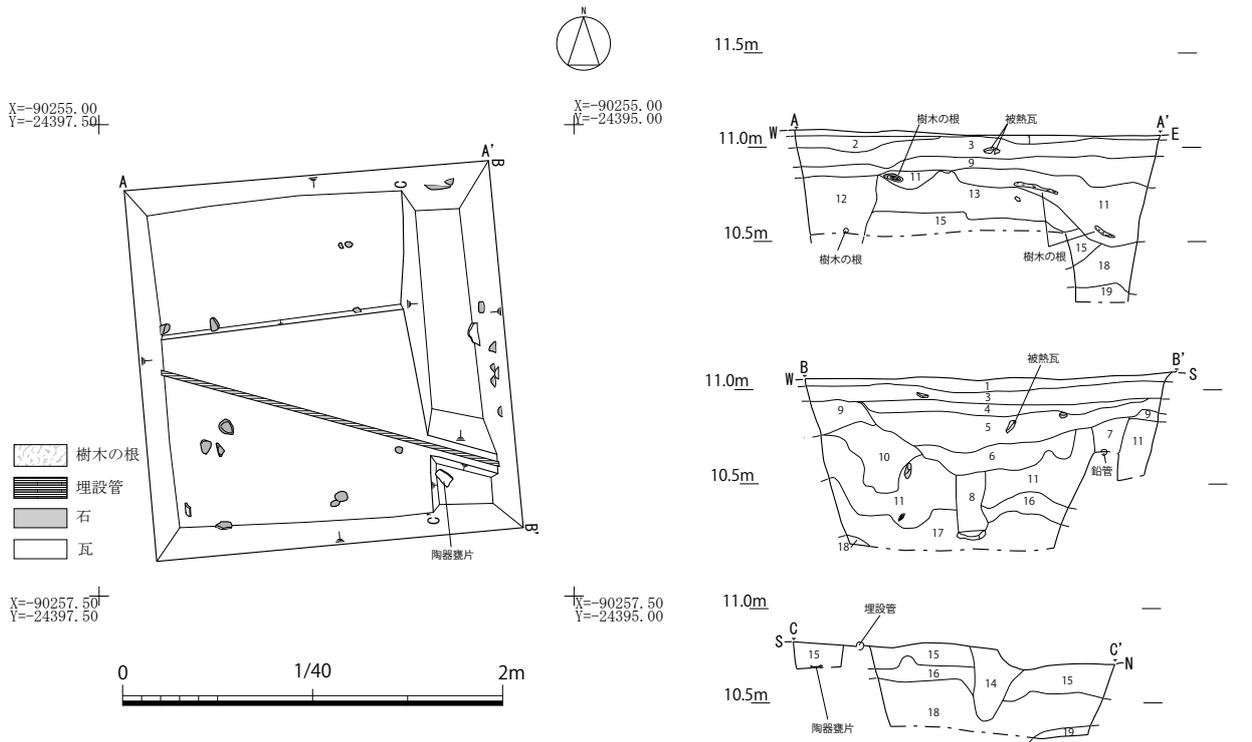


図15 F区出土遺物実測図

表7 F区出土遺物観察表(土器・陶磁器)

NO.	検出地点	種別	器形	寸法(mm)			重量(g)	成形・調整	装飾		胎土色	生産地	生産年代	備考
				a	b	c			絵付 釉薬	文様				
11	15層	陶器	甕	-	[23]	(70)	21	ロクロ成形	-	-	灰黄褐	猿投窯か	古代	内外に自然釉付着



- 1 5Y3/2 オリーブ黒色粗粒砂 2 cm程度の礫多量に含む 硬く締まる (表土) [第I層]
- 2 10YR3/2 黒褐色粗粒砂 粗粒砂 (10YR5/6 黄褐色) を帯状に含む 硬く締まる (現代層)
- 3 7.5YR3/3 暗褐色粗粒砂 1 cm程の焼土 (5YR4/6 赤褐色)、1 cm程のシルトブロック (2.5YR2/1 赤黒色、10YR5/4 にぶい黄褐色) わずかに含む 硬く締まる (戦災層敷均し層) [第II層]
- 4 10YR3/3 暗褐色中～細粒砂 若干粘性あり 焼土 (3層と同じ)、0.5～1 cm程のシルトブロック (3層と同じ) 含む 瓦含む やや締まる (戦災層敷均し層) [第II層]
- 5 7.5YR2/2 黒褐色粗粒砂 1～2 cmの焼土含む 1～2 cmのシルトブロック (5YR1.7/1 黒色、7.5YR7/2 明褐灰色)、2 cmの漆喰含む 層下層に黒色細粒砂 (10YR2/2 黒褐色、炭化物由来?)、被熱瓦、ガラス製品 (牛乳瓶等) 含む やや締まる (戦災層敷均し層) [第II層]
- 6 7.5YR3/3 暗褐色中～細粒砂 2～0.5 cmのシルトブロック (2.5YR1.7/1 黒色、10YR5/4 にぶい黄褐色) 2 cm程度の砂ブロック (10YR4/6 褐色) 多量に含む 1 cmの焼土 (3層と同じ) わずかに含む 0.1 cmの炭化物 (10YR1.7/1 黒色) やや締まる (戦災層敷均し層) [第II層]
- 7 7.5YR3/2 暗褐色中粒砂 2 cmの炭化物 (10YR2/2 黒褐色) 1 cmのシルトブロック (10YR5/4 にぶい黄褐色、2.5YR1.7/1 黒色) 含む やや締まる (埋設管掘方)
- 8 10YR3/2 暗褐色中粒砂 2 cmのシルトブロック (7.5YR2/1 黒色)、4 cmの砂ブロック (10YR4/4 褐色) わずかに含む 焼土 (3層と同じ) (混入可能性あり) わずかに含む ガラス細片含む 底に瓦あり やや締まる (近代の柱穴か)
- 9 7.5YR2/2 黒褐色粗粒砂 (若干粘性あり) 0.5 cm程度の焼土 (3層と同じ) わずかに含む 1 cm程度のシルトブロック (2.5YR6/4 にぶい黄色、2.5YR1.7/1 黒褐色) 含む 1 cmの炭化物 (10YR1.7/1 黒色) わずかに含む やや締まる (戦前の旧表土) [第III層]
- 10 7.5YR3/2 黒褐色粗粒砂 0.5～1 cmの砂ブロック (7.5YR5/8 明褐色)、0.5 cmのシルトブロック (9層と同じ) わずかに含む やや締まる (根攪乱か)
- 11 7.5YR3/3 暗褐色粗粒砂 2 cmの炭化物 (他層と同じ) わずかに含む 1 cmの焼土わずかに含む 3 cmのシルトブロック (7.5YR4/6 褐色) わずかに含む 締まり弱い (根攪乱か)
- 12 7.5YR3/3 暗褐色中粒砂 0.5 cmのシルトブロック (10YR4/3 にぶい黄褐色、7.5YR2/1 黒色) 含む 焼土わずかに含む 締まり弱い (根攪乱か)
- 13 7.5YR3/4 暗褐色中粒砂 0.5～1 cmの炭化物 (他層と同じ) わずかに含む 3 cmの砂ブロック (10YR4/4 褐色) わずかに含む やや締まる 瓦含む (近代盛土か) [第IV層か]
- 14 10YR3/4 暗褐色中～細粒砂 1 cmのシルトブロック (10YR3/3 暗褐色) わずかに含む 1 cmの炭化物 (他層と同じ) わずかに含む 瓦わずかに (一片) 含む やや締まる (近代～現代の柱穴か)
- 15 7.5YR3/4 暗褐色細粒砂 (粘性あり) 5～10 cmのシルトブロック (7.5YR5/6 明褐色+7.5YR2/1 黒色) 多量に含む 10 cmの砂ブロック (10YR5/8 黄褐色) わずかに含む 瓦含む やや締まる (近世盛土の最上層か) [第V層か]
- 16 10YR2/3 黒褐色細粒砂 2～4 cmの砂ブロック (10YR4/6 褐色) 多量に含む 硬く締まる (近世盛土の一部か) [第V層か]
- 17 7.5YR4/6 褐色極細粒砂～粗粒シルト 粘性強い 0.5 cmの炭化物 (他層と同じ) わずかに含む やや締まる (地山由来土、近世盛土か) [第V層か]
- 18 10YR2/3 黒褐色中粒～細粒砂 若干粘性あり 0.5～5 cmのシルトブロック (10YR7/3 にぶい黄褐色、10YR6/2 灰黄褐色) 多量に含む 硬く締まる (近世盛土か?) [第V層か]

図 16 F 区平面図・断面図

(6) G区

調査区の概要

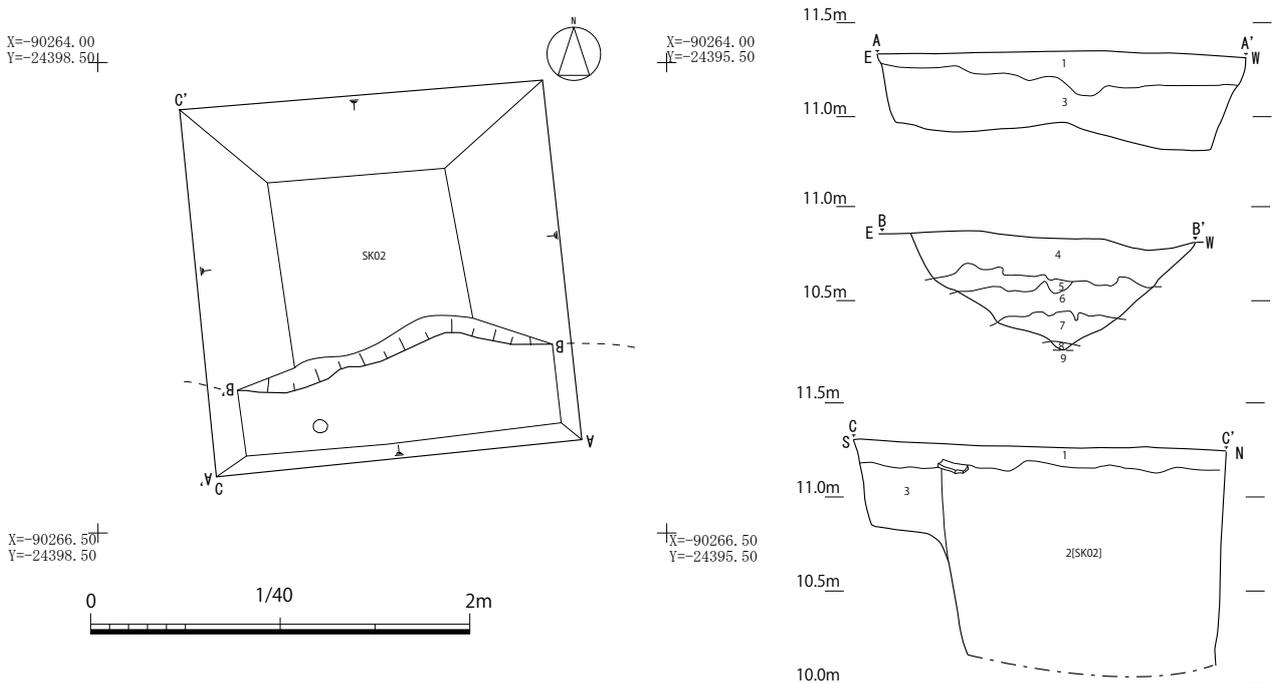
遺構の残存状況を確認するために設置した調査区である。名古屋空襲時に焼失した天守部材の廃棄土坑を検出し、天守に使用されていた可能性がある銅板類を含む多数の金属製品が出土した。

層序

表土直下の標高 11.15m より、戦災による被熱遺物を多量に含む廃棄土坑埋土 (2層) が約 1m 堆積していた。安全性の問題により 1m 以上の掘削は行わなかったが 2層自体はさらに下まで続いた。廃棄土坑の壁面 (調査区南壁) からは、表土下の標高約 11.2 ~ 11.3m より土質から近代盛土 (第IV層) と推測される層 (3層)、標高 10.85m より同じく土質から近世盛土 (第V層) と推測される層 (4 ~ 9層) を検出した。熱田層 (第VII層) は検出されず、標高 10.0m まで近世盛土層が続くことを確認した。

遺構【SK02】

表土 (第I層) 近代層、近世層を掘りこんだ土坑である。調査区南側で土坑南端の肩を捉えたのみで、完掘にも至らなかったため土坑自体の平面形状は不明であるが、深さは 1m 以上を測る。土坑内には後述する装飾金具類のほか、焼けて変形した金属塊が多数埋められており、戦災遺物の廃棄土坑と考える。



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂 1 mm程度のシルトブロック (10YR7/6 明黄褐色) わずかに含む やや締まる (表土) [第I層]
- 2 7.5YR3/3 暗褐色粗粒砂 焼土、被熱瓦、鉄釘 (和・洋)、銅板多量に含む 締まり弱い (戦災遺物廃棄土坑) [SK02]
- 3 10YR3/4 暗褐色中～細粒砂 2 cm程度のシルトブロック (10YR4/6 褐色) わずかに含む 混入物少なく均質 締まり弱い (近代盛土か) [第IV層]
- 4 5YR3/3 暗赤褐色中粒砂 1 ~ 2 cm程度のシルトブロック (10YR2/2 黒褐色、2.5Y4/4 オリーブ褐色、10YR6/3 にぶい黄橙色) 多量に含む 硬く締まる (近世盛土か) [第V層]
- 5 10YR2/3 黒褐色粗粒砂 cm程度のシルトブロック (10YR6/3 にぶい黄橙色、10YR2/2 黒褐色) わずかに含む 硬く締まる (近世盛土か) [第V層]
- 6 10YR2/3 黒褐色細粒砂 1 cm程度のシルトブロック (10YR6/3 にぶい黄橙色、10YR2/2 黒褐色) 多量に含む 3 ~ 6 cmの砂ブロック (10YR5/6 黄橙色、10YR5/3 にぶい黄褐色) わずかに含む 硬く締まる (近世盛土か) [第V層]
- 7 7.5YR2/3 極暗褐色細粒砂 0.5 ~ 2 cm程度のシルトブロック (7.5YR4/4 褐色) わずかに含む やや締まる (近世盛土か?) [第V層]
- 8 7.5YR3/3 暗褐色中粒砂 1 ~ 3 cm程度のシルトブロック (10YR4/4 褐色、2.5Y5/4 黄褐色) わずかに含む やや締まる (近世盛土か) [第V層]
- 9 10YR5/4 にぶい黄褐色粗粒シルト 1 cmのシルトブロック (10YR8/2 灰白色) わずかに含む 硬く締まる (近世盛土) [第V層]

図 17 G区平面・断面図

土坑内から多数出土した金属類が [SK02] に廃棄された経緯は、当時の史料に詳細が残されている。昭和 21 年 (1946)2 月 16 日に、文部大臣への進達を名古屋市長から愛知県知事へ依頼した「名古屋城内建物焼失跡地整理作業施行申請書進達ニ關スル件」には、昭和 21 年 (1946)3 月 1 日から同 30 日の期間で天守閣焼失跡地内における整地のためとして、「天守閣礎石内部及当地盤以上ニ堆積スル金属類、瓦、破片石礫焼土ヲ全部別紙図面ノ位置ニ運搬埋設或ハ堆積処理」を行うとされていた。本史料と合わせて綴られていた図面 (図 18) を基に瓦礫類の埋設位置を確認すると、G 区付近に「金属瓦片、石礫焼土埋設堆積箇所」(図 18 中の△印) が設定されていることが分かる。以上の点から、本遺構は昭和 21 年 3 月 1 日～30 日の間に、天守閣内の焼土、瓦礫を埋設するために掘削された土坑と推定できる。

なお、これらの戦災復旧事業に際して集積された金属類は、建物附属の金属製品のうち「原形ヲ認め得ル物」は「将来ノ参考品」として回収、現在まで保存されているが(「建物焼失跡地整理作業其ノ他申請ニ關スル件」)、それ以外は「全部金屑トシテ金属回収統制組合ニ賣却処分ノ見込み」(「名古屋城内建物焼失跡地整理作業施行申請書進達ニ關スル件」)とされたようである。本遺構から出土した金属製品も釘等を除いて原形を留めるものは少なく、本来は売却の対象とされたものが、何らかの理由で埋設され現在に至ったものと考えられる。

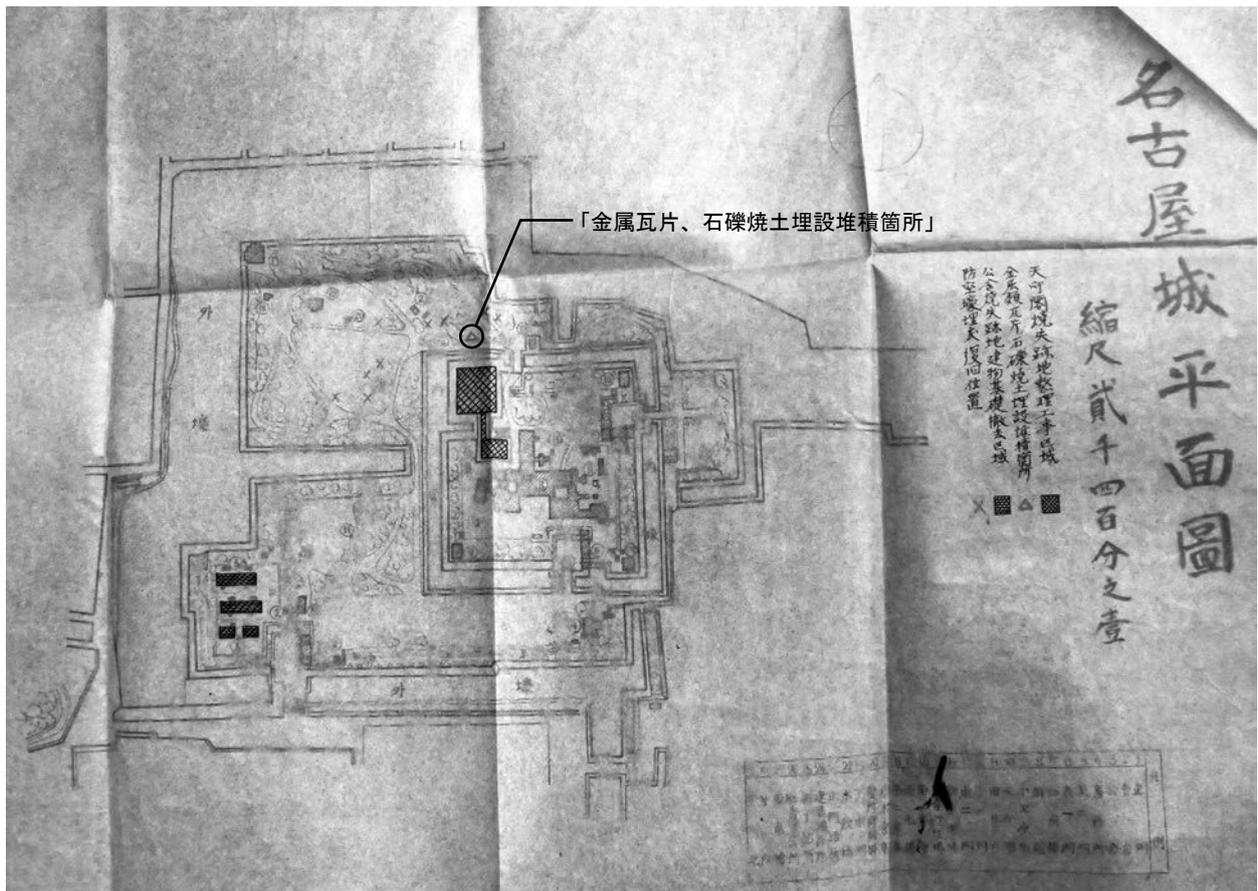


図 18 『名古屋城内建物焼失跡地整理作業施行申請書進達ニ關スル件 名古屋城平面図』(名古屋市蔵)に一部加筆

## 出土遺物

G区からはコンテナ3箱分の遺物が出土した。第1層およびSK02出土の金属製品等が多数を占める。

12は六葉釘隠しの一部。銅製。遺物上方はカーブし「猪目」の一部が残る。表面には彫金により裏葵紋が施されるほか、魚々子が緻密に打ち込まれている。魚々子の直径は裏葵紋外側では約1.2mm、裏葵紋内では約0.6mmであった。詳細は第3節で後述するが、名古屋城総合事務所所蔵の天守焼損金具、『昭和実測図』と比較した結果、天守四層に設置されていたものと寸法、意匠が類似することが明らかになった。本資料については、L区出土の53、54とともに遺物表面に対する蛍光X線分析を行った結果、微量の金が検出された(詳細は4章第2節参照)。本来は表面に金鍍金が施されていた可能性がある。2層[SK02]出土。

13、14は装飾金具の一部である。銅製。表面にのみ彫金で文様が描かれている。14は文様の線内に点状の凹凸があり、たがねで彫りこんだ痕跡が残る。2層[SK02]出土。15は銅板である。表面に2つの鋳穴があり、銅製の鋳を差し込むことで2枚の銅板を固定している。2層[SK02]出土。

16は鉄板である。表面に約5cmの間隔で釘穴が2つ穿たれている。遺物の形状、釘穴の間隔は『昭和実測図』に描かれた天守窓格子の包み鉄板によく類似する。2層[SK02]出土。

17～36は釘、鋳である。17～19は巻頭釘。鉄製。釘上部を丸めて頭部を形成している。断面形状は方形、17、18は全長は3～4cm程度と短い。19は全長7.65cmであり、出土遺物中にもこのサイズが多く見られた。ともに錆がほとんど付着せず、欠損もわずかであった。1層出土。20は平頭釘。鉄製。頭部が円形で現在の洋釘に近い形だが、胴部の断面は方形である。2層[SK02]出土。

21～25は鋳。銅製。いずれも平頭で21、22は全長5.6、4.9cm、23～25は2.3、2.8、3cmであった。後者は今回出土した釘、鋳類の中で最も小型である。胴部断面は、22、25は方形、21、23、24は六角形である。銅製のため天守を彩る銅製破風や銅瓦の留め具と推定される。23、25は1層、21、22、24は2層[SK02]出土。

26～28は丸釘。鉄製。胴部に対し頭部が大きく、半円状となる。胴部断面は方形、頭部の形状から門金具の一種か。2層[SK02]出土。29～31は鋳。鉄製。1層出土。32は釘。鉄製。胴部に対し頭部が小さく、断面厚は13mmと厚い。1層出土。

33～36は大型の巻頭釘。鉄製。33～35は全長17.4～23cm、瓦釘か。36は全長32cmとさらに長い。胴部に対し頭部が小さいため、天守、御殿等の建物の木部に使用された釘の可能性はある。33は1層、34～36は2層[SK02]出土。

37は合釘、38は鏝、ともに鉄製である。39は板状の鉄製品である。表面には釘穴が2つ穿たれ、一方には平頭釘が刺さる。16と同じく包み金具の一種とみられるが、断面形状がひだ状となる点に相違がある。37は1層、38、39は2層[SK02]出土。

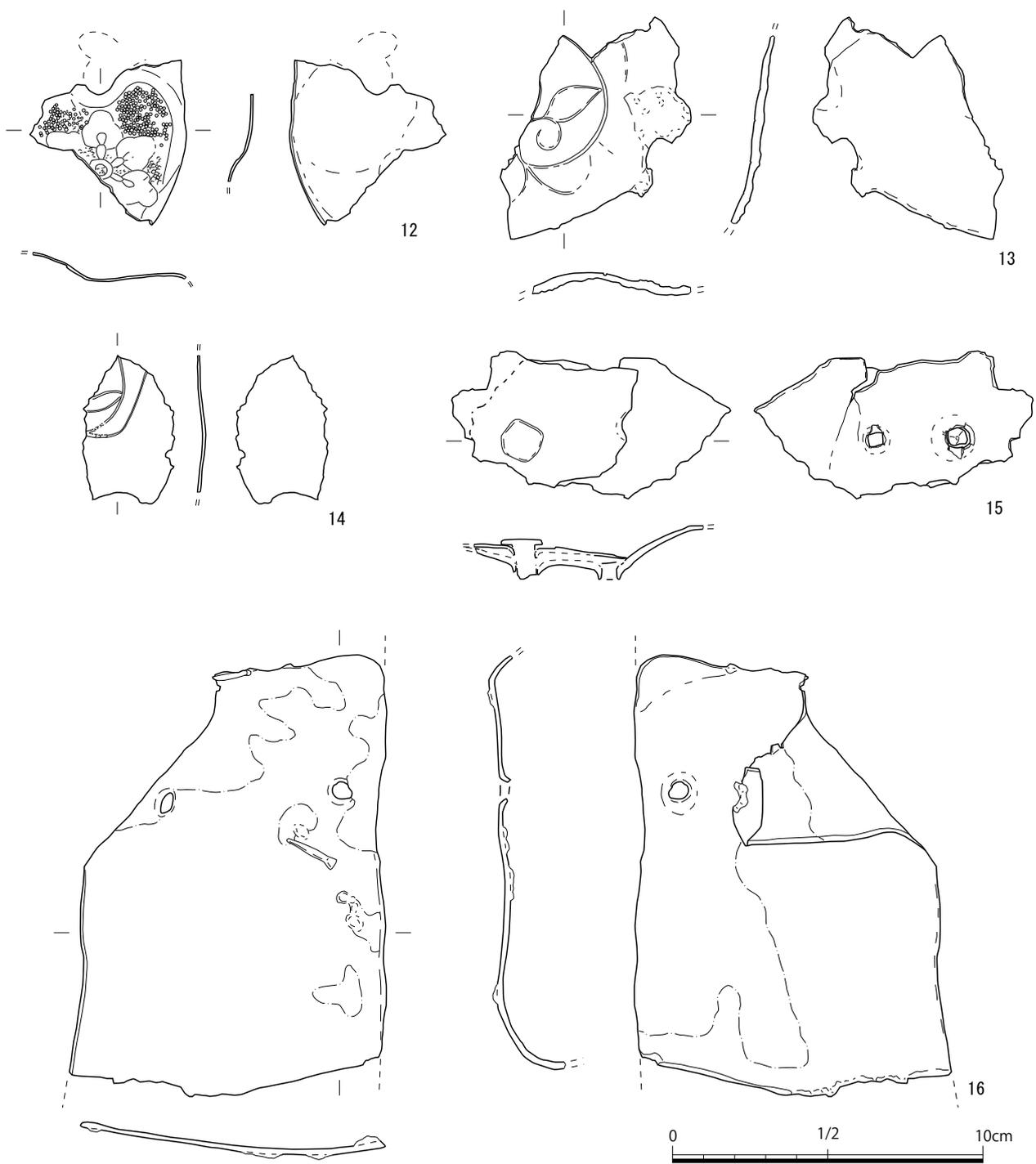


图 19 G 区出土遗物实测图 1

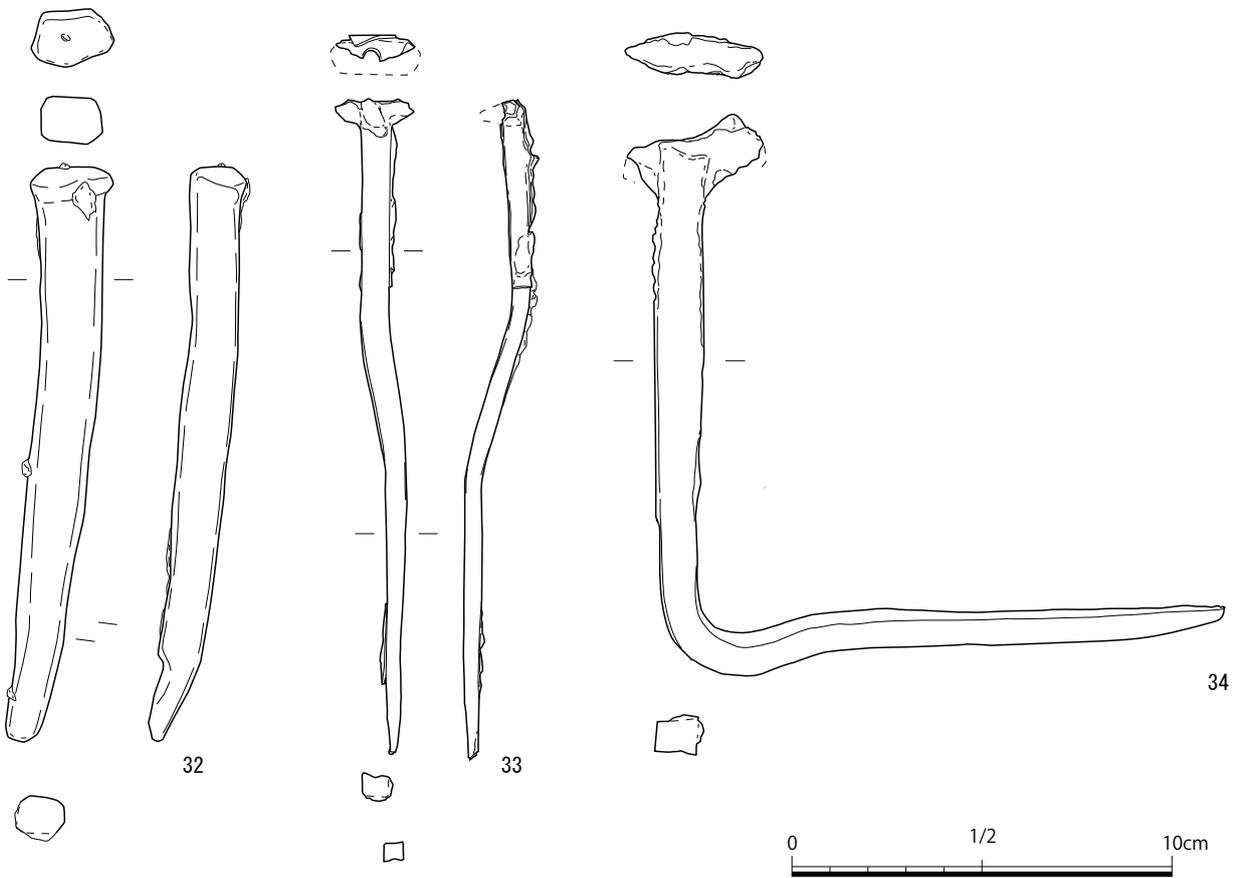
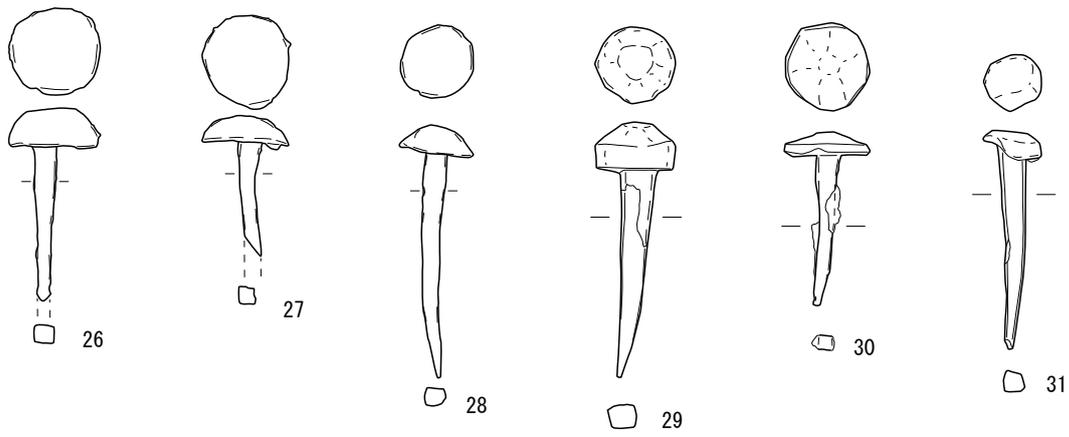
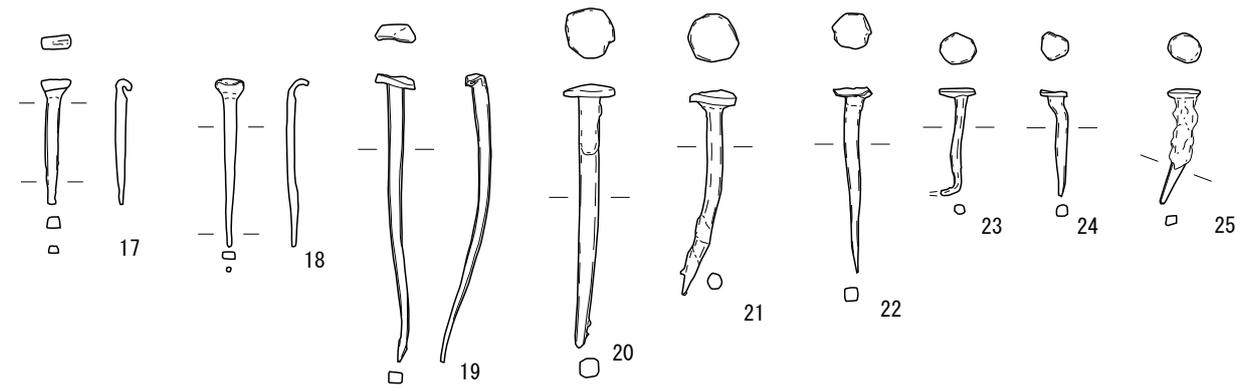


图 20 G 区出土遗物实测图 2

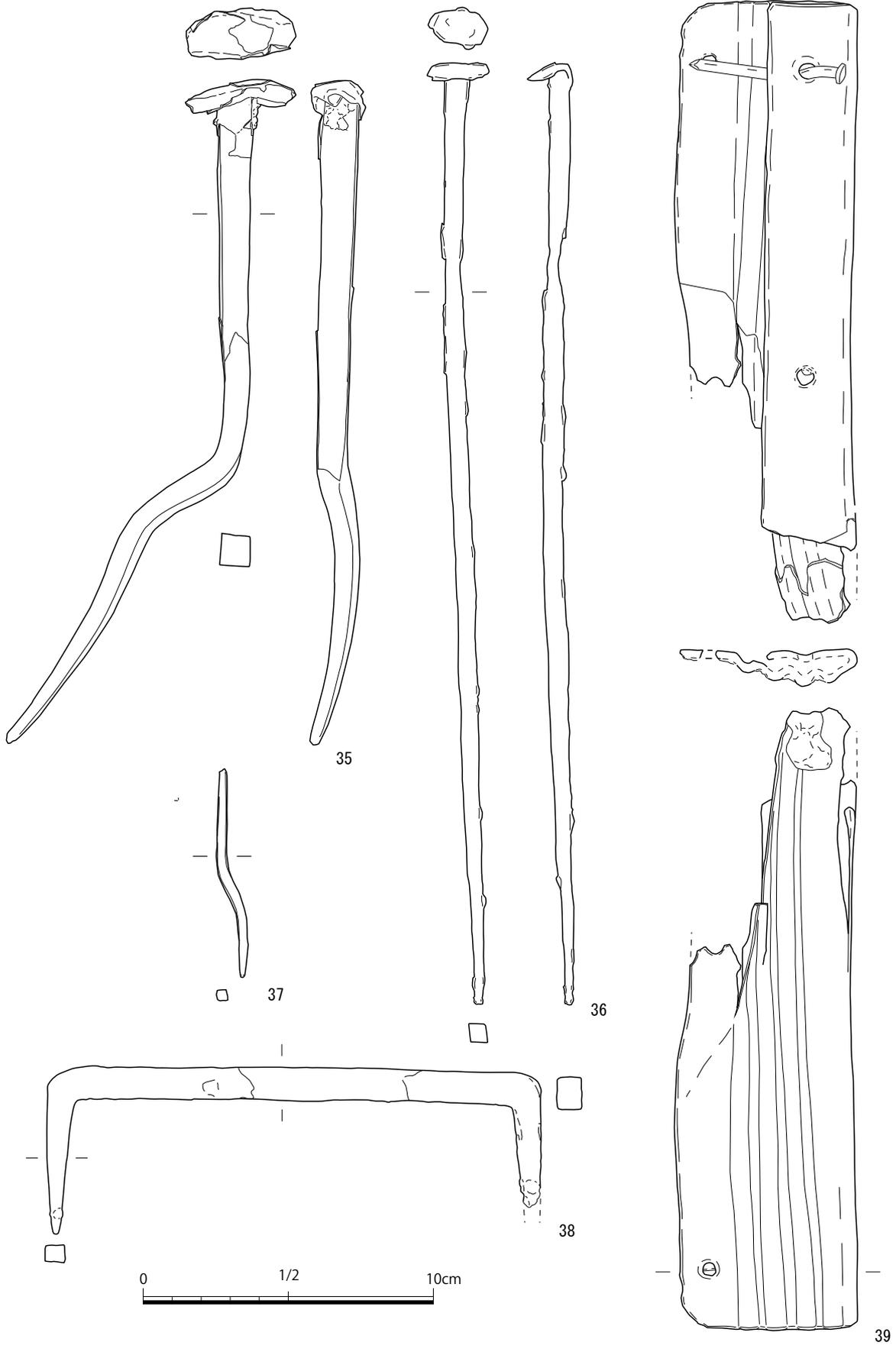


图 21 G 区出土遗物实测图 3

表 8 G 区出土遺物観察表（金属製品）

NO.	検出地点	材質	種別	寸法 (mm)			重量 (g)	文様	備考
				a	b	c			
12	2層 [SK02]	銅	釘隠し	[50]	[53]	1	9	裏葵文 魚々子	天守四層の六葉釘隠しか
13	2層 [SK02]	銅	銅板	[52]	[61]	3	43	不明	
14	2層 [SK02]	銅	銅板	[28]	[45]	1	9	不明	
15	2層 [SK02]	銅	銅板	[87.8]	[45]	5	53		釘穴に銅釘
16	2層 [SK02]	銅	銅板	[96]	[135]	2	178		天守窓格子の包み金具か
17	1層	鉄	巻頭釘	7	44	3	3		
18	1層	鉄	巻頭釘	7	33	3	3		
19	1層	鉄	巻頭釘	10	77	3	4		
20	2層 [SK02]	鉄	釘	12.6	70	5	18		
21	2層 [SK02]	銅	鋸	12	[52]	4	8		
22	2層 [SK02]	銅	鋸	9	48	3	5		
23	1層	銅	鋸	9	[23]	3	3		
24	2層 [SK02]	銅	鋸	7	28	3	3		
25	1層	銅	鋸	9	30	3	2		
26	2層 [SK02]	鉄	丸釘	24	49	5	16		
27	2層 [SK02]	鉄	丸釘	23	38	4	13		
28	2層 [SK02]	鉄	丸釘	34	67	5	14		
29	1層	鉄	鋸	21	67	8	34		
30	1層	鉄	鋸	22	46	4	14		
31	1層	鉄	鋸	15	58	5	9		
32	2層 [SK02]	鉄	釘	22	150	22	112		
33	1層	鉄	釘	21	174	7	39		瓦釘か
34	2層 [SK02]	鉄	釘	36	290	11	152		瓦釘か
35	2層 [SK02]	鉄	釘	38	230	10	147		瓦釘か
36	2層 [SK02]	鉄	釘	21	326	7	95		木部用の釘か
37	1層	鉄	釘		72	35	9		
38	2層 [SK02]	鉄	鋸	170	57	11	122		
39	2層 [SK02]	鉄	鉄板	67	[215]	25	220		包み金具か

(7) H区

調査区の概要

御深井丸における「水道」遺構の有無を確認するために設定した調査区である。「水道」遺構の検出には至らなかったが、B区出土の[SBO1]の検出状況から、「水道」はさらに南側に設置されたためと判断された。また、近世盛土層の堆積を確認した。

層序

標高 11.4m ~ 11.25m より第 I 層が堆積していた。層中には被熱瓦等がわずかに含まれる。第 II 層は検出されず、標高約 11.25m より第 III 層が確認された。厚さは約 5cm で、調査区内では面的に堆積していた。

第 III 層直下の標高 11.2m で第 IV 層を検出した。第 IV 層は北から南に向け傾斜し、南壁付近では約 40 cm 堆積する。付近の樹木の根によって層内は大きく攪乱されており、地山由来のシルトブロックが局所的に堆積する。層内からは少数の瓦片、陶器片が出土した。

第 V 層は 4 層、5 層に分けられ、4 層は標高 10.9m から堆積するが上面の凹凸が顕著かつ上層、下層との境界が曖昧であり土の締まりも弱い。5 層上層が樹木の根により攪乱された可能性がある。5 層は標高 11.0m より堆積する。硬く締まり調査区内で面的に堆積する。

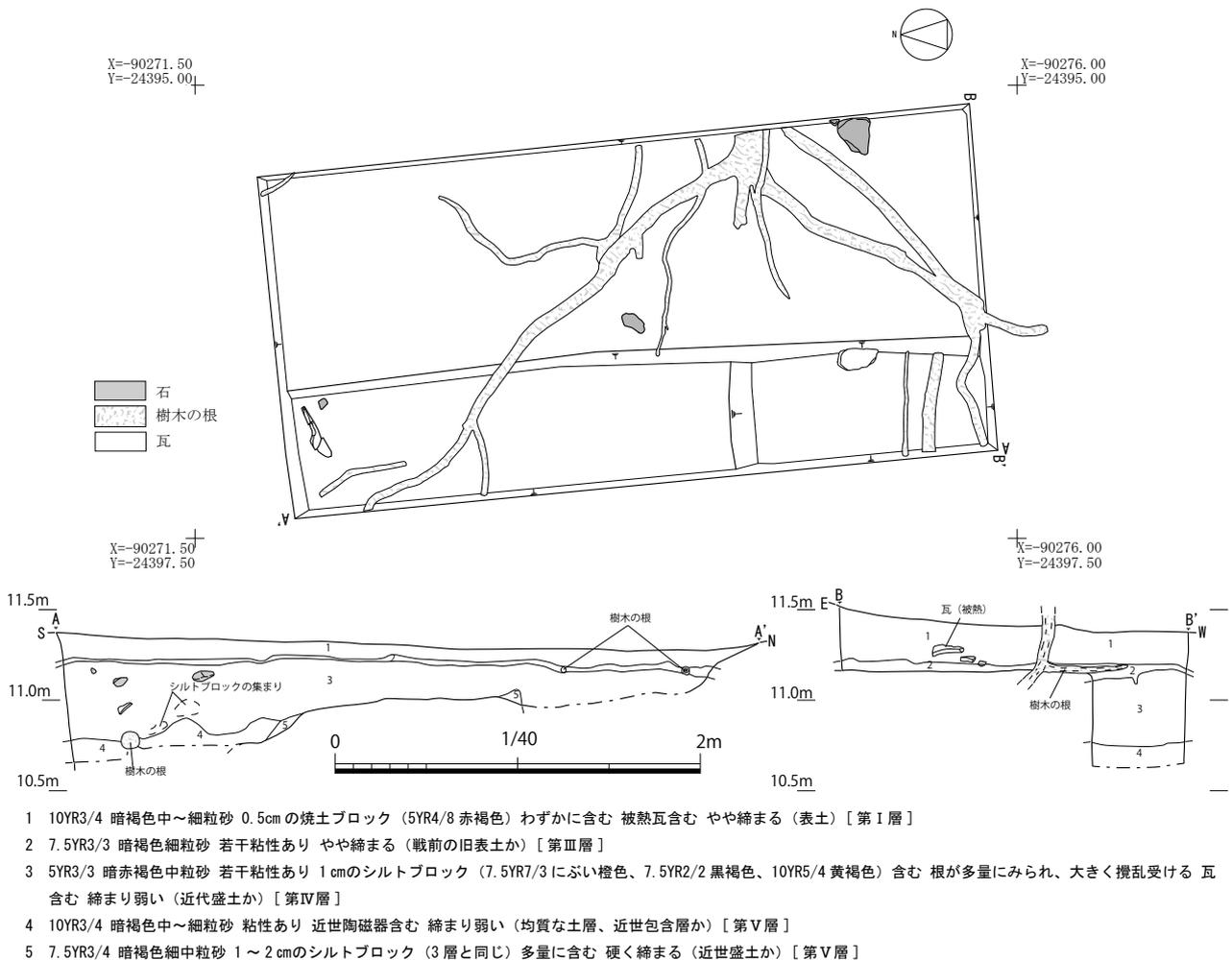


図 22 H区平面・断面図

出土遺物

H区からはコンテナ2箱分の遺物が出土した。

40は広東碗。炆器。高台部付近のみ残存する。内外には染付が施されている。瀬戸・美濃産。4層出土。

41は甕。陶器。常滑産か。3層出土。

42は釘である。鉄製。頭部の端より胴部が伸びており、平面L字状となる。胴部断面は方形、最大厚9mmと太い。皆折釘の一種か。1層出土。

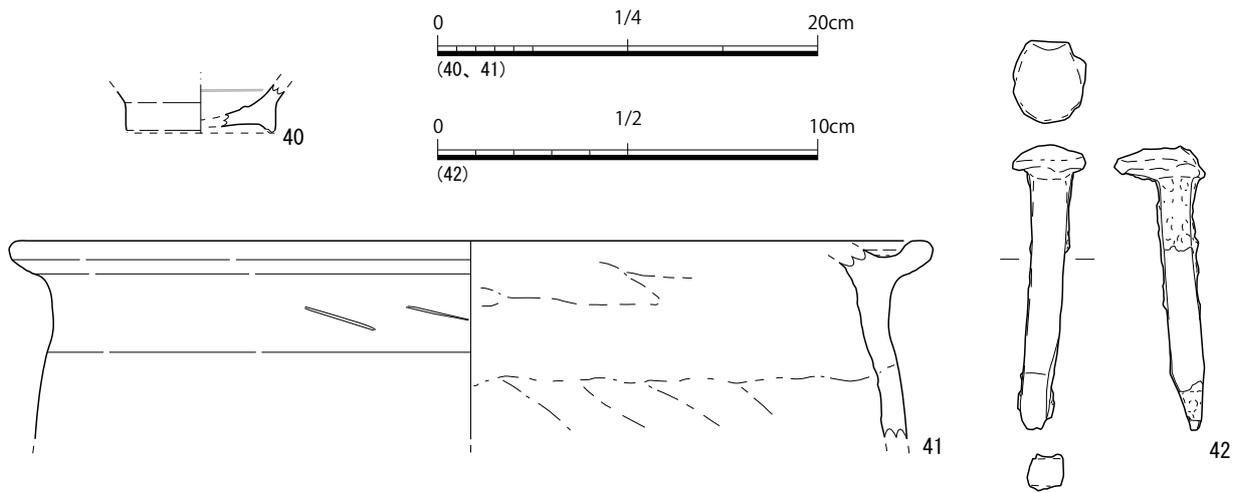


図 23 H区出土遺物実測図

表 9 H区出土遺物観察表（土器・陶磁器）

NO.	検出地点	種別	器形	寸法 (mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色	生産地	生産年代	備考
				a	b	c			絵付 釉薬	文様				
40	4層	炆器	碗	-	[26]	(75)	21	ロクロ成形	呉須 透明釉	-	にぶい黄橙	瀬戸・美濃	19C前～中 江戸期	広東碗
41	3層	陶器	甕	(486)	[106]	-	299	ロクロ成形	-	-	橙	常滑	近代か	-

表 10 H区出土遺物観察表（金属製品）

NO.	検出地点	材質	種別	寸法 (mm)			重量 (g)	文様	備考
				a	b	c			
42	1層	鉄	釘	19	75	9	42	-	皆折釘の一種か

## (8) J区

### 調査区の概要

遺構の残存状況を確認するために設置した調査区である。

近世盛土層の他、濃尾震災後の瓦礫を埋設したと推定される廃棄土坑 [SK03] を検出した。調査区西半分は樹木が根を張っていたため表層のみの掘削に留めた。

### 層序

標高 11.35m ～ 11.4m より第Ⅰ層、第Ⅱ層は検出されず、標高 11.1m ～ 11.2m より第Ⅲ層 を検出した。第Ⅲ層 下では、標高約 11.05m より第Ⅳ層、第Ⅳ層 を大きく掘り込む形で 5 層を検出した。5 層は濃尾震災後の瓦礫廃棄土坑であり、詳細は後述する。第Ⅳ層 下の標高 10.7m 硬く締まる第Ⅴ層 を検出した。その他に遺構は検出されなかった。

### 遺構【SK03】

SK03 は近代盛土である第Ⅳ層 を掘りこむ廃棄土坑である。本調査区内では遺構南辺の一部を検出したのみであるため、平面上の規模は不明である。土坑の深さは調査区北壁付近で約 20cm である。

遺構内からは多量の瓦類、漆喰の破片のほか、ガラス瓶片、旧陸軍の小銃弾薬莢が少数出土した。

出土遺物の様相から、本遺構は旧陸軍が御深井丸に駐屯していた際に生じた、濃尾地震時の瓦礫類廃棄土坑と推定した。

### 出土遺物

J区からはコンテナ 4 箱分の遺物が出土した。このうち約半数は 5 層 [SK03] 出土の瓦片であった。

43 は鉄絵皿である。陶器。高台部付近のみ残存し、内面に鉄絵が施されている。瀬戸・美濃産。6 層出土。

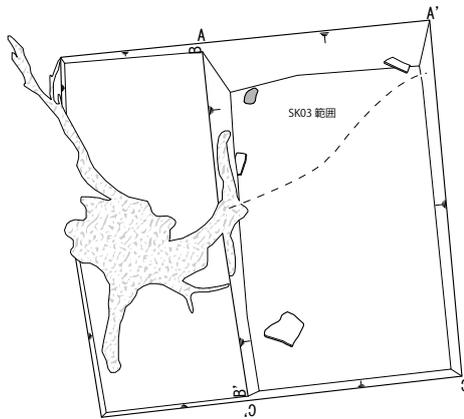
44 は軒丸瓦。瓦当は左巻三巴文。瓦当表面にはハナレ砂が付着している。45 は軒平瓦である。瓦当は風車状中心飾と唐草文で、表面にはハナレ砂が付着している。46 は平瓦である。表面中央に他の瓦との接着用とみられる漆喰が帯状に付着している。44 ～ 46 とともに 5 層 [SK03] 出土。

47 は小銃弾の薬莢である。リム部付近のみ残存し、錆による劣化が著しいため使用された小銃の種類は不明である。明治 5 年 (1871) ～明治 26 年 (1893) まで御深井丸に駐屯していた旧陸軍第三師団が所有していたものか。5 層 [SK03] 出土。同様の薬莢細片は 6 層からも出土している。48 は寛永通宝である。表面の陽刻は摩耗しほとんど読み取れない。7 層出土。

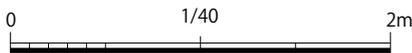
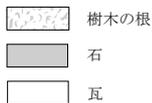
X=-90254.00  
Y=-24386.00



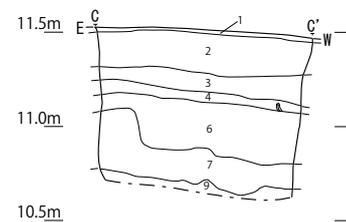
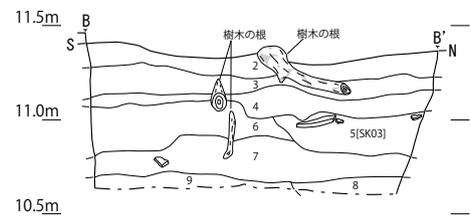
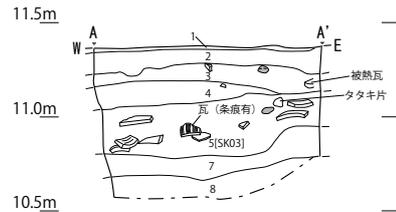
X=-90254.00  
Y=-24383.00



X=-90257.00  
Y=-24386.00



X=-90257.00  
Y=-24383.00



- 1 10YR3/4 暗褐色細粒砂 やや締まる (表土) [第I層]
- 2 10YR4/6 褐色細～中粒砂 0.5～1cmのシルトブロック (7.5YR6/3 にぶい褐色、7.5YR1.7/1 黒色) 多量に含む 締まり弱い (現代盛土層)
- 3 7.5YR2/3 極暗褐色細～中粒砂 若干粘性あり 0.5～1cmのシルトブロック (7.5YR6/3 にぶい褐色、7.5YR1.7/1 黒色、7.5YR5/6 明褐色) 多量に含む 被熱瓦含む やや締まる (現代層)
- 4 7.5YR2/2 黒褐色細粒砂 若干粘性あり 0.5cmの焼土 (2.5YR5/8 明赤褐色) 含む 0.5cmの炭化物 (5YR1.7/1 黒色) わずかに含む やや締まる (戦前旧表土か) [第III層]
- 5 5YR3/3 暗赤褐色粗～中粒砂 1～2cmの漆喰片 (7.5Y8/1 灰白色) 多量に含む 5～10cmの三和土片 (10YR5/6 黄褐色) わずかに含む 瓦多量に含む 近代磁器、ガラス、葉莢片等わずかに含む 締まり弱い (近代の廃棄土坑か) [SK03]
- 6 7.5YR3/3 暗褐色細粒砂 粘性あり 0.5cmのシルトブロック (7.5YR5/6 明褐色、7.5YR7/3 にぶい橙色) わずかに含む 0.5cmの炭化物 (4層と同じ) わずかに含む 瓦細片わずかに含む 締まり弱い (近代盛土か) [第IV層か]
- 7 10YR3/4 暗褐色細粒砂 粘性あり 2cmのシルトブロック (7.5YR6/8 橙色) わずかに含む 0.5cmの炭化物 わずかに含む やや締まる (近代盛土か) [第IV層か]
- 8 7.5YR3/3 暗褐色細粒砂 粘性あり 0.5～1cmのシルトブロック (7.5YR5/6 明褐色、7.5YR1.7/1 黒色、2.5Y7/3 浅黄色) 多量に含む 2cmの礫わずかに含む 瓦含む 締まり弱い (近代盛土か) [第IV層か]
- 9 10YR3/3 暗褐色中粒砂 2～5cmのシルトブロック (5YR5/6 黄褐色、5YR2/2 黒褐色、2.5Y6/4 にぶい黄色) 多量に含む 瓦含む やや締まる (近世盛土か) [第V層か]

図 24 J 区平面・断面図

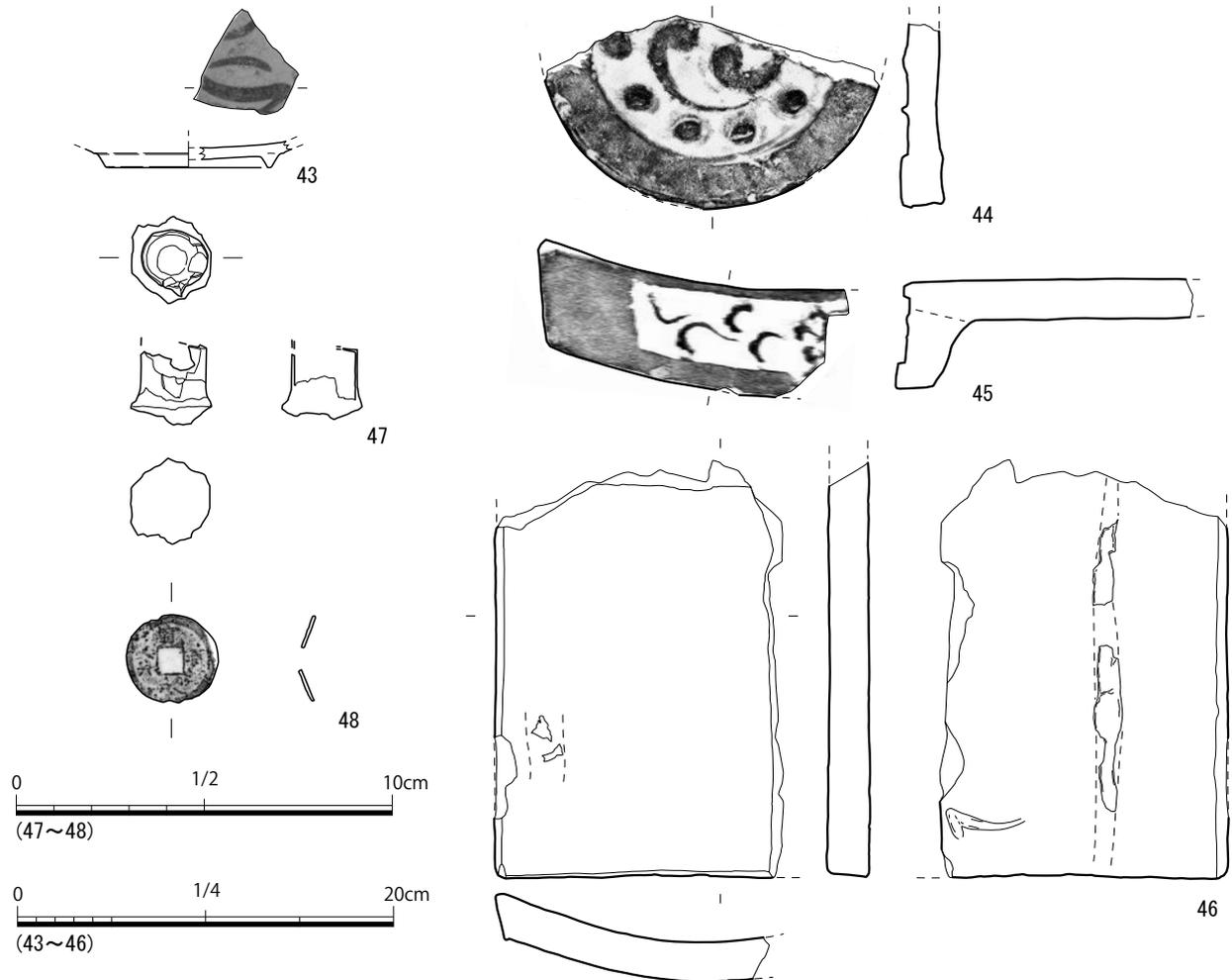


図 25 J 区出土遺物実測図

表 11 J 区出土遺物観察表（土器・陶磁器）

NO.	検出地点	種別	器形	寸法 (mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色	生産地	生産年代	備考
				a	b	c			絵付 釉薬	文様				
43	6層	陶器	皿	-	[26]	(75)	23	ロクロ成形	鉄絵 長石釉	草花文様か	にぶい黄橙	瀬戸・美濃	江戸期	

表 12 J 区出土遺物観察表（瓦）

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	製作技法	備考
			a	b	c	d					
44	5層 [SK03]	軒丸瓦	[167]	[100]	[23]	-	386	左巻三巴文	灰 灰白	-	瓦当部分にハナレ砂付着
45	5層 [SK03]	軒平瓦	[163]	-	[154]	-	1072	風車状中心飾 唐草文	灰～灰黄 灰黄	-	瓦当部分にハナレ砂付着
46	5層 [SK03]	平瓦	[141]	21	[224]	-	1246	-	灰 灰白	-	外面に漆喰が付着

表 13 J 区出土遺物観察表（金属製品）

NO.	検出地点	材質	種別	寸法 (mm)			重量 (g)	文様	備考
				a	b	c			
47	5層 [SK03]	鉄	薬莖	ボディ径:17.5	75	9	9	-	小銃弾 旧陸軍所有か
48	7層	銅	銭貨	24.5	-	-	0.8	-	寛永通宝

(9) K区

調査区の概要

遺構の残存状況を確認するために設置した調査区である。掘削中、戦災による被熱瓦を多数含む廃棄土坑の一部を検出したほか、近世盛土層を検出した。

層序

標高 11.55m より第 I 層がおおよそ標高 11.25m まで堆積し、その直下に第 III 層 が確認された。第 III 層 は調査区東側で戦災遺物廃棄土坑の埋土 (6 層) に掘りこまれていた。

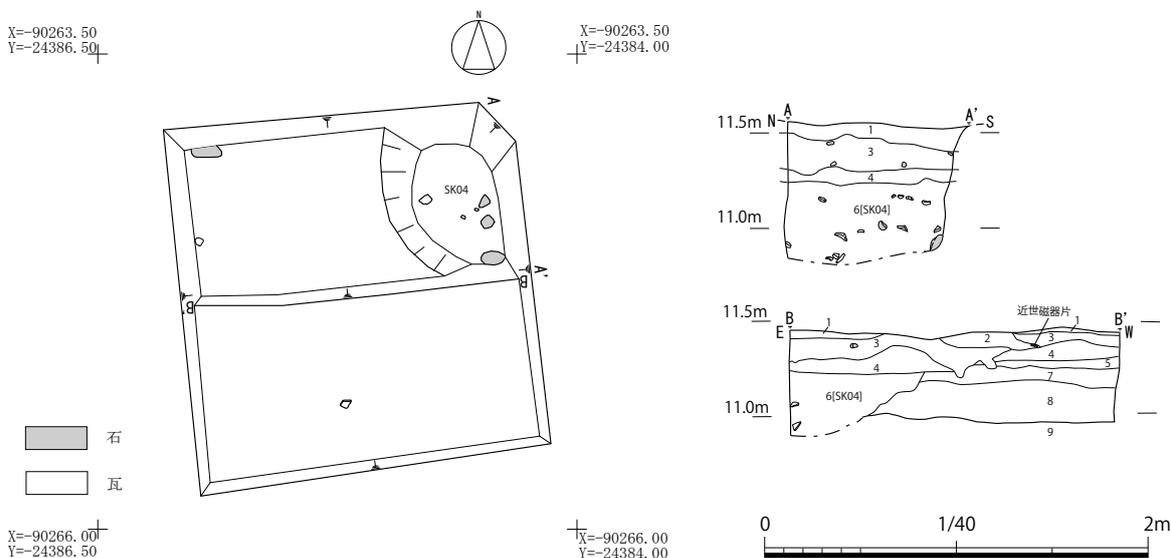
第 III 層 直下の標高約 11.2m より第 IV 層 が標高 11.0m まで約 20cm 堆積していた。直下に第 V 層 を確認し、上面を精査したが、遺構、遺物等は検出されなかった。

遺構【SK04】

戦災により生じた瓦礫を埋めたとみられる廃棄土坑である。本調査区では土坑の西辺の一部を検出したのみであるため平面上の規模は不明である。遺構の深さは、調査区東壁付近では約 50cm であった。

遺物

K 区からはコンテナ 2 箱分が出土した。その大半は 6 層 [SK04] 出土の被熱瓦で、すべて細片であった。



- 1 2. 5YR3/2 暗褐色粗粒砂 1 cm 程度の焼土ブロック (5YR4/6 赤褐色) わずかに含む 0.5 ~ 1 cm 程度のシルトブロック (10YR6/2 灰黄褐色、10YR5/4 にぶい黄褐色) 多量に含む 硬く締まる (表土) [第 I 層]
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂 2 cm 程度の焼土ブロック (5YR4/6 赤褐色) わずかに含む 0.5 ~ 1 cm 程度のシルトブロック (10YR6/2 灰黄褐色、10YR5/4 にぶい黄褐色) 多量に含む 硬く締まる (現代盛土か)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色粗～中粒砂 0.5 cm 程度のシルトブロック (10YR6/2 灰黄褐色、10YR5/4 にぶい黄褐色、10YR3/1 黒褐色) まばらに含む 硬く締まる (現代盛土か)
- 4 10YR3/4 暗褐色粗粒砂 2 cm 程度のシルトブロック (10YR5/4 にぶい黄褐色、他 3 層と同じ) 多量に含む 硬く締まる (現代盛土か)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂 1 cm 程度のシルトブロック (3、4 層と同じ) 多量に含む 硬く締まる (現代盛土か)
- 6 5YR3/4 暗赤褐色中粒砂 0.5 ~ 1 cm 程度の焼土ブロック (5YR4/6 赤褐色) 多量に含む 被熱瓦・鉄釘・銅板多量に含む 締まり弱い (戦災遺物廃棄土) [SK05]
- 7 2. 5Y3/2 黒褐色中粒砂 近世陶器 (瀬戸美濃) 含む やや締まる (戦前の旧表土か) [第 III 層]
- 8 7. 5YR3/4 暗褐色中～細粒砂 0.5 cm の炭化物 (7. 5YR2/1 黒色) わずかに含む 2cm の砂ブロック (タタキか) (7. 5YR5/8 明褐色) わずかに含む やや締まる (近代盛土か) [第 IV 層か]
- 9 10YR3/4 暗褐色細粒砂 0.5 ~ 2 cm 程度のシルトブロック (10YR5/6 黄褐色、10YR2/1 黒色) 含む やや締まる (近世盛土か) [第 V 層か]

図 26 K 区平面・断面図

## (10) L区

### 調査区の概要

御深井丸における「水道」遺構の有無を確認するために設定した調査区である。

B区出土の[SBO1]の検出状況から、「水道」はさらに南側に設置されていたことが推定されたため、近世遺構の検出には至らなかったが、近世盛土層の堆積を確認した。

### 層序

標高 11.45m より第 I 層 (1 層) が約 10cm 堆積していた。調査区北側ではその直下に現代の攪乱土層 (2 層) が約 70cm 堆積し、その下に第 V 層 (近世盛土層) を確認した。

調査区南側では現代の攪乱は見られず、第 I 層直下に第 II 層、第 III 層 が堆積し、標高 11.2m より第 IV 層 が確認された。第 IV 層 は 5 層及び 5' 層、6 層に細分され、5 層が 6 層を掘りこむ。東西へ伸び溝状の遺構となることも予期されたが、本調査区より西へ 10m の H 区では近代盛土層上で同様の痕跡を確認できないこと、深さ約 40cm と浅く、平面上における 5 層、6 層の境界も曖昧であったことから、遺構ではなく土質の異なる盛土の堆積したものと判断した。ただし、近代盛土最下層の 5' 層では木材が焼けたような炭化物が多量に検出され、他の近世盛土とは様相が異なる。火災等に伴う廃棄物処理層の可能性も考えられる。5' 層を掘削したところ、標高 10.65m で第 V 層 を検出した。調査区北側も含め第 V 層 上面で精査を行ったが、遺構、遺物等は検出されなかった。

### 出土遺物

L区からはコンテナ 3 箱分の遺物が出土した。大半は瓦だが、第 II 層から被熱金属製品が複数出土した。

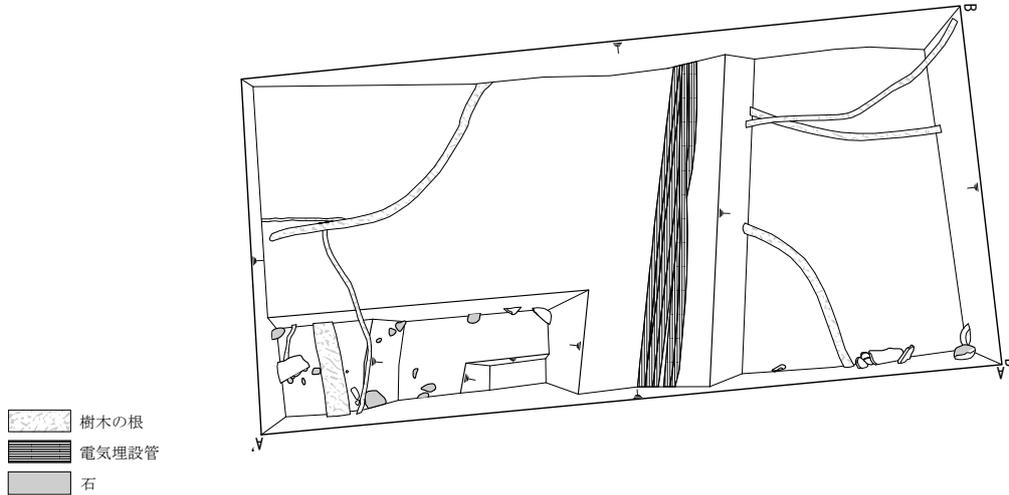
49 は灯明皿か。陶器。底部は内に反り、内面、外面には灰釉が施されている。5 層出土。50 は軒丸瓦。瓦当は左巻三巴文で表面にはキラコが付着する。2 層出土。51 は軒棧瓦。瓦当は右巻三巴文と唐草文で表面にはキラコが付着する。5 層出土。

52 は銅板である。円形の釘穴が 1 つ穿たれており、天守の破風等の一部とみられる。表面には溶けた銅塊が付着している。3 層出土。53 は六葉釘隠しの樽の口の一部。銅製。表面には彫金で裏葵紋が施されているが、後世の修理時に穿ったとみられる孔により文様中央が欠損、3 層出土。54 は飾り金具である。銅製。表面には緻密な文様が描かれており、左側に牡丹の葉、右側に蓮弁を彫り込んでいる。牡丹の葉表面には鍍金がみられ、文様の隙間には直径 1.2mm の魚々子が緻密に打ち込まれ、蓮弁上には唐草文様が点刻されている (所謂「チョコ唐草」か)。右側には釘穴も 1 か所穿たれている。破風等の一部とみられるが、牡丹の葉を施したものは天守、本丸御殿ともに類例がない。明治期に破却された二之丸孔雀門柱は「几帳面取、根巻肩巻の金具は毛彫り牡丹」であったとされ (『金城温古録』)、それら門柱に用いられた金具の可能性も考えられる。3 層出土。55 は包み金具。鉄製。G 区出土の 16 と同様のものか。3 層出土。56 は板状の銅製品である。被熱のためかねじ曲がり 3mm の厚さを有する。用途は不明である。3 層出土。57 は板状の銅製品である。表面に釘穴が 2 本穿たれている。表面には松脂等を塗布する「チャン塗り」に類似した薄い黒色被膜が見られたため成分分析を行ったが、空襲時の被熱による表面の損傷もあり油分等は検出されなかった (詳細は 4 章第 1 節参照)。天守に用いられた銅瓦等の一部か。3 層出土。

X=-90270.50  
Y=-24383.50

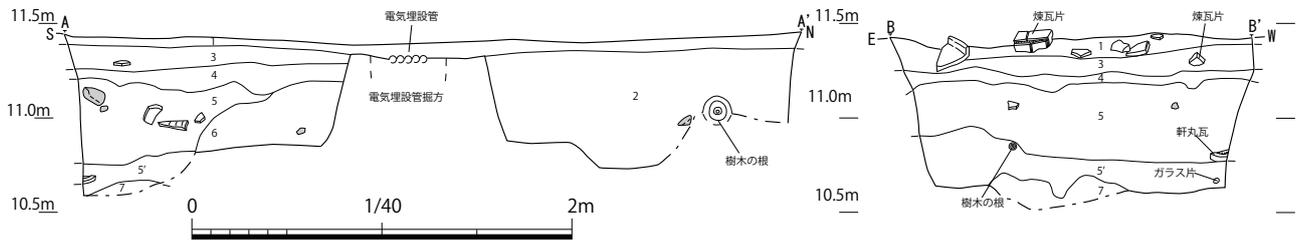


X=-90275.00  
Y=-24383.50



X=-90270.50  
Y=-24386.50

X=-90275.00  
Y=-24386.50



- 1 7.5YR3/3 暗褐色粗粒砂 やや締まる (表土) [第1層]
- 2 10YR3/3 暗褐色粗～中粒砂 0.5～1cmのシルトブロック (10YR2/2 黒褐色、10YR6/3 にぶい黄橙色、10YR4/6 褐色) 多量に含む ビニール片・磁器片 (銅版) 含む 根多量にあり 締まり弱い (根攪乱土か)
- 3 10YR3/4 暗褐色粗粒砂 0.5cmのシルトブロック (10YR2/2 黒褐色、10YR6/3 にぶい黄橙色、10YR4/6 褐色) 含む 焼土 (5YR4/8 赤褐色) 含む 締まり弱い (戦災層敷き均し層) [第II層]
- 4 7.5YR2/3 極暗褐色中～粗粒砂 0.5cmの焼土 (3層と同じ) わずかに含む 瓦含む 根攪乱により輪郭曖昧 締まり弱い (戦前の旧表土) [第III層]
- 5 7.5YR3/2 黒褐色細粒砂 0.5～1cmの炭化物 (7.5YR1.7/1 黒色) 多量に含む 0.5～2cmのシルトブロック (10YR6/4 にぶい黄橙色) わずかに含む 御深軸丸碗 軒丸瓦含む 締まり弱い (近代盛土) [第IV層]
- 5' 10YR2/2 黒褐色中～細粒砂 1～3cmの炭化物多量に含む ガラス細片含む 締まり弱い (近代盛土) [第IV層]
- 6 10YR3/4 暗褐色中～細粒砂 若干粘性あり 炭化物わずかに含む 瓦含む やや締まる (近代盛土) [第IV層]
- 7 7.5YR3/4 暗褐色細粒砂 若干粘性あり 1～3cmのシルトブロック (10YR2/2 黒褐色、10YR6/3 にぶい黄橙色、10YR4/6 褐色) 多量に含む 瓦細片含む やや締まる (近世盛土か) [第V層]

図 27 L 区平面・断面図

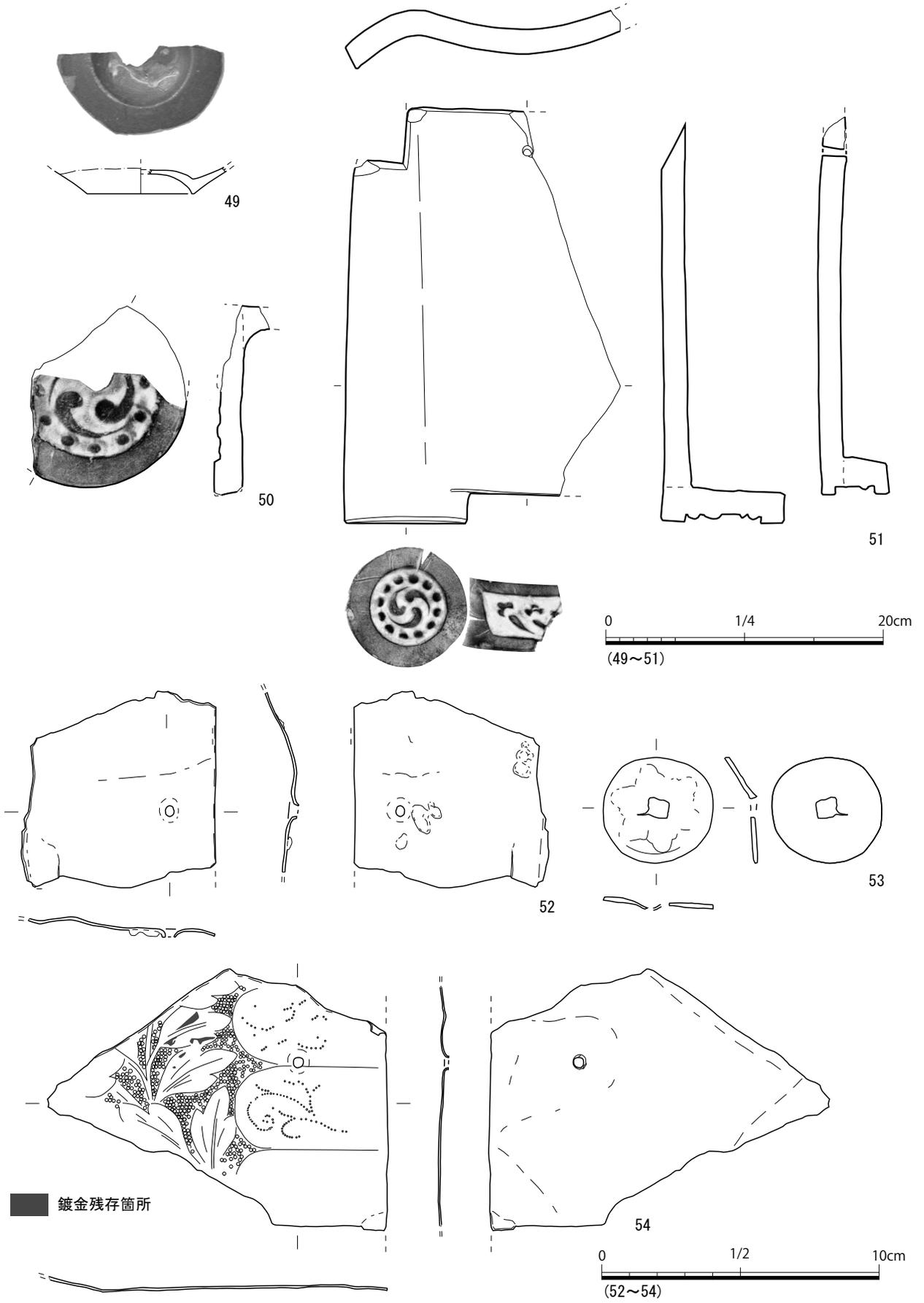
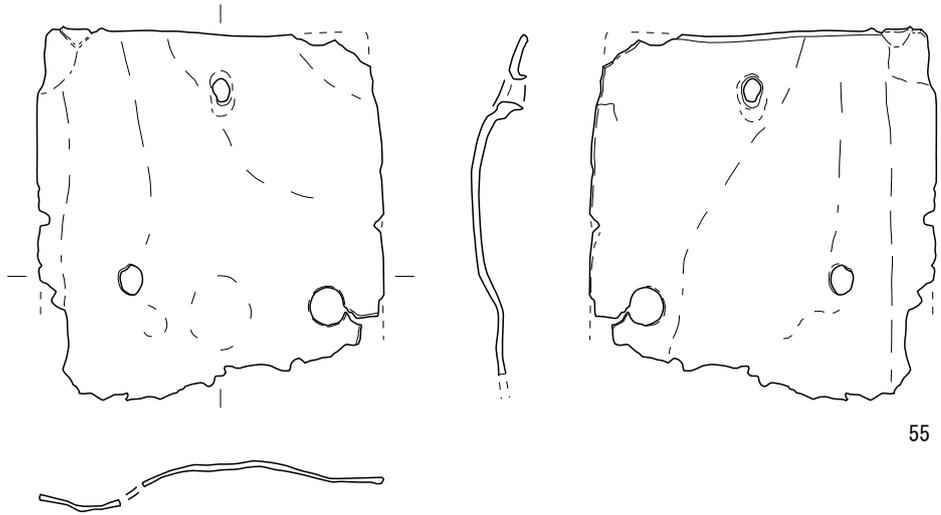
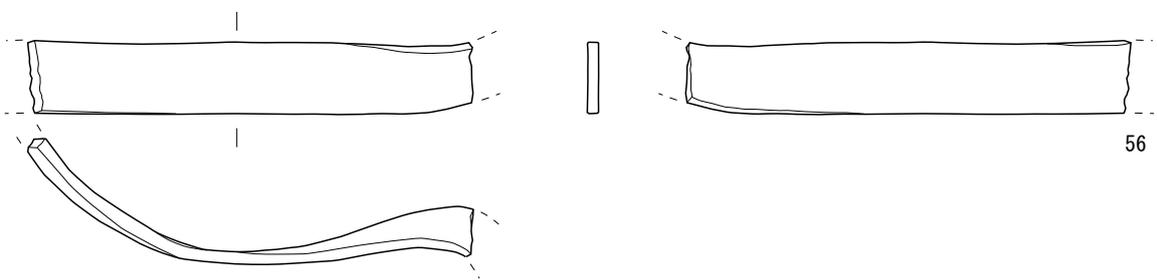


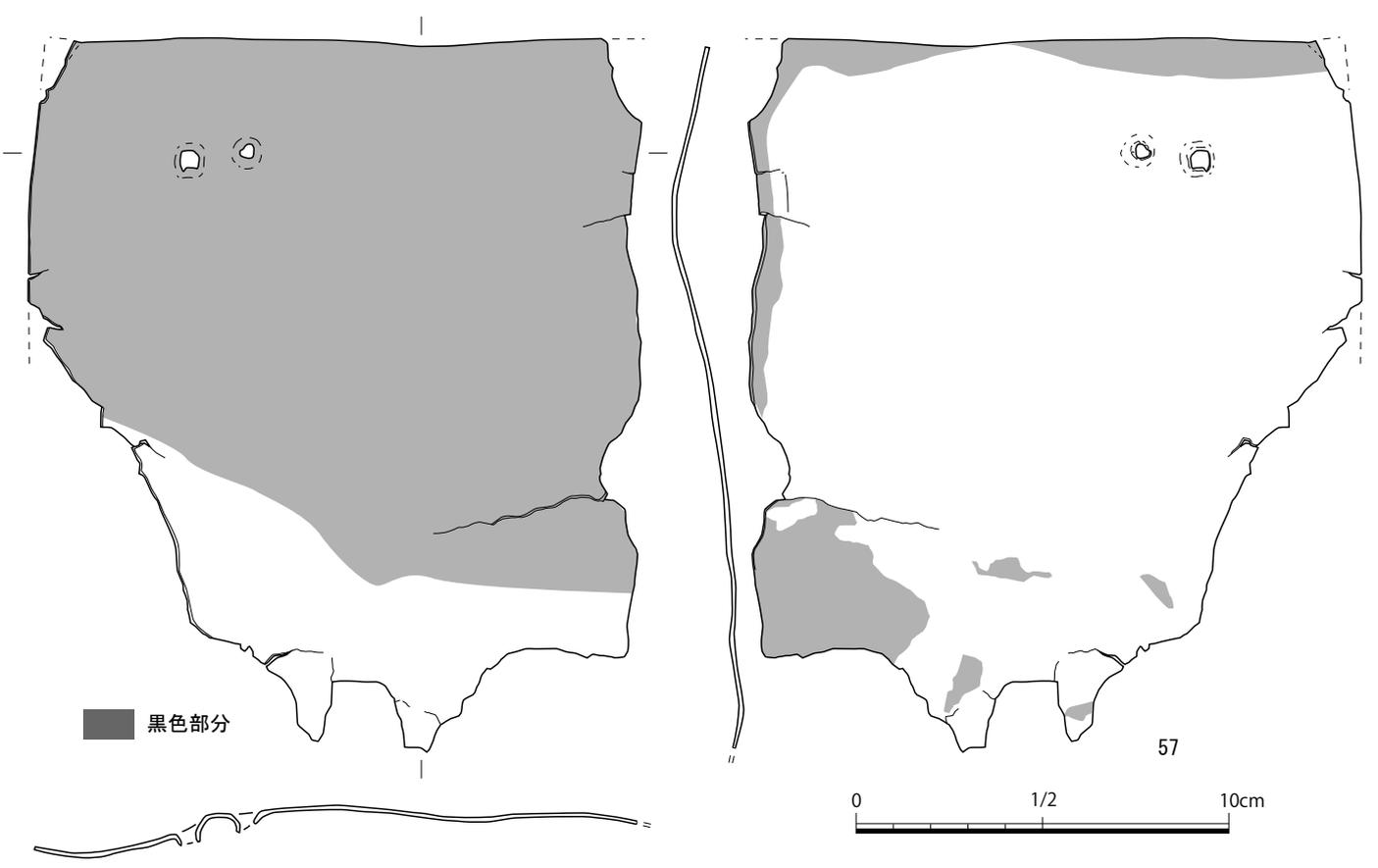
图 28 L 区出土遺物実測図 1



55



56



57

0 1/2 10cm

图 29 L 区出土遗物实测图 2

表 14 L 区出土遺物観察表（土器・陶磁器）

NO.	検出地点	種別	器形	寸法 (mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色	生産地	生産年代	備考
				a	b	c			絵付 釉薬	文様				
49	5層	陶器	灯明皿	-	[19]	(77)	73	ロクロ成形	長石釉	-	明黄褐	-	江戸期か	-

表 15 L 区出土遺物観察表（瓦）

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	製作技法	備考
			a	b	c	d					
50	2層	軒丸瓦	(148)	丸瓦部:89 平瓦部:49	[132]	[40]	390	左巻三巴文	灰 灰黄	-	瓦当部分にキラコ付着
51	5層	軒棧瓦	丸瓦部:87 平瓦部:[67]	丸瓦部:89 平瓦部:49	302	18	1625	丸瓦部:右巻三巴文 平瓦部:唐草文	灰 灰黄	-	瓦当部分にキラコ付着

表 16 L 区出土遺物観察表（金属製品）

NO.	検出地点	材質	種別	寸法 (mm)			重量 (g)	文様	備考
				a	b	c			
52	3層	銅	銅板	[70]	[71]	1	43	-	天守の装飾金具の一部か
53	3層	銅	釘隠し	38	-	2	15	裏葵紋	中央に約6mmの方形釘孔（修理時に穿孔か）あり 天守四層の六葉釘隠しの一部か
54	3層	銅	銅板	[122.5]	[95]	0.5	60	牡丹葉、魚々子、蓮弁、唐草	牡丹葉表面に金付着
55	3層	鉄	鉄板	[91]	[98]	2	82	-	天守窓格子の包み金具か
56	3層	銅	不明銅製品	[117]	19	3	66	-	-
57	3層	銅	銅板	[164]	[193]	1	98	-	天守銅瓦の一部か

## (11) M区

### 調査区の概要

遺構の残存状況を確認するために設置した調査区である。近世盛土層のほか、近代の瓦廃棄土坑を検出した。調査区東半では現代のU字溝を検出し、調査が困難であったため調査区西半のみを掘削した。

### 層序

標高約11.7mより第Ⅰ層が約30cm堆積し、直下には調査区を南北に縦断する現代の鑄鉄管掘方を確認した。第Ⅱ層は確認されず、標高11.4mより第Ⅲ層、その直下11.3mで第Ⅳ層を検出した。

第Ⅲ層は近代の廃棄土坑とみられる6層に掘削されていた。遺構の規模等詳細は後述する。

明確な第Ⅳ層は確認できず、第Ⅴ層は標高10.8mより確認された。第Ⅳ層は11層、12層に細分されるため切りあい関係を確認するため調査区南西隅を部分的に掘削したところ、11層が12層を掘りこむ状況を確認した。11層は土坑状の遺構埋土となる可能性も想定したが、11層は南隅より12層に対し水平に堆積する様相を見せること、11層自体も約20cmの浅い堆積であり、締まりが強いことから同時期において土質の異なる盛土で造成が行われたものと推定した。

### 遺構【SK05】

SK05は、近代層第Ⅲ層を掘り込んだ瓦等を多量に含む土坑である(図30断面)。本調査区では土坑の一部分を検出したのみであり、調査区内でも既設の鑄鉄管に掘りこまれているため明確な遺構形状をつかみ難いが、調査区内では少なくとも深さ約50cmの規模をはかる。遺構埋土からは焼けた木材、漆喰の細片を含む。出土遺物は大部分が瓦であり、少数ながら近代の磁器も出土した。遺構の廃絶時期は後述する遺物の様相から陸軍期と推定する。

### 出土遺物

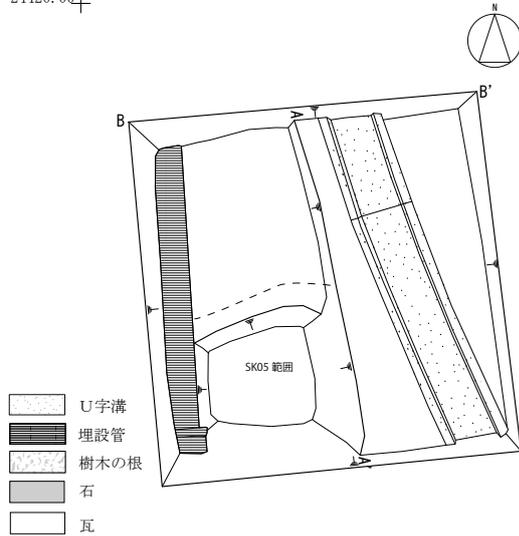
M区からはコンテナ7箱分の遺物が出土した。その大半はSK05出土の瓦類である。

58は皿である。磁器。見込みには城郭の櫓、寺院の塔、和歌等の陰刻がみられ、その上に呉須が施されている。高台は蛇の目状である。瀬戸・美濃産。6層[SK05]出土。

59は丸瓦である。凹部にはコビキBによる切り離し痕がみられる。60、61は軒丸瓦である。60は、瓦当は右巻三巴文で表面にはハナレ砂が付着している。61は、瓦当は右巻三巴文で表面にはキラコが付着している。ともに6層[SK05]出土。

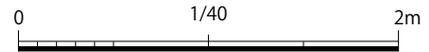
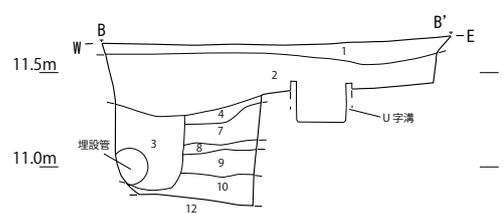
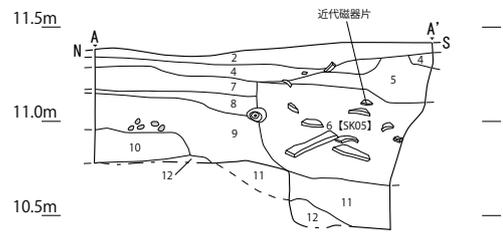
X=-90283.00  
Y=-24420.00

X=-90283.00  
Y=-24417.00



X=-90286.00  
Y=-24420.00

X=-90286.00  
Y=-24417.00



- 1 7.5YR6/6 橙色粗粒砂 1cm程度の細礫多量に含む 硬く締まる (表土) [第I層]
- 2 7.5YR4/3 褐色粗粒砂 2cm程度の細礫多量に含む 1cmの炭化物 (7.5YR1.7/1 黒色) わずかに含む 瓦片含む 硬く締まる (現代碎石層)
- 3 7.5YR3/4 黒褐色粗粒砂 1cm程度の礫・炭化物 (2層と同じ) 含む 締まり弱い (埋設管掘方)
- 4 10YR3/2 黒褐色細粒砂 1cm程度のシルトブロック (10YR4/6 褐色) 炭化物 (2層と同じ)、漆喰 (2.5Y8/2 灰白色) 含む 硬く締まる (戦前の旧表土か) [第III層]
- 5 7.5YR4/4 褐色中～細粒砂 0.5～2cm程度のシルトブロック (10YR6/4 にぶい黄橙色・7.5YR5/6 明褐色) 含む 炭化物 (2層と同じ) わずかに含む 瓦含む やや締まる (近代盛土か) [第IV層か]
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂 0.5cm程度のシルトブロック (10YR4/6 褐色) 含む 漆喰細片 (4層と同じ) 少量含む 2cmの炭化物 (2層と同じ) 含む 瓦 (平、丸、棧瓦等) 多量に含む 近代磁器 (酸化コバルト染付・手描) 含む やや締まる (近代廃棄土坑か) [SK05]
- 7 10YR3/4 暗褐色中～細粒砂 粘性あり 2cm程度のシルトブロック (10YR4/6 褐色) 多量に含む やや締まる (近代盛土か) [第IV層]
- 8 10YR3/3 暗褐色粗粒砂 粘性あり 層上部に炭化物 (2層と同じ)、その下に粗砂 (10YR4/2 灰黄褐色) が帯状に堆積 (炭化物堆積層・近代か)
- 9 7.5YR3/2 黒褐色中粒砂 5cm程度の礫局的に含む 瓦細片含む やや締まる (近代盛土か) [第IV層]
- 10 10YR3/4 暗褐色中粒砂 0.1cm程度のシルトブロック (10YR4/6 褐色) わずかに含む 瓦細片含む 硬く締まる (近代～近世の盛土か) [第IV層～第V層か]
- 11 10YR3/2 黒褐色細粒砂 1～4cm程度のシルトブロック (7.5YR2/2 黒褐色)+0.5cmのシルトブロック (10YR4/6 褐色・10YR6/4 にぶい黄橙色) 多量に含む (近世盛土か) [第V層か]
- 12 7.5YR3/3 暗褐色中粒砂 1～2cm程度のシルトブロック (10YR7/2 にぶい黄橙色・7.5YR2/2 黒褐色・10YR1.7/1 黒色) 多量に含む 硬く締まる (近世盛土か) [第V層か]

図 30 M 区平面・断面図

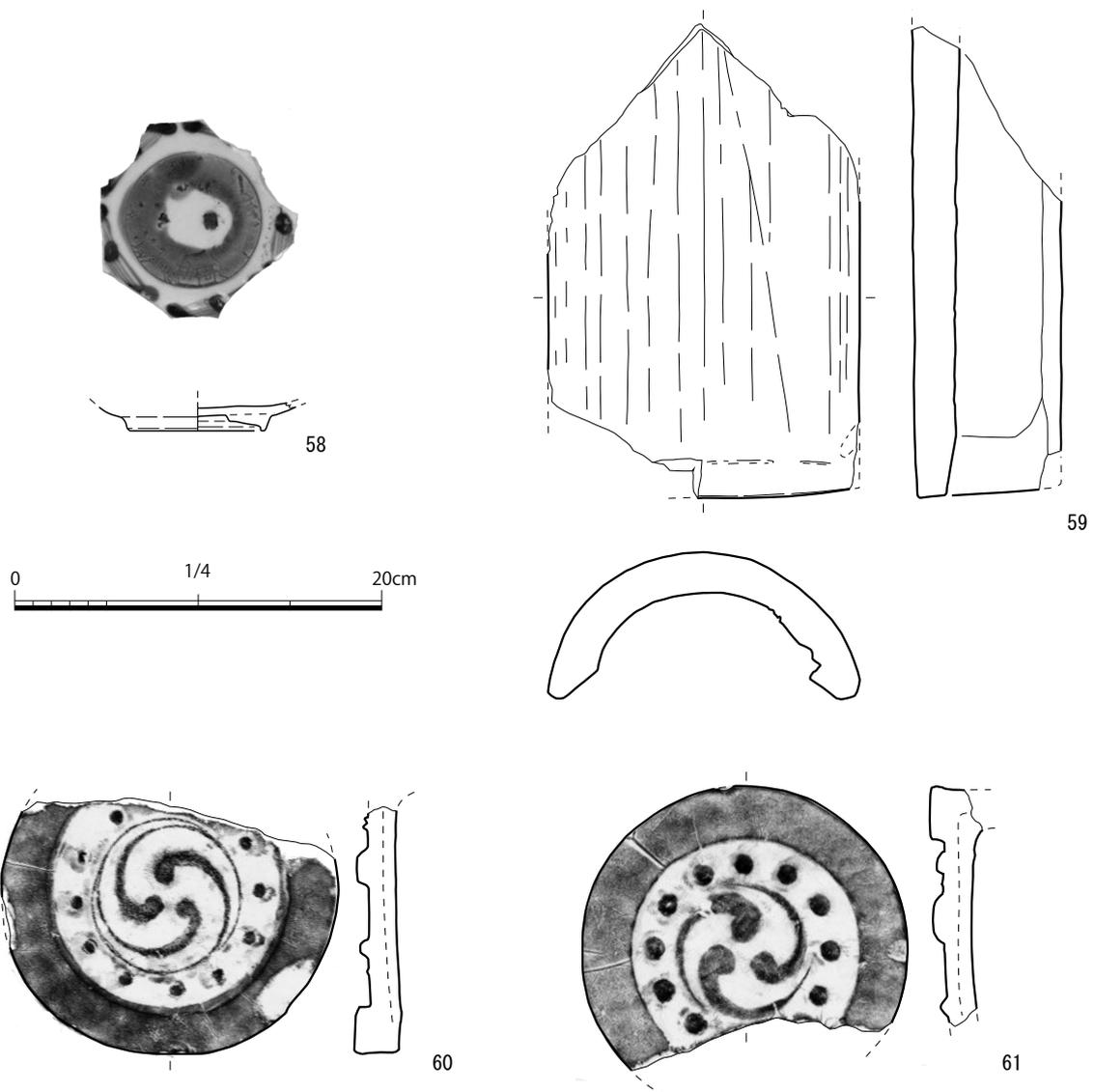


図 31 M 区出土遺物実測図

表 17 M 区出土遺物観察表（土器・陶磁器）

NO.	検出地点	種別	器形	寸法 (mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色	生産地	生産年代	備考
				a	b	c			絵付 釉薬	文様				
58	3層	磁器	皿	-	[15]	73	122	ロクロ成形	呉須 透明釉	-	白	瀬戸・美濃	19C 後 明治期	蛇の目高台

表 18 M 区出土遺物観察表（瓦）

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	製作技法	備考
			a	b	c	d					
59	6層	丸瓦	170	80	[260]	22	1000	-	灰～灰白 灰	コビキ B	-
60	6層	軒丸瓦 (183)	-	-	[27]	-	641	右巻三巴文	灰 灰白	-	ハナレ砂付着
61	6層	軒丸瓦 (176)	-	-	[29]	-	761	左巻三巴文	灰～灰白 灰	-	瓦当部分にキラコ付着

(12) N区

調査区の概要

遺構の残存状況を確認するため、M区より3m南に設定した調査区である。標高約11.05mで近世盛土層の堆積を確認したが、その他に遺構は検出されなかった。調査区東側ではU字溝が確認され掘削が困難であったことから、調査区西半のみで掘削を行った。また、近世盛土層の時期推定、堆積状況の確認のため、調査区北西隅において近世層を最小限の範囲で掘削した。

層序

標高11.6mより第Ⅰ層、その直下に第Ⅱ層、第Ⅲ層を検出した。第Ⅲ層下での出土遺物は瓦のみで、近代、近世盛土の線引きが困難であったが、椀瓦を含みシルトブロックの大きさが0.5～1cm程度の6、7層を第Ⅳ層、椀瓦を含まずシルトブロックの大きさが2cm以上の9層以下を第Ⅴ層と推定した。そのため、面的掘削は9層上面までとし、9層以下は最小限の範囲で掘削を行い近世層の堆積状況を確認した。

出土遺物

N区からはコンテナ1箱分の遺物が出土した。1層を中心に瓦、磁器、銅板細片が出土したが、すべて細片であった。6層では軒椀瓦が出土したが、雨天時に土砂に紛れ取り上げできなかった。

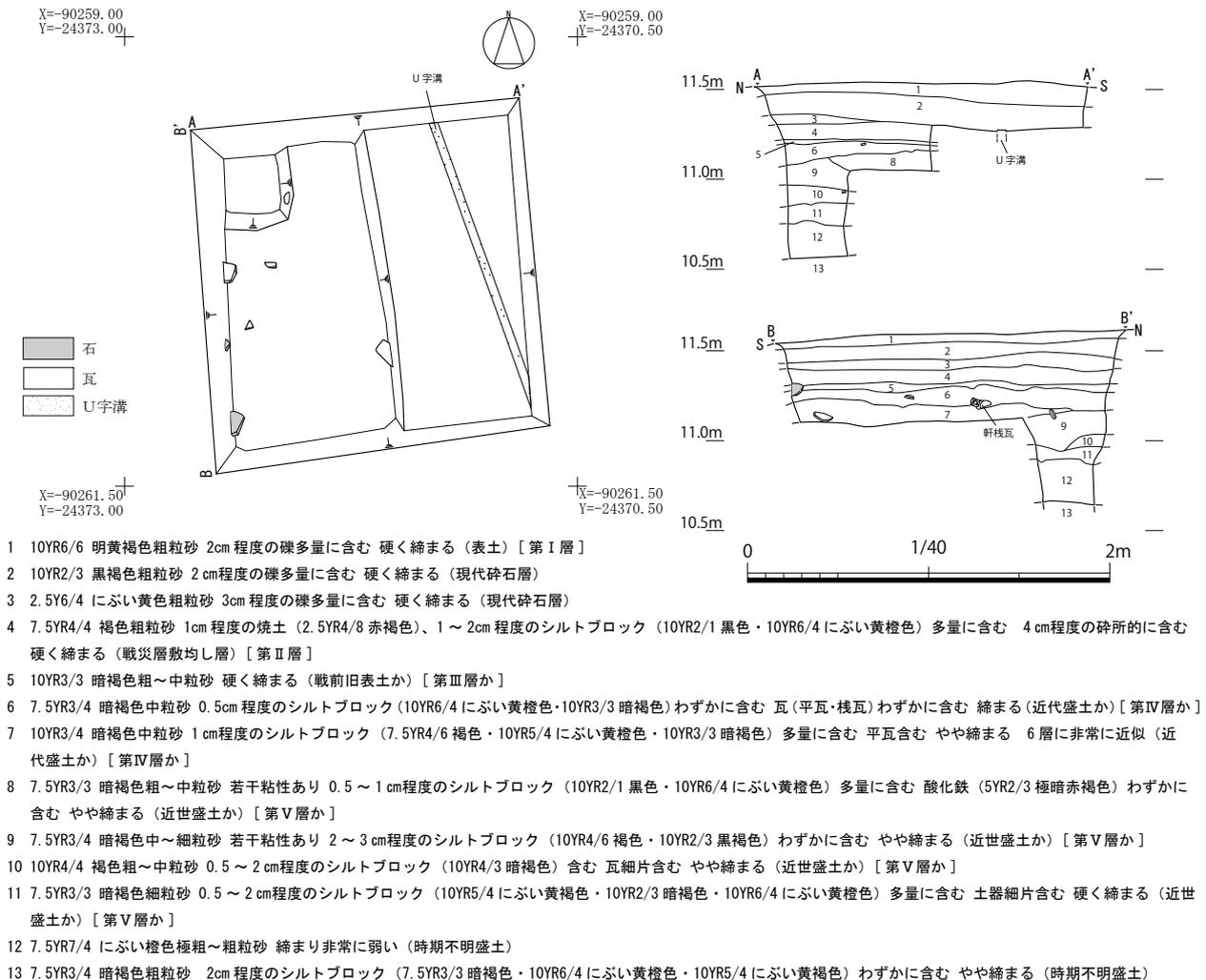


図 32 N区平面・断面図

## 2 通路側地区

御深井丸観覧通路における近世層の状況および、通路南側に面する本丸内堀石垣の背面構造を確認するため、石垣後方に4つの調査区を設定した。調査規模はP、I、C区は2m×2mとしたが、調査区Oでは、通路中央のアスファルト舗装上に亀裂が見られ、石垣背面での地割れの可能性もあったことから調査区を亀裂のある個所まで拡大し、亀裂の状況を確認した。

### (1) C区

#### 調査区の概要

遺構の残存状況を確認するため、本丸内堀北西隅付近に設置した調査区である。電気管路等の掘方を利用し、掘方内を約1m掘削して壁面を観察したところ、標高約10.8mで近世盛土層(第V層)を検出したが、その他に遺構は検出されなかった。

#### 層序

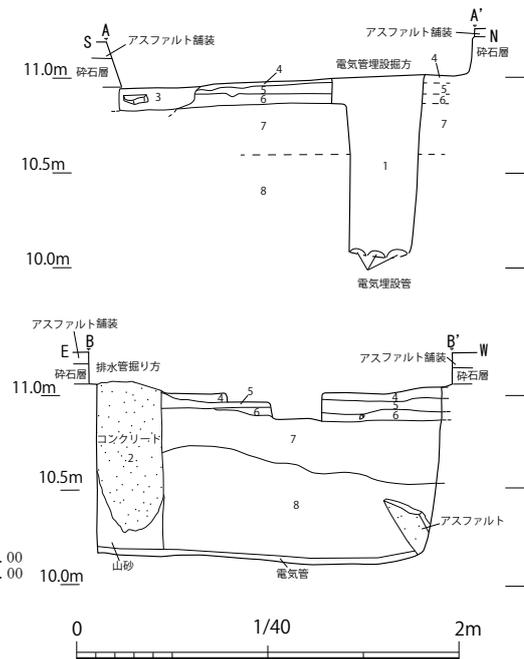
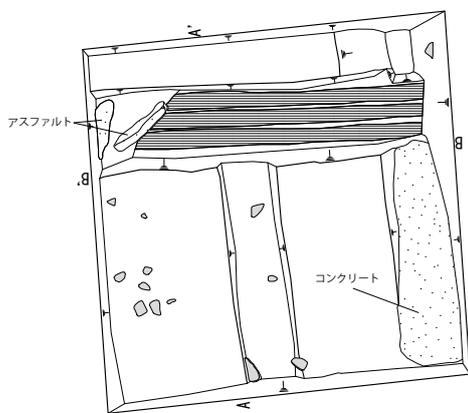
地表のアスファルト舗装、碎石層を取り除き、標高約10.9mで3層～6層を検出した。B区5～6層と土質が類似するため近代～近世の土層と判断した。遺物は瓦の細片が少数出土した。

3～6層の下、標高約10.8mで第V層を検出した。第V層は7層、8層に細分され、8層は約25cm、9層は30cm以上の堆積が確認された。遺物は瓦の細片が少数出土したのみだったが、土質、堆積層の厚さから近世盛土層と判断した。

X=-90283.00  
Y=-24420.00



X=-90283.00  
Y=-24417.00



X=-90286.00  
Y=-24420.00

- 石
- 電気埋設管
- コンクリート類

X=-90286.00  
Y=-24417.00

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂 アスファルト片等多量に含む 締まり弱い(電気管掘方、1980年埋設か)
- 2 5Y7/4 浅黄粗粒砂 山砂による埋め立て 管路上にコンクリートを流し込んでいる 山砂部分は締まり非常に弱い(排水管掘方)
- 3 10YR3/3 暗褐色細粒砂 1～5cmのシルトブロック(10YR2/2 黒褐色、5Y6/3 オリーブ黄色) 多量に含む 硬く締まる(時期不明土)
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂 シルトブロック(10YR5/4 にぶい黄褐色) わずかに含む 瓦細片含む 硬く締まる(時期不明土)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂 瓦細片含む 硬く締まる(近世～近代の盛土か) [第IV層～第V層か]
- 6 7.5YR3/4 暗褐色細粒砂 瓦細片を含む 硬く締まる(近世～近代の盛土か) [第IV層～第V層か]
- 7 7.5YR4/3 褐色細粒砂 0.5～2cmのシルトブロック(7.5YR2/2 黒褐色、10YR8/3 浅黄橙色、10YR5/6 黄褐) 多量に含む 硬く締まる(近世盛土か) [第V層か]
- 8 10YR3/3 暗褐色細～中粒砂 0.5～10cmのシルトブロック(色調は7層と同じ) 多量に含む やや締まる(近世盛土か) [第V層か]

図 33 C区平面・断面図

## 出土遺物

C区からはコンテナ1箱分の遺物が出土した。1層(埋設管掘方)出土の土管片が主であり、近世盛土層からは山茶碗細片1点(7層)、瓦細片複数(8層)が出土したのみで、遺物がほとんど出土しなかった。C区上は近世においても通路であったから、造成時や修繕の度に遺物が除去された可能性がある。この傾向は同じく通路上のO、I、P区でも同様であった。

## I区

### 調査区の概要

遺構の残存状況を確認するため、C区より約20m東に設置した調査区である。電氣管路等の掘方を利用し、掘方内を約1m掘削して壁面を観察したところ、C区と同様に標高約10.9mで近世盛土層を検出したが、その他に遺構は検出されなかった。

### 層序

土層の堆積状況は隣接するC区とほぼ同様であり、標高約11.05mで近代～近世の土層とみられる3～4層、標高10.9mで第V層とした5層を確認した。電氣管路掘方断面から第V層の状況を確認したところ、約70cm以上堆積していることが明らかとなった。

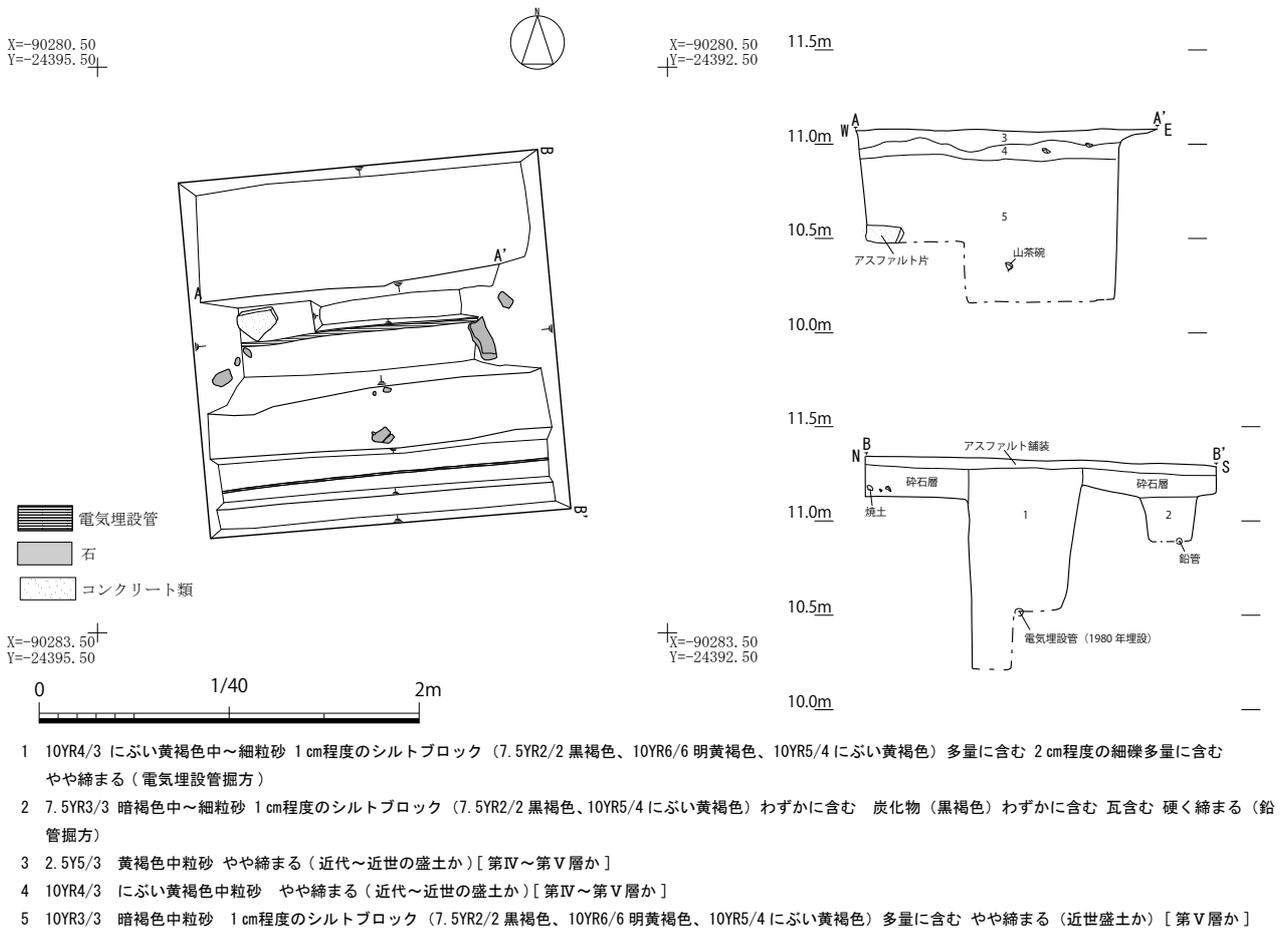


図 34 I区平面・断面図

## 遺物

I区からはコンテナ0.5箱分の遺物が出土した。近代盛土層からは山茶碗細片1点(5層)が出土したのみで、その他は埋設管掘方(1層)から土管片が少数出土した。

## 0区

遺構の残存状況を確認するため、I区より約20m東に設置した調査区である。遺構の有無に加え、アスファルト舗装上に生じていた亀裂の発生状況を確認するため調査区を拡大し、4m×2mとした。戦後の工事等による改変が著しく、調査区北側は現代層で掘り止めたが、調査区南側では標高11.5mで土質から近世盛土(第V層)と推定される層を検出した。合わせて亀裂の状況を確認したが、亀裂自体はアスファルト舗装上で留まっていたため、石垣の変形によるものではないことを確認した。

## 層序

基本的な土層の堆積状況はC、I区と同様であり、アスファルト舗装、碎石層の直下に近世～近代の盛

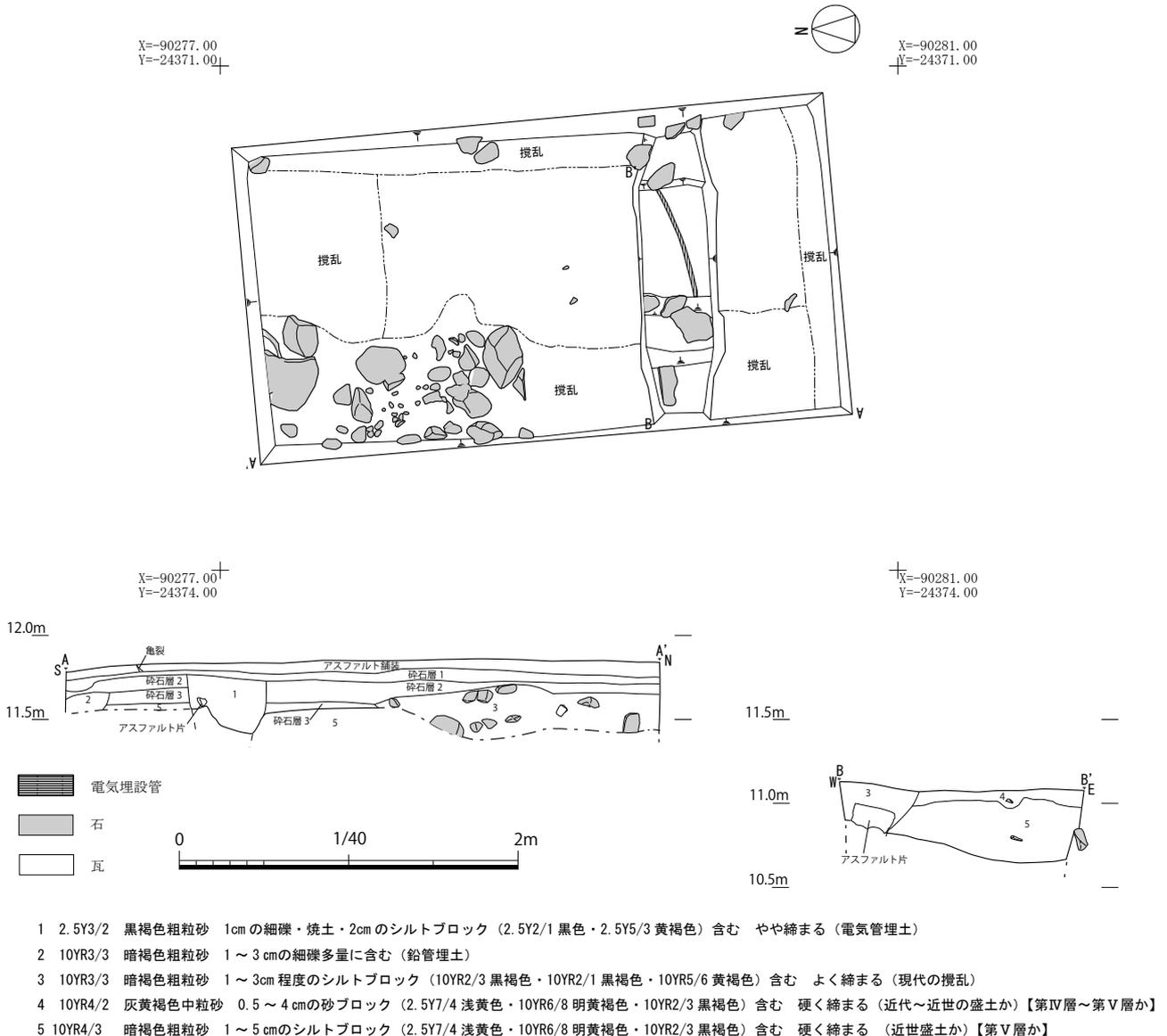


図 35 0区平面・断面図

土とみられる4層が薄く堆積し、その直下、標高約11.5mで近世盛土5層が約30cm以上堆積していた。

### 出土遺物

0区ではコンテナ0.5箱分の遺物が出土した。そのほとんどは現代の攪乱(3層)出土の鉄片、銅板細片等であった。近世盛土層(5層)では遺物は出土しなかった。

### (4) P区

#### 調査区の概要

遺構の残存状況を確認するため、0区の約20m西、本丸内堀の北東隅に設置した調査区である。電気管路等の掘方を利用し、掘り方内を約1m掘削して壁面を観察したところ、標高約10.6mで築城期盛土層の可能性ある土層を検出したが、その他に遺構は検出されなかった。

#### 層序

P区においても基本的な層序は先に示したC、I、O区と同様である。

アスファルト舗装、碎石舗装の直下、標高約11.20mで近代～近世の盛土とみられる2層～4層、標高約11.10mで土質から近世盛土(第V層)と推測される5～7層を検出した。7層は5cm程度の堆積であったが、川原石状の拳大の礫が多量に含まれていた。12層直下の標高10.65mでは、硬く締まり土質から築城期盛土と推測される8層(第VI層)を検出した。

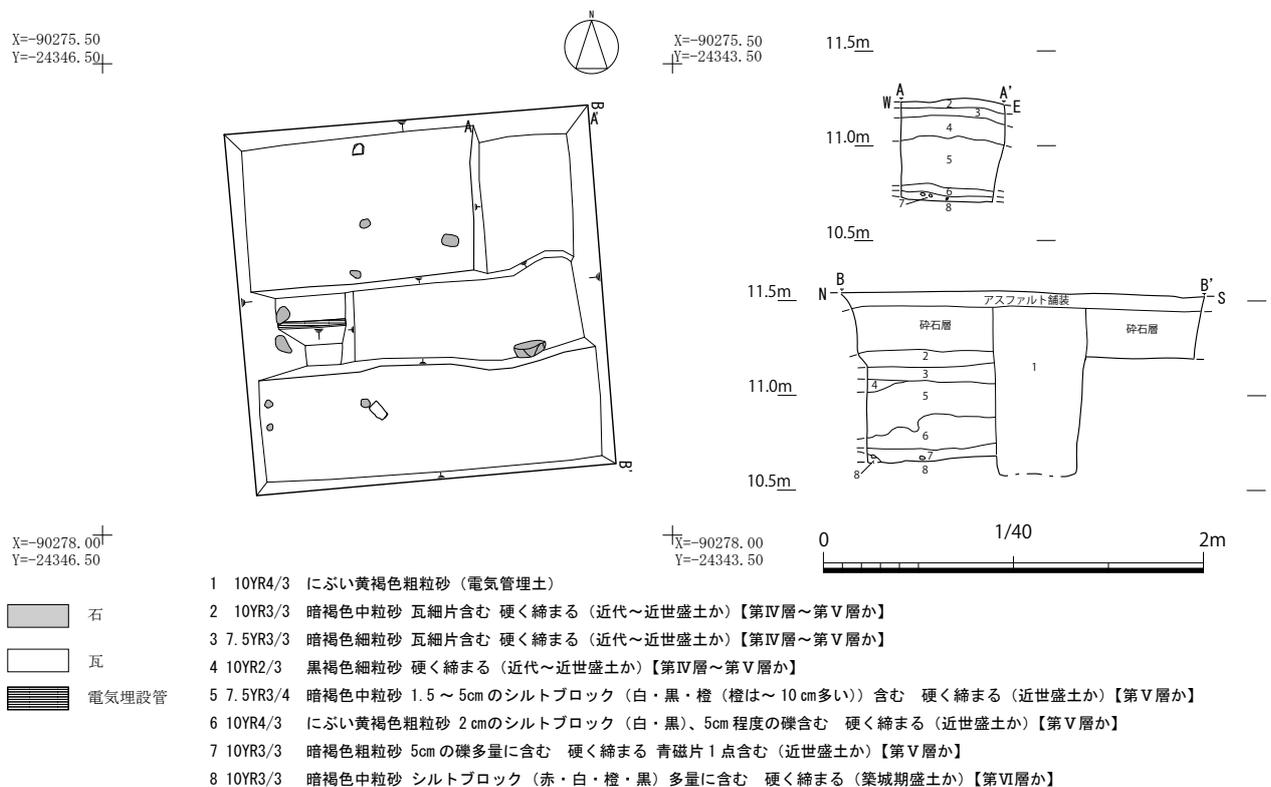


図 36 P区平面・断面図

## 出土遺物

P区ではコンテナ0.5箱分の遺物が出土した。2～3層から少数の瓦細片、7層から青磁片1点が出土したのみであった。

62は青磁皿か。口縁部のみ残存する。口縁部は輪花状となり、内外に青磁釉が施され胎土は灰色で緻密である。中国産陶磁器か。7層出土。

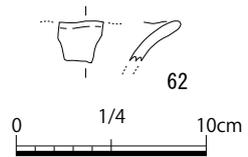


図 37 P区出土遺物

表 19 P区出土遺物観察表（土器・陶磁器）

NO.	検出地点	種別	器形	寸法 (mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色	生産地	生産年代	備考
				a	b	c			絵付 釉薬	文様				
62	7層	青磁	皿	-	[21]	-	7	ロクロ成形	青磁釉		褐灰	龍泉窯か	中世	

## 3 礎石展示場地区

御深井丸東側の天守台礎石展示場においても、遺構の残存状況を確認するため掘削を試みた。調査範囲内には既に大天守の礎石、石樋等が設置されていたため、これらの隙間に1m×2mの調査区を設定し掘削を行った。調査区自体が小規模であるため、下記に全調査区一括して調査結果を記す。

### 調査区の概要 (a区～i区)

礎石展示場内では9か所の調査区を設定した。

このうち、調査区a区、e区は礎石展示場造成時の礫層により固められており人力掘削が困難のため現代層中で掘削を取りやめた。そのため、これらの調査区の平・断面図は掘削取りやめ時の状況を図化している。

b、c、d、g、i区では近世盛土層（第V層）を検出した。このうちc、g区からは多量の瓦が検出された。

### 層序 (a区～i区)

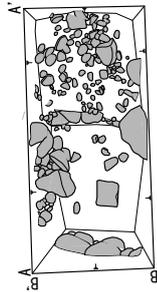
標高12.1m～12.4m(i区のみ11.65m)より第I層を検出した。第I層は約10cm、その下に礎石展示場造成時の土層が標高約11.8m～11.35mまで堆積していた。f区では同様の堆積が無く、瓦の細片を少量含む黄褐色土層(2層)が70cm以上堆積していた。

近世盛土層は現代盛土層の直下に堆積し、第II層～第IV層は現代の造成により削平されていた。近世盛土層を検出した標高は、瓦を多量に含むc区、g区ではそれぞれ標高約12.0m、11.75m、その他の調査区では標高約11.4m～11.0mであった。

X=-90255.50  
Y=-24363.50



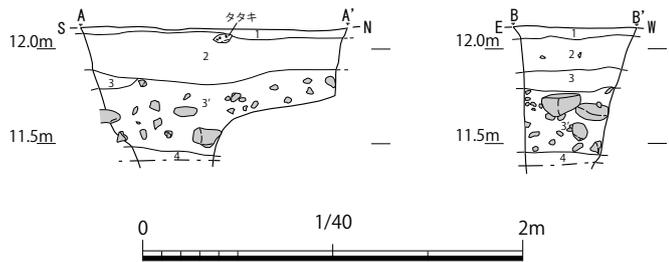
X=-90255.50  
Y=-24362.00



石

X=-90258.00  
Y=-24363.50

X=-90258.00  
Y=-24362.00



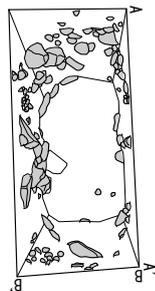
- 1 10YR3/3 暗褐色細粒砂 若干粘性あり しまり弱い(表土) [第1層]
- 2 7.5YR3/3 暗褐色粗粒砂 山砂 (2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗粒砂) 含む 1~3 cm程度のシルトブロック (7.5YR6/2 灰褐色、7.5YR5/6 明褐色、7.5YR2/2 黒褐色) 含む 瓦含むしまり弱い(現代盛土)
- 3 10YR3/4 暗褐色粗粒砂 1 cm程度のシルトブロック (2.5Y6/6 明黄褐色、10YR2/2 黒褐色、7.5YR5/8 明褐色) 含む 3 cm程度の礫含む しまり弱い(現代盛土)
- 3' 2.5Y3/2 黒褐色土 5~20 cm程度の礫多量に含むしまり非常に弱い(現代盛土)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色粗~中粒砂 2 cm程度の砂ブロック (5YR5/6 明黄褐色) (焼土か) わずかに含む ややしまる(現代盛土)

図 38 a 区平面・断面図

X=-90266.00  
Y=-24364.50



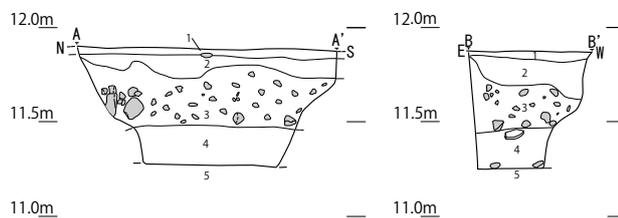
X=-90266.00  
Y=-24363.00



石  
瓦

X=-90268.50  
Y=-24364.50

X=-90268.50  
Y=-24363.00



- 1 10YR3/3 暗褐色細粒砂 若干粘性あり ややしまる(表土) [第I層]
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色中~細粒砂 1~2 cm程度のシルトブロック (10YR8/3 浅黄橙色、7.5YR2/2 黒褐色) 含む 砂ブロック (タタキか) (10YR6/8 明黄褐色) 1 cm程度の炭化物 (10YR2/1 黒色) わずかに含む しまり弱い(現代盛土)
- 3 10YR3/3 暗褐色粗粒砂 5~10 cm程度の礫多量に含む しまり弱い(現代盛土)
- 4 2.5Y4/2 明灰褐色細粒砂 若干粘性あり 3 cm程度のシルトブロック (10YR7/3 にぶい黄橙色、10YR2/2 黒褐色) 多量に含む 瓦含む ややしまる(現代盛土)
- 5 10YR2/3 黒褐色細粒砂 2~4 cm程度のシルトブロック (2.5Y7/4 浅黄色、10YR2/2 黒褐色、10YR6/6 明黄褐色) 多量に含む 炭化物 (10YR2/1 黒色) わずかに含む 瓦含む ややしまる(近世盛土か) [第V層か]

図 39 b 区平面・断面図

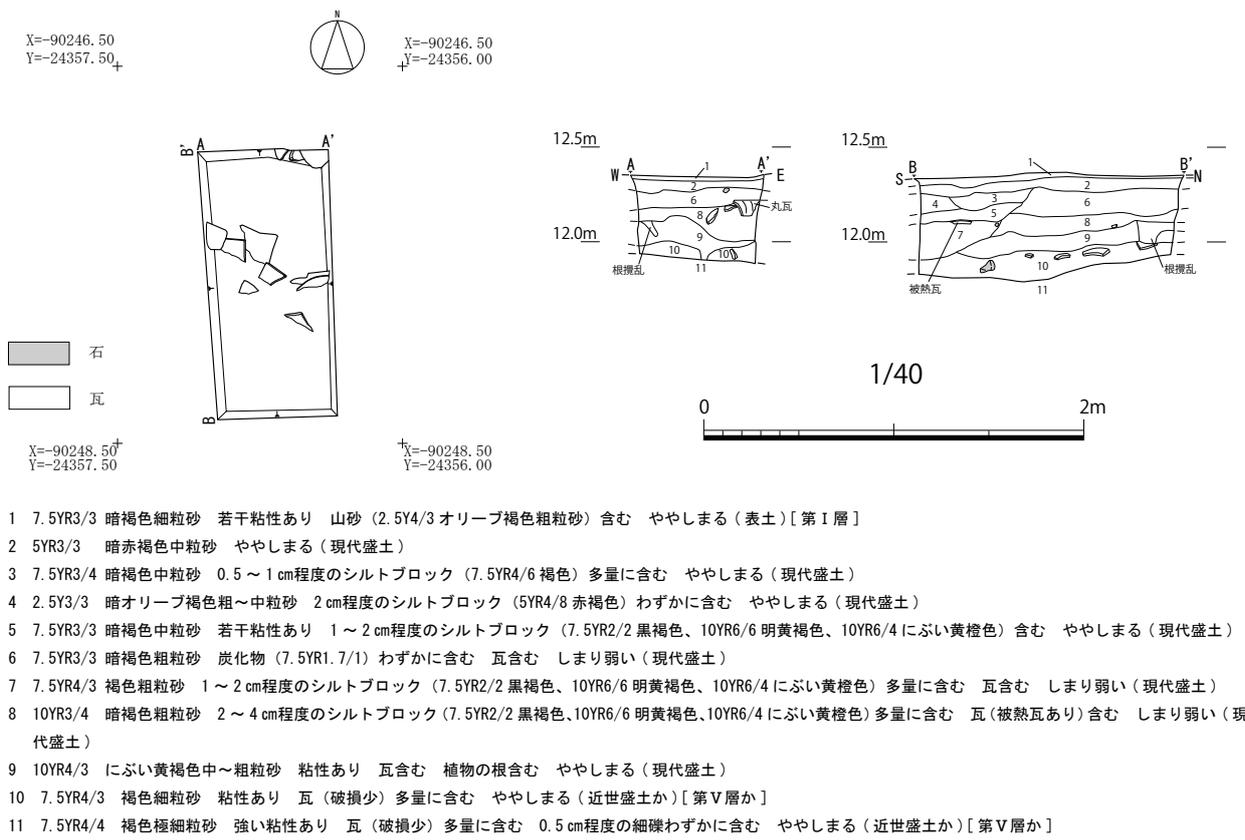


図 40 c 区平面・断面図

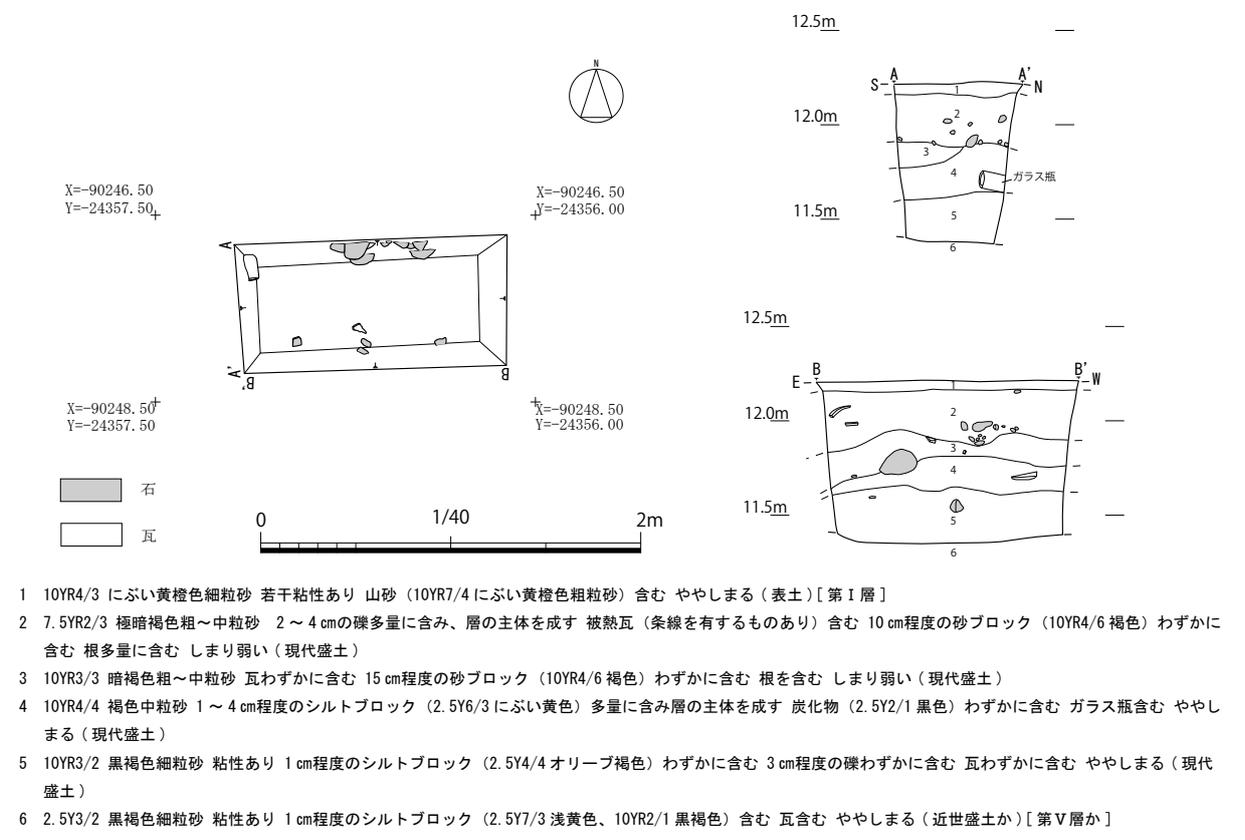


図 41 d 区平面・断面図

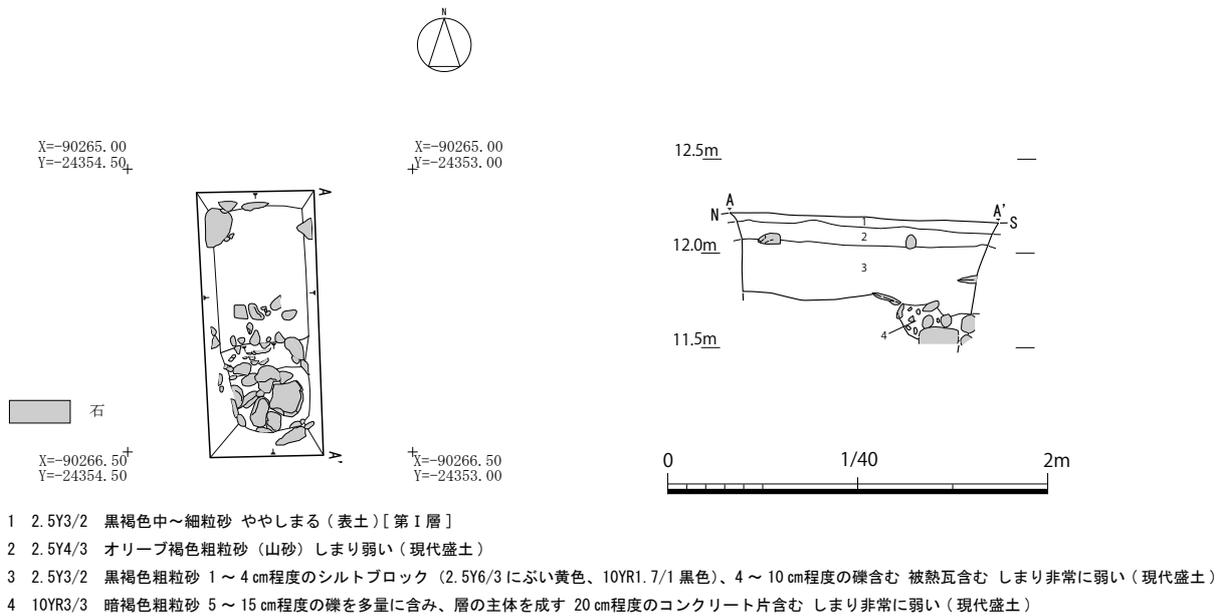


図 42 e 区平面・断面図

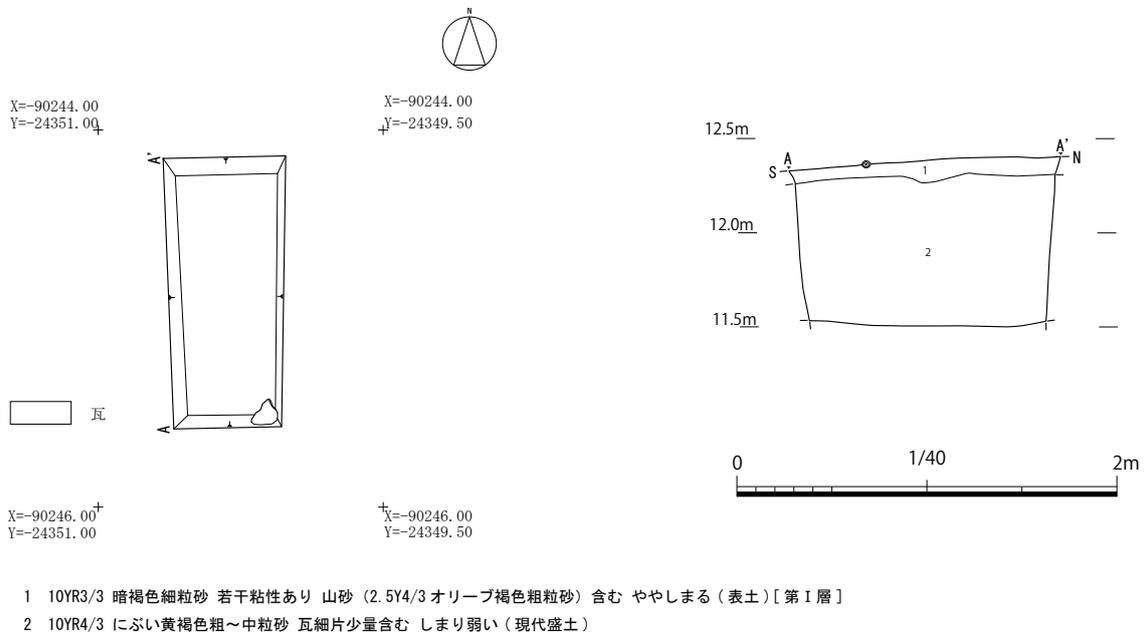
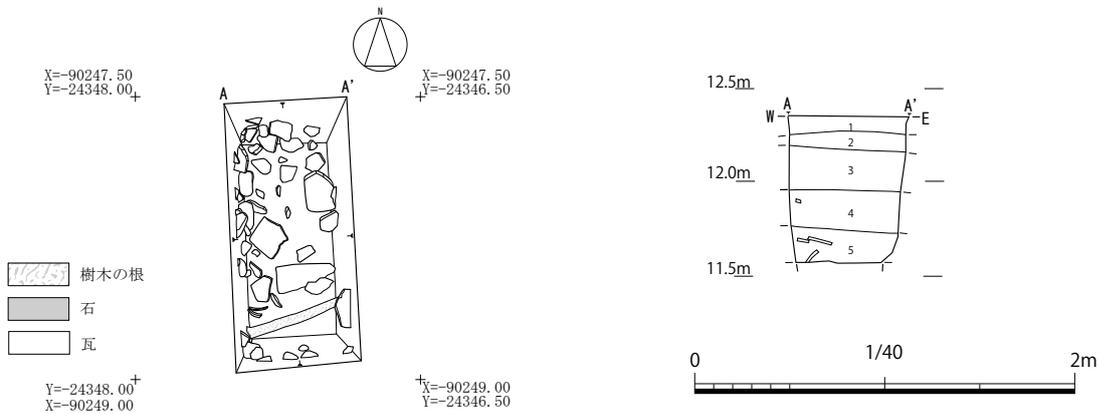
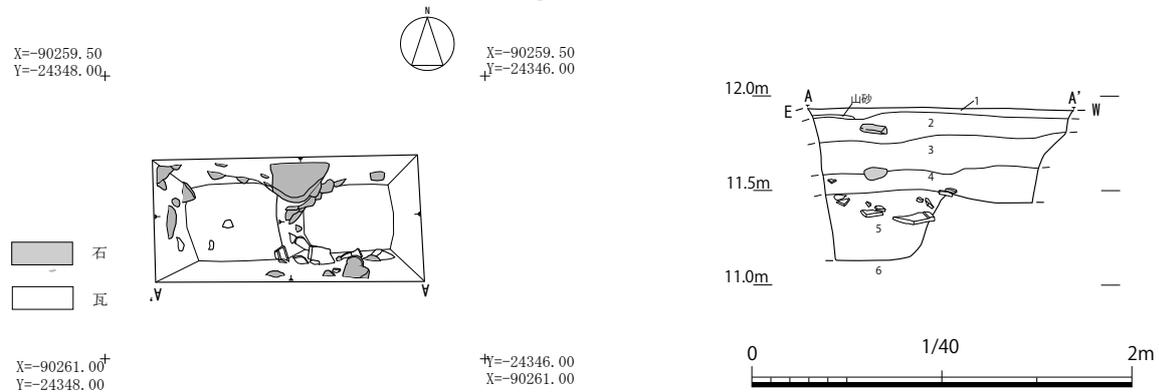


図 43 f 区平面・断面図



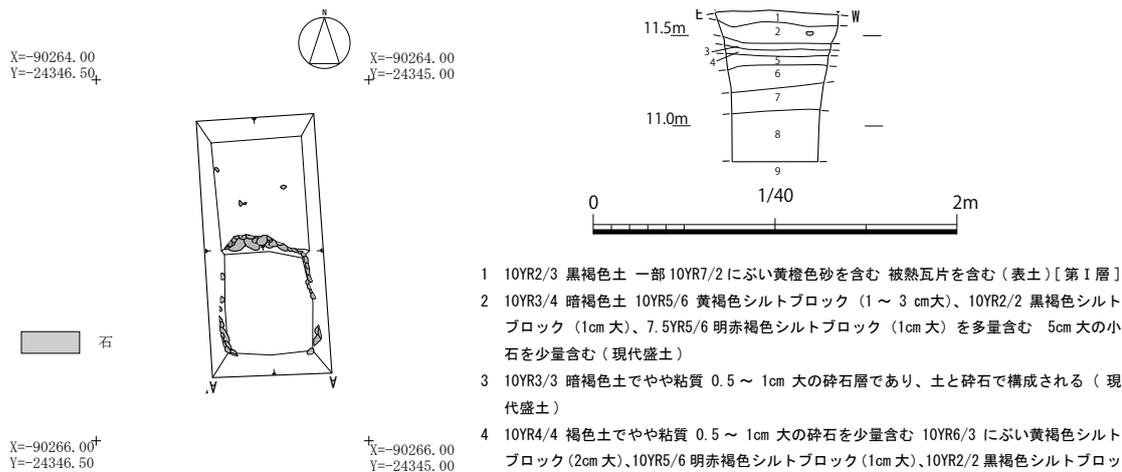
- 1 10YR3/3 暗褐色土 10YR7/2 にぶい黄橙色砂を一部含む (表土) [第I層]
- 2 7.5YR4/4 褐色土 細かな (5mm) 5YR3/6 暗赤褐色粒、10YR6/6 明黄褐色粒、10YR7/2 にぶい黄橙色シルト粒を微量含む (現代盛土)
- 3 7.5YR4/4 褐色土 2 に似るが、5YR3/6 暗赤褐色粒、10YR6/6 明黄褐色粒、10YR7/2 にぶい黄橙色粒が大きくなり (2cm大)、多量に含む 2~3cmの小石を一部含む瓦 (20cm大まで) を含む (現代盛土)
- 4 7.5YR4/4 褐色土 3 に似る 完形に近い瓦 (20cm大) を多量に含む (現代盛土)
- 5 10YR4/4 褐色粘質土 均質で粘性が高く、よくしまる 完形に近い瓦 (20cm大) を多量に含む (近世盛土か) [第V層か]

図 44 g 区平面・断面図



- 1 7.5YR2/3 極暗褐色細粒砂 若干粘性あり 山砂 (10YR4/4 褐色粗粒砂) 含む ややしまる (表土) [第I層]
- 2 7.5YR3/4 暗褐色粗粒砂 若干粘性あり 1~3cm程度のシルトブロック (7.5YR7/4 にぶい橙色、5YR2/3 暗暗赤褐色) 多量に含む しまる (現代盛土)
- 3 10YR3/3 暗褐色中粒砂 2cm程度の礫多量に含む しまり弱い (現代盛土)
- 4 7.5YR3/3 暗褐色中~粗粒砂 若干粘性あり 2cm程度の炭化物 (2.5Y1.7/1 黒色) わずかに含む ややしまる (現代盛土)
- 5 10YR3/4 暗褐色細粒砂 粘性あり 漆喰細片 (10YR8/2 灰白色) 焼土 (5YR5/6 明赤褐色) 瓦 (被熱瓦、条線有する瓦、平瓦) 多量に含む ガラス細片、近現代磁器 (ゴム印判含む) わずかに含む ややしまる (現代盛土)
- 6 10YR3/3 暗褐色細粒砂 粘性あり 漆喰細片 (10YR8/2 灰白色) 多量に含む ややしまる (現代盛土)

図 45 h 区平面・断面図



- 1 10YR2/3 黒褐色土 一部 10YR7/2 にぶい黄橙色砂を含む 被熱瓦片を含む (表土) [第I層]
- 2 10YR3/4 暗褐色土 10YR5/6 黄褐色シルトブロック (1~3cm大)、10YR2/2 黒褐色シルトブロック (1cm大)、7.5YR5/6 明赤褐色シルトブロック (1cm大) を多量含む 5cm大の小石を少量含む (現代盛土)
- 3 10YR3/3 暗褐色土でやや粘質 0.5~1cm大の碎石層であり、土と碎石で構成される (現代盛土)
- 4 10YR4/4 褐色土でやや粘質 0.5~1cm大の碎石を少量含む 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトブロック (2cm大)、10YR5/6 明赤褐色シルトブロック (1cm大)、10YR2/2 黒褐色シルトブロック (1cm大) を多量含む (現代盛土)
- 5 10YR3/3 暗褐色土でやや粘質 0.5~1cm大の碎石層であり、3層と同質 (現代盛土)
- 6 3~10cmほどの円礫 (玉石) で構成される層 (現代盛土)
- 7 10YR3/3 暗褐色土でやや粘質 10YR7/3 にぶい黄橙色シルトブロック (1cmほど)、10YR5/6 明赤褐色シルトブロック (1cmほど)、10YR2/2 黒褐色シルトブロック (1cmほど) を微量含む (現代盛土)
- 8 10YR3/4 暗褐色土で、そこまでしまりがいい やや粘質 10YR2/2 黒褐色シルトブロック (1cm大)、10YR7/3 にぶい黄橙色シルトブロック、10YR5/6 黄褐色シルトブロック (1cm大) を微量含むが均質 (近世盛土か) [第V層か]
- 9 10YR3/4 暗褐色土 ややしまる 8層に含まれていたシルトブロックを多量含む (近世盛土か) [第V層か]

図 46 i 区平面・断面図

出土遺物 (a～i区)

a～i区ではコンテナ9箱分の遺物が出土した。g区5層出土の瓦が半数を占める。

63は丸瓦。凹部にはコビキBによる切り離し痕が残る。釘穴はみられない。c区8層出土。64は鬼瓦または鯨瓦か。表面には工具で沈線が施され、鱗のような造形となる。左側には穴がみられる。c区11層出土。65～67は軒丸瓦。瓦当は、65、67は右巻三巴文、66は左巻三巴文であり、瓦当表面にはハナレ砂が付着している。68は平瓦、69は菊丸瓦の丸瓦部で、瓦当部は欠損している。すべてg区5層出土。

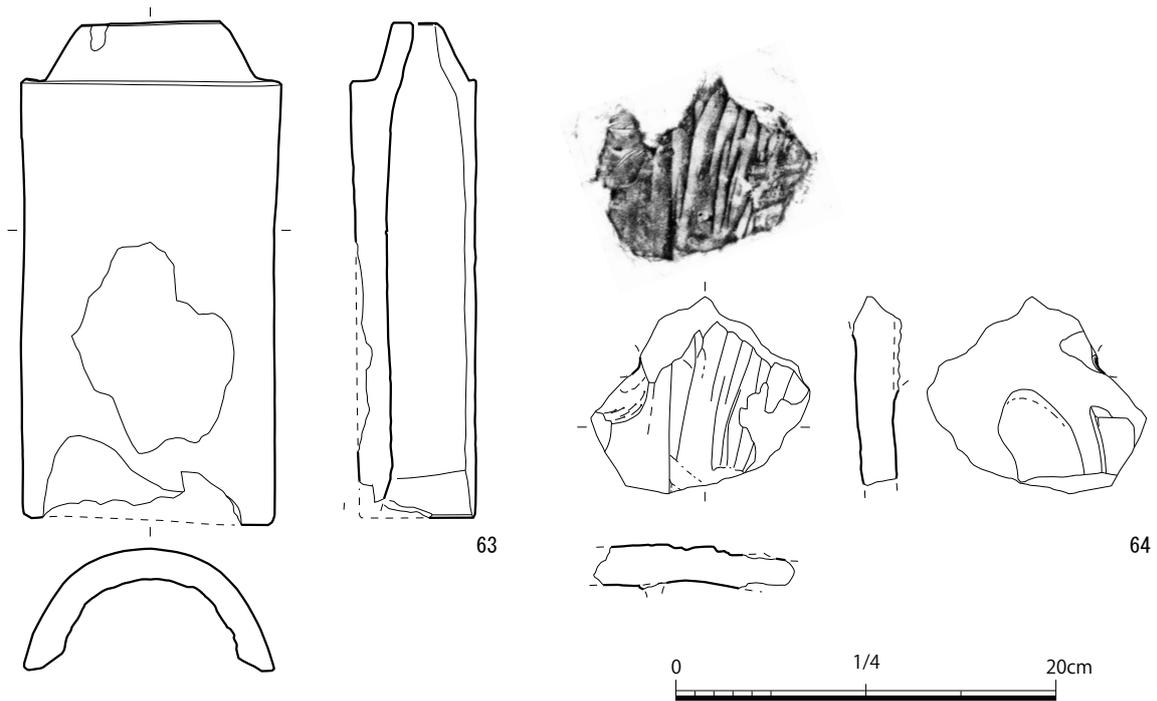


図 47 c区出土遺物（瓦）

表 20 c区出土遺物観察表（瓦）

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	製作技法	備考
			a	b	c	d					
41	8層	丸瓦	137	64	267	16.5	1000	-	灰 灰白	コビキB	内面に型布跡、釣り紐跡あり
39	11層	不明	[115]	[104]	21	-	221	-	暗灰 灰白	-	外面に工具による造形、内面に貼り付け痕あり 鯨瓦等の一部か

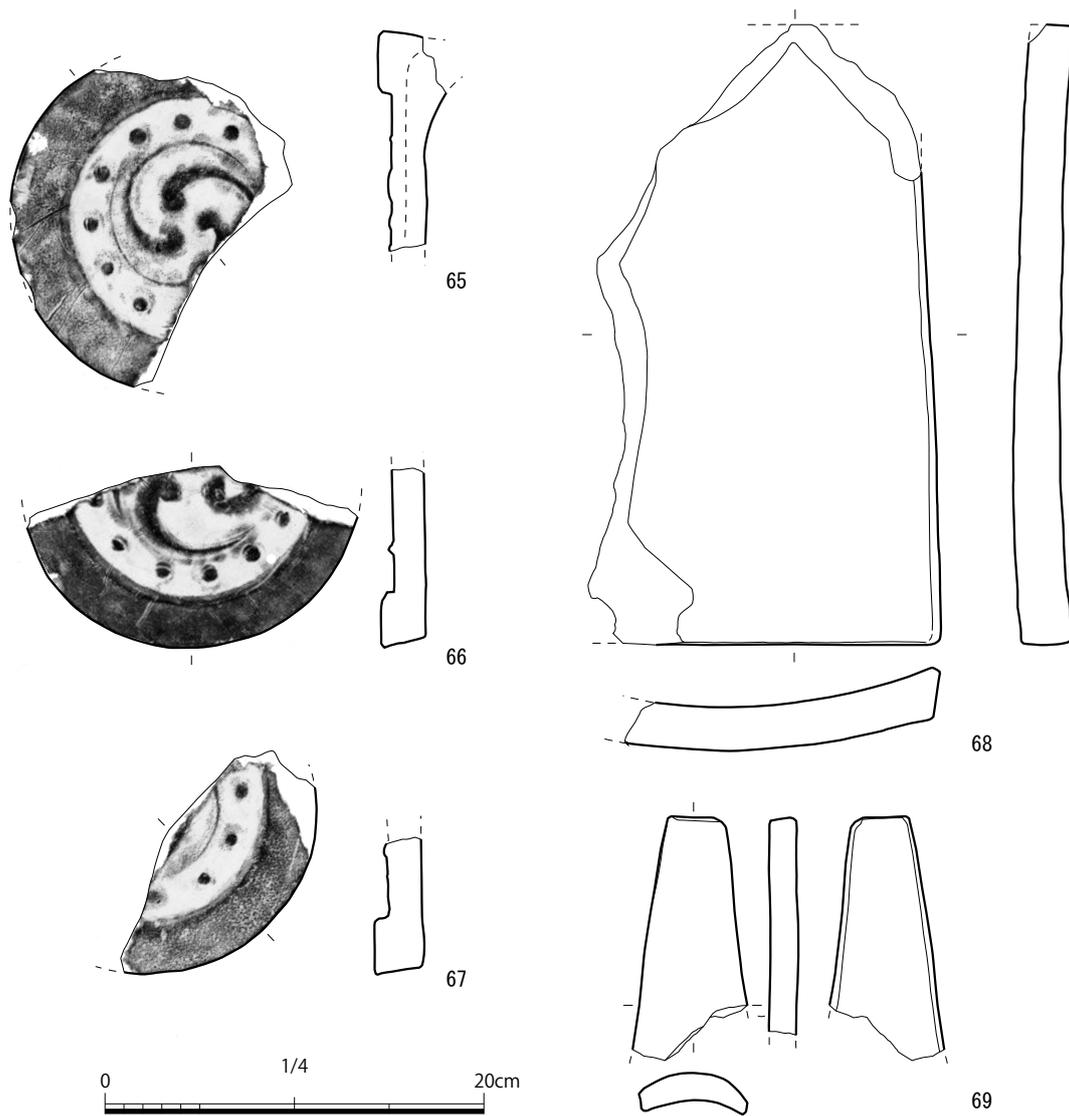


図 48 g 区出土遺物（瓦）

表 21 g 区出土遺物観察表（瓦）

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	製作技法	備考
			a	b	c	d					
65	5層	軒丸瓦	(160)	-	[30]	-	635	右卷三巴文	灰白 灰	-	瓦当部分にハナレ砂付着
66	5層	軒丸瓦	(180)	-	[24]	-	406	左卷三巴文	灰白 灰	-	瓦当部分にハナレ砂付着
67	5層	軒丸瓦	(180)	-	[24]	-	500	右卷三巴文	灰 灰白	-	瓦当部分にハナレ砂付着
68	5層	平瓦	[167]	[330]	-	[23]	300	-	灰 部分的にぶい黄橙 灰白	-	-
69	5層	菊丸瓦	[56]	-	[129]	[15]	134	-	灰 灰黄	-	瓦当部分欠損

#### 4 小天守西側地区

小天守西側は、濃尾地震(明治24年)により石垣が崩落し、大規模に積み直されている。そのため、近世遺構は積み直しに際し失われたと想定されてきたが、正確な状況はこれまで明らかになっていないため、これらの残存状況を確認すること、積み直しにより改変された小天守西側石垣の背面構造の状況を確認することを目的に調査区Qを設定した。

##### 調査区の概要

当初、Q区では2×10mの調査区設定を予定していたが、付近に樹の根が密集し、掘削の困難が予想されたことから、これを避け範囲を縮小した上で西側トレンチ、東側トレンチに分割した。

西側トレンチでは第V層の可能性のある層を面的に検出したが、東側トレンチでは濃尾地震後の整地土層までの検出に留まった。両調査区ともその他の遺構は検出されなかった。小天守西側石垣の背面も検出されなかった。

##### 層序

西側トレンチでは、標高19.3m～19.1mより第I層が約10cm堆積するが、その下に明確な第II層～第IV層は確認できず、近現代の埋土とみられる土層が堆積していた。これらは2層から5層に分層され、2層は焼土を局所的に含み、3～5層は地山由来のシルトブロックをまばらに含む。トレンチ東壁では2～4層を掘りこんだ6層があり、深さは約70cmで内部には瓦が多数含まれていた。

これらの下、標高約18.30mで第V層の可能性のある層を検出したが、確実な近世遺構の高さを把握することはできなかった。

東側トレンチでは、標高約18.8mより第I層が約5cm堆積、西側トレンチと同じくその下に明確な第II～IV層は無く、標高18.7cmから18.15cmにかけて近現代埋土が堆積する。近現代埋土は2～4層に分層され、2、4層には漆喰の破片が混ざる。加えて、4層下層には拳大～20cmの礫が多数含まれ、築石の破片となるような石材の欠片も確認された。礫、石材の欠片に阻まれ4層中で掘削が困難となったため、第V層は検出できなかった。

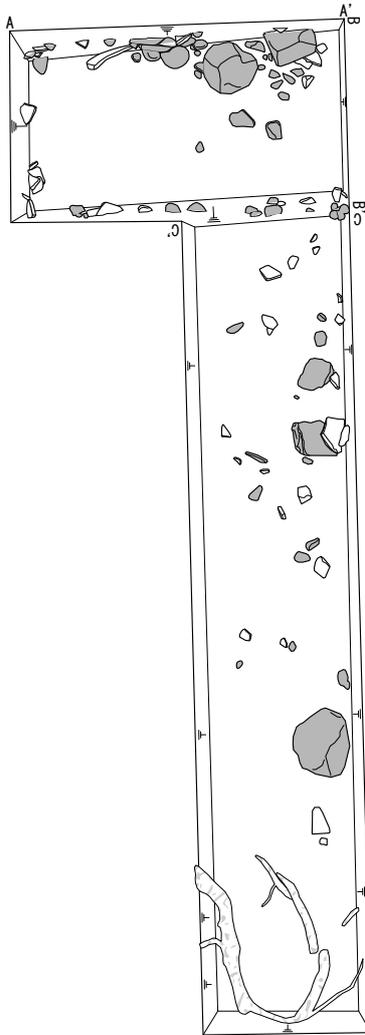
##### 遺物

Q区ではコンテナ6箱分の遺物が出土した。ほぼすべてが第I層、第IV層出土の瓦類であった。

70は軒棧瓦である。瓦当は東海式唐草文で表面にはキラコが付着している。71は軒丸瓦である。瓦当は左巻三巴文で、瓦当面にはハナレ砂が付着している。ともに東側トレンチ3層出土。

X=-90367.00  
Y=-24378.00

X=-90364.00  
Y=-24378.00

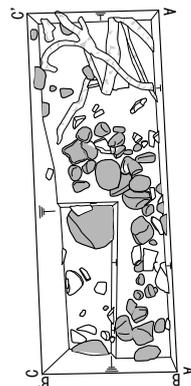


西側トレンチ

-  樹木の根
-  石
-  瓦



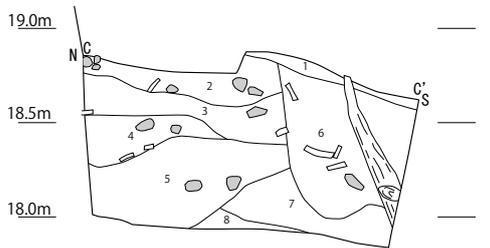
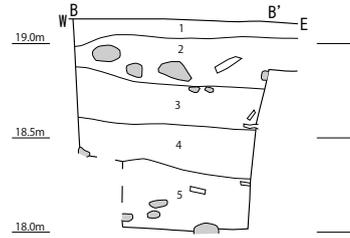
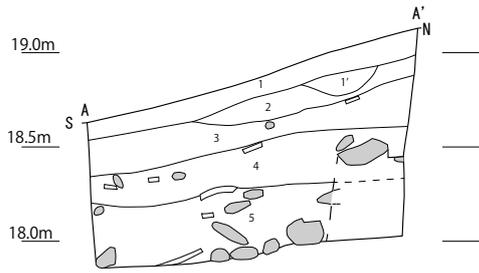
X=-90367.00  
Y=-24368.50



東側トレンチ

X=-90364.00  
Y=-24368.50

図 49 Q 区平面図

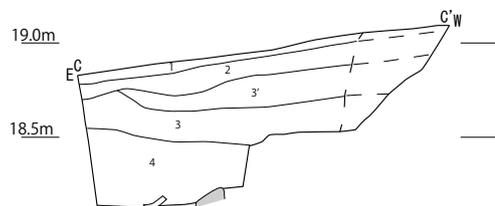
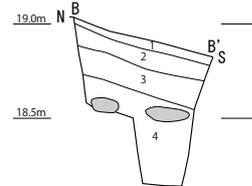
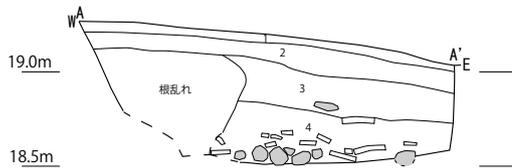


- 樹木の根
- 石
- 瓦



【西側トレンチ】

- 1 10YR3/3 暗褐色土 (表土) [第I層]
- 1' 7.5YR3/2 黒褐色土 (西壁P)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色土 10mm大円礫、瓦片目立つ
- 3 5YR3/2 暗赤褐色土 シルト強い 0.1mm大地山ブロック等まばら
- 4 7.5YR4/3 褐色土 3の土に似るがやや砂質強い 0.1mm大地山ブロック等まばら 垂角礫10mm大、瓦片目立つ
- 5 7.5YR4/3 褐色土 4の土に似る ややしルト強い
- 6 5YR4/2 灰褐色土 シルト質のところは硬い 瓦集中部は砂がちで脆い (瓦集中)
- 7 10YR3/3 暗褐色土 シルト質強く均質 粘り気あり (近世埋土) [第5層か]
- 8 10YR6/4 にぶい黄褐色粘土と7.5YR4/3 褐色土の混土 やや締まる (近世埋土(盛土)か) [第V層]



- 樹木の根
- 石
- 瓦



【東側トレンチ】

- 1 10YR3/3 暗褐色土 (表土) [第I層]
- 2 7.5YR2/3 極暗褐色土 漆喰片塊を含む [第IV層]
- 3 10YR4/2 灰黄褐色土 やや砂強い 0.1~0.2mm大地山ブロックやや目立つ [第IV層]
- 3' 7.5YR3/2 黒褐色土 シルト強くやや締まる [第IV層]
- 4 10YR3/3 暗褐色土 漆喰片まばら 瓦片、拳大~20cmの礫多く混じる 築石の破片のような欠片あり [第IV層]

図 50 Q 区断面図

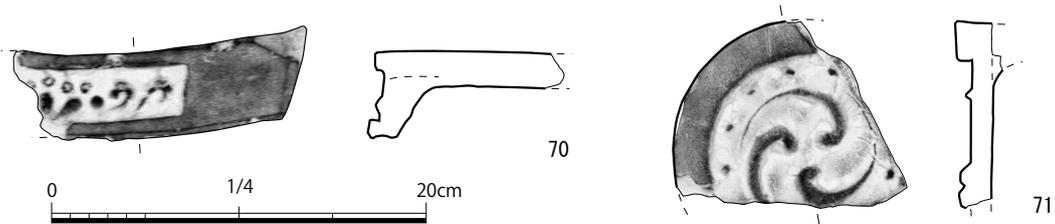


図 51 Q 区出土遺物

表 22 Q 区出土遺物観察表（瓦）

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	製作技法	備考
			a	b	c	d					
70	東トレ3層	軒棧瓦	[105]	46	[140]	18	342	東海式唐草文	灰白 灰	-	瓦当部分にキラコ付着
71	東トレ3層	軒丸瓦	(143)	-	[12]	-	271	左巻三巴文	灰 灰白	-	瓦当部分にハナレ砂付着

### 第 3 節 発掘調査成果のまとめ

#### 1 近世盛土層の検出状況と近世遺構面の深さについて

今回の調査では、礎石展示場内の a 区、d 区、e 区、f 区、h 区を除くすべての調査区で近世盛土層を検出した。検出された標高は茶庭、通路側で 11.1 ~ 10.5 m、礎石展示場で 12.0 ~ 11.75 m であった。これに対し、近世遺構 B 区石列【SB01】を構成する間知石上端は標高 10.8 m であった。水路という遺構の性質上近世の生活面もこの付近にあったと考えられる。礎石展示場以外は B 区石列の標高に比較的近く、近世盛土層は後世に大きな掘削を受けなかったと想定される。

しかし、「御番所」遺構の存在が想定された A 区を含め近世盛土上では関連遺構が一切検出されず、絵図等が示す通り、近世の御深井丸西側は一部の簡素な掘立柱建の建物を除き、植栽が広がる空間が存在したと考える。小天守西側では確実な近世面検出に至らず、条件が整い次第再調査の予定である。

以上に示した近世遺構、近世盛土の検出状況から推定した G.L. からの近世遺構面の深さを表 23 に示した。今回の調査により、調査範囲内での近世遺構面残存状況、遺構面の地表からの深さが確認できた。

表 23 近世遺構面の深さ一覧

大地区名	調査区名	近世遺構面 標高 (m)	G.L. からの近世 遺構面深さ (m)	
茶庭側	A	11.0	0.2	
	B	11.2	0.2	
	D	10.8	0.4	
	E	10.8	0.6	
	F	10.5	0.6	
	G	10.9	0.5	
	H	10.9	0.5	
	J	10.7	0.7	
	K	11.0	0.5	
	L	10.7	0.8	
	M	10.8	0.7	
	N	11.2	0.5	
	通路側	C	10.8	0.3
		I	10.9	0.2
O		11.5	0.3	
P		11.1	0.5	
礎石展示場	a	-	-	
	b	-	-	
	c	12.0	0.4	
	d	11.4	0.9	
	e	-	-	
	f	-	-	
	g	11.8	0.7	
	h	-	-	
	i	11.1	0.6	
小天守西側	Q	(18.3)	(0.8)	

#### 2 検出遺構について

先述の通り、今回の調査範囲内で検出された近世遺構は盛土を除くと B 区の石列【SB01】のみであった。近代~現代に属する遺構としては、E、G、J、K、M 区で廃棄土坑が確認された。被熱瓦、金属製品

を含むG区、K区は名古屋空襲以後に掘削されたもの、被熱のない瓦を含むE、J、M区は近代に掘削された土坑と推定した。

これらの遺構の検出状況から、近代～現代にかけての御深井丸は、天災、戦災があった際の瓦礫の廃棄場としても利用されたことが推定される。

表 24 検出遺構一覧

遺構番号	調査区	検出標高 (m)	時期	備考
SB01	B区	11.1	近世か	「水道」の一部か
SK01	E区	11.2	近代	瓦が多数出土
SK02	G区	11.2	現代	空襲による焼損金具廃棄の痕跡
SK03	J区	11.0	近代	瓦、漆喰片が多数出土 濃尾地震後の瓦礫処理の痕跡か
SK04	K区	11.3	現代	空襲による被熱瓦廃棄の痕跡
SK05	M区	11.3	近代	瓦が多数出土 陸軍期の埋め立てか

### 3 出土遺物について—金属製品を中心に—

今回の調査ではコンテナ 58 箱分の遺物が出土した。これらの中で特筆すべき遺物としては、G区、L区で出土した多数の金属製品があげられる。出土遺物は釘、銅板で構成され、史料の記載、遺物の様相から焼失前の天守等に使用された部材と考えられる。少数ながら文様や金箔が施された遺物も確認された。

名古屋城天守、御殿を彩った装飾金具類は、太平洋戦争の戦禍により大半が焼失したが、その一部は戦前より作成が進められていた『昭和実測図』に記載されており、金具の形状、寸法、使用された位置が現在に伝えられている。そこで、同図所収の実測図と今回調査の出土遺物を比較した。

その結果、出土遺物は焼損、変形しているため全く同寸の金具は存在しなかったが、G区出土の 12 は裏葵紋、猪の目の大きさが、L区出土の 53 は裏葵文の大きさと直径、天守四層に使用された六様釘隠しと寸法が近似していた(図 52)。また、出土遺物との比較により、魚々子、修理時に穿たれたとみられる中心の孔の存在など、一部の細かな文様や後世の修理の痕跡は『昭和実測図』には記載されていない情報である。

以上の点により、一部ながら出土遺物の出自が確認できたとともに、既存史料を補う情報も得ることができた。これらは時の天守等の姿を伝える資料として貴重であり、今回は筆者の力量不足により一部の提示にとどまったが、今後も継続して調査研究を継続する必要がある。

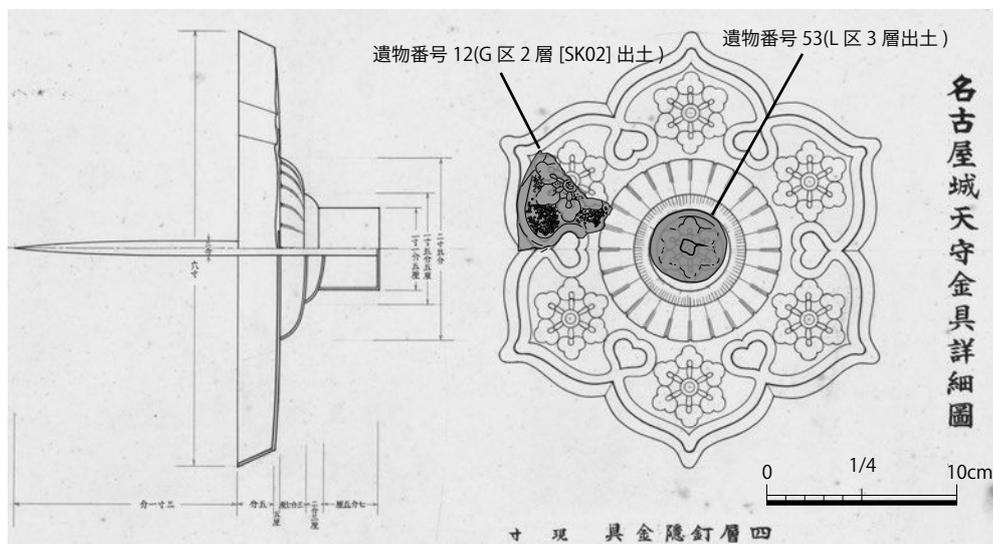


図 52 名古屋城大天守四層六葉釘隠しと出土遺物（名古屋城総合事務所蔵『昭和実測図』を一部改変）

## 第4章 金属製品の自然科学分析

### 第1節 銅板黒色付着物の赤外分光分析・レーザ元素分析

#### 1 はじめに

名古屋城跡の御深井丸の銅瓦葺き材料と思われる銅板に付着する黒色物について、材質を調べるために赤外分光分析とレーザ元素分析を行った。

#### 2 試料と方法

分析試料は、銅板(遺物番号 57) 表 25 分析資料と詳細

に付着する黒色物である。なお、緑錆についても測定した(表 25、図版 53-1a ~ 1d)。

分析 No.	検出地点	遺物名	分析位置	分析対象	備考
1	L区3層	銅板(57)	内側	黒色付着物(緑錆)	チャン塗りか

赤外分光分析では、手術用メスを用いて黒色付着物と緑錆の表面から粉末(約 0.2mm 角)を採取し、ダイヤモンドセルに載せて薄く伸ばした。測定には、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光株式会社製 FT/IR-4X、IRT-5200-16)を使用した。測定では、標準光源を用いて、範囲  $100 \times 100 \mu\text{m}$ 、測定時間 200 秒、透過法による赤外吸収スペクトルを測定した。

レーザ元素分析では、銅板内側の黒色付着物と緑錆について各 3 カ所について測定した。測定は、株式会社キーエンス製 VHX シリーズ EA-300 のレーザ元素分析計を使用した。この装置は、レーザ誘起ブレイクダウン分光法(LIBS)により、水素(H)より重い元素の測定が可能である。測定条件は、クラス 1 レーザ(最も弱いレベルのレーザ光、IEC/EN60825-1 JIS C 6802)、測定雰囲気が大気、レーザ波長 355nm、スポットサイズ  $10 \mu\text{m}$ 、測定感度 1% 以上である。

定量元素は、銅 Cu、酸素 O、イオウ S、塩素 Cl、炭素 C、ケイ素 Si、アルミニウム Al、鉄 Fe、水素 H、ナトリウム Na、マグネシウム Mg、リン P、カリウム K、カルシウム Ca、チタン Ti、マンガン Mn である。

#### 3 結果および考察

以下に、赤外分光分析とレーザ元素分析の結果について述べる。

##### [赤外分光分析]

赤外分光分析では、銅板の内側の黒色付着物と緑錆を測定し、生漆との比較を行った。

図版 53-2 の赤外吸収スペクトル図の縦軸は透過率(%T)、横軸は波数(Wavenumber  $\text{cm}^{-1}$ )；カイザーを示す。

複数ヶ所において測定した結果、炭化水素の吸収(漆のスペクトルの No.1 と No.2)は見られなかった。

黒色付着物において、その他の主な吸収は、緑錆の吸収であった(図版 53-2)。

##### [レーザ元素分析]

黒色付着物は、炭素 C が最大 4.0%、水素 H が最大 1.6% であった。その他では、銅 Cu が最大 58.0%、酸素 O が最大 31.2%、イオウ S が最大 6.7%、塩素 Cl が最大 4.6%、などであった(表 26)。

なお、緑錆では、炭素Cが最大7.4%、水素Hが最大1.3%であった。その他では、銅Cuが最大51.7%、酸素Oが最大36.6%、イオウSが最大12.5%、塩素Clが最大9.0%、などであった（表25）。

#### 4 考察

銅瓦葺き材料と思われる銅板の塗膜状黒色物について調べた。これら塗膜状黒色物は、金属の腐食防止剤の油性塗料としてチャン塗などが考えられる（赤田ほか，2011）。

黒色付着物は、複数ヶ所の赤外分光分析では有機物に関わる吸収は確認されなかった。また、レーザ元素分析においても、炭素Cや水素Hの含有量は非常に低く、有機物の成分は低い結果であった。

黒色付着物は、一部に塗膜状に付着し油性塗料の可能性が考えられたが、火災あるいは自然による劣化が原因で本来の物質は残存していなかったと考えられる。

表 26 黒色物・緑錆のレーザ分析結果（単位：重量%）

測定位置	点 No.	Cu	O	S	Cl	C	Si	Al	Fe	H	Na	Mg	P	K	Ca	Ti	Mn	合計	
黒色物	1	44.3	31.2	4.7	4.6	4.0	3.7	3.6	2.3	1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	100.0
	2	58.0	22.1	6.3	2.8	2.5	4.5	2.9	-	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	100.0
	3	58.0	20.8	6.7	3.7	2.2	3.6	3.2	-	0.7	-	-	-	1.1	-	-	-	-	100.0
	最大値	58.0	31.2	6.7	4.6	4.0	4.5	3.6	2.3	1.6	-	-	-	1.1	-	-	-	-	-
緑錆	1	43.4	33.5	8.3	2.7	7.1	3.7	-	-	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	100.0
	2	38.2	36.6	12.5	3.8	4.3	3.6	-	-	1.0	-	-	-	-	-	-	-	-	100.0
	3	51.7	25.5	-	9.0	7.4	5.5	-	-	0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	100.0
	最大値	51.7	36.6	12.5	9.0	7.4	5.5	-	-	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-

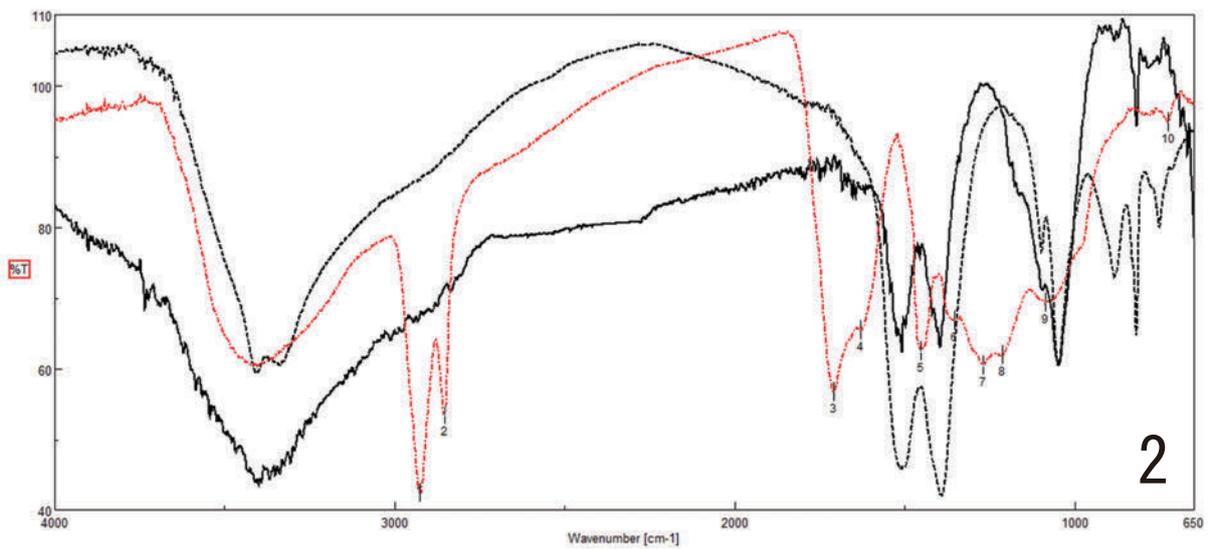
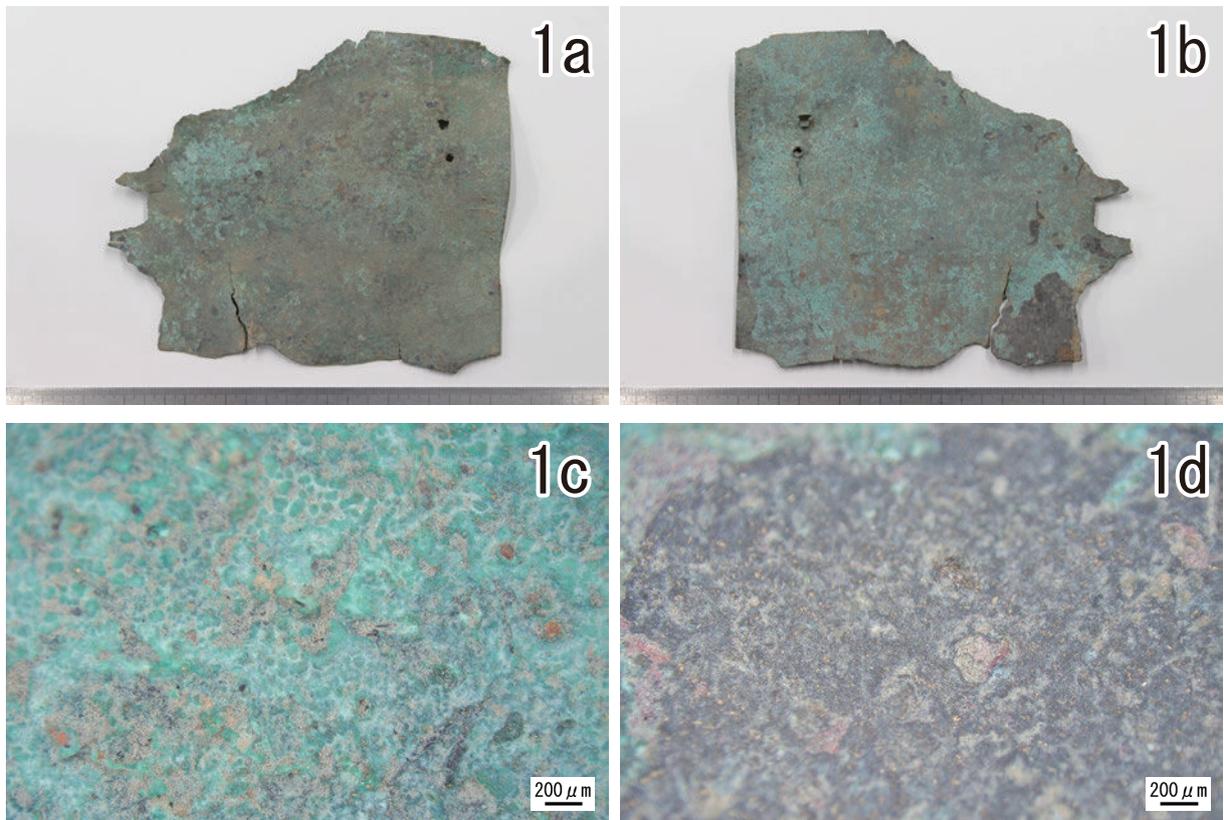


図 53 銅板と黒色付着物の赤外吸収スペクトル図

- 1a. 銅板の表面 1b. 銅板の内側 1c. 銅板表面 (1a の面) 1d. 黒色付着物 (1a の面)  
 2. 赤外吸収スペクトル図 縦軸は透過率 (%T)、横軸は波数 (Wavenumber (cm-1))  
 実線：黒色付着物、点線：緑錆、赤の一点鎖線：生漆

## 第2節 名古屋城御深井丸より出土した金属製品の蛍光X線分析

### 1 はじめに

名古屋城御深井丸の調査で出土した金属製品について、蛍光X線分析を行い、その材質を検討した。

### 2 試料と方法

分析対象は、御深井丸のL区およびG区で出土した金属製品5点である(表26)。調査区は、現在の御深井丸展示館の前に位置し、空襲による天守焼失の際に、焼け落ちて廃棄されたものとみられている。5点いずれもいわゆる緑青錆に覆われており、銅ないし銅合金製品と考えられる。分析No.1～3の3点は表面に彫金による文様があり、鍍金が施されている可能性も考えられたため、元素マッピング分析、および特徴的な箇所のポイント分析(照射径100 $\mu$ m)を行った。分析No.4、5の2点は、蛍光X線分析装置による面分析(照射径8mm or 1mm)を行った。測定位置を図版57-1、57-2に示す。なお、分析No.4は表面の一部に黒色塗膜が観察された(4章第1節参照)。

表27 分析対象となる金属製品一覧

分析No.	遺物番号	出土地点	種別	備考	元素マッピング	面分析
1	53	L区3層	釘隠し	彫金による文様あり	○	
2	54	L区3層	銅板	彫金による文様あり	○	
3	12	G区2層[SK02]	釘隠し	彫金による文様あり	○	
4	57	L区3層	銅板	一部に黒色塗膜		○(8mm)
5	-	G区2層[SK02]	銅板	一部金属露出		○(1mm)

元素マッピング分析には、株式会社堀場製作所製分析顕微鏡XGT-9000を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000 $\mu$ Aのロジウム(Rh)ターゲット、キャピラリ径が100 $\mu$ mまたは15 $\mu$ m、X線検出器はSDD検出器で、検出可能元素は炭素(C)～アメリシウム(Am)である。本装置は、試料ステージを走査させながらの測定により元素マッピング分析が可能となる。元素マッピング分析を行った後、さらにマッピング図を基に特徴的な箇所を選び、ポイント分析を行った。元素マッピング分析の測定条件は、管電圧50kV、管電流1000 $\mu$ A、キャピラリ径100 $\mu$ m、ピクセルタイム50msを1回走査で測定後、ピーク分離を行った。ポイント分析の測定条件は、管電圧50kV、管電流自動設定、キャピラリ径100 $\mu$ m、測定時間500sに設定し、定量分析はノンスタンダードFP法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。面分析には、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000 $\mu$ Aのロジウム(Rh)ターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器である。また、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することでS/N比の改善が図れ、先述のXGT-9000よりも微量元素の検出に優れる。検出可能元素はナトリウム(Na)～ウラン(U)である。測定条件は、管電圧50kV、一次フィルタPb測定用・Cd測定用の2条件、測定時間(s)が各500s、管電流自動設定、照射径8mm、試料室内雰囲気は真空中に設定した。なお、分析No.5は一部金属が露出しており、照射径1mmで露出部を測定した。定量分析は、ノンスタンダードFP法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。得られた値は、合計が100%になるようノーマライズされている。

表 28 に各蛍光 X 線分析装置の仕様の  
一覧を示す。蛍光 X 線分析は表面分析で  
あり、均一とは限らない金属製品の正確  
な組成比を必ずしも示しているとはいえ  
ないが、おおよその化学組成、含まれて  
いる微量元素を知る上では非常に有効な  
手法である。また、今回の分析では、分  
析 No.5 以外は錆の上から測定している。

表 28 蛍光 X 線分析装置仕様

		SEA1200VX	XGT-9000
管球	最大電圧	50kV	
	最大電流	1000 $\mu$ A	
	ターゲット	Rh	
照射径		8mm or 1mm	100 $\mu$ m or 15 $\mu$ m
集光素子		コリメータ	ポリキャピラリ
一次フィルタ		内臓 (4 種)	無し
照射方式		下面照射	上面照射
検出機構		エネルギー分散型	
検出器		SDD	
元素マッピング分析		不可	可能

銅合金製品の腐食は均一には進行せず、化学組成も大きく変化し得るため、得られた結果は厳密な値の比較検討には適しておらず、おおまかな、定性的な結果としてとらえる必要がある。

### 3 結果および考察

金属製品の元素マッピング分析により得られたマッピング図を図 54～56 に、マッピング図に示した a～e の各ポイントの半定量分析結果を表 28 に示す。鉄 (Fe)、ニッケル (Ni)、銅 (Cu)、亜鉛 (Zn)、ヒ素 (As)、セレン (Se)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、金 (Au)、鉛 (Pb)、ビスマス (Bi) が検出された。

また、面分析により得られた半定量分析結果を表 29 に示す。鉄 (Fe)、銅 (Cu)、亜鉛 (Zn)、ヒ素 (As)、セレン (Se)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、アンチモン (Sb)、鉛 (Pb) が検出された。

以下、各金属製品の分析結果を述べる。表 30 に分析結果の一覧を示す。

表 29 金属製品元素マッピング図中ポイントの半定量分析結果 (mass%)

分析 No.	遺物番号	種別	ポイント	Fe	Ni	Cu	Zn	As	Se	Ag	Sn	Au	Pb	Bi
1	53	釘隠し	a	0.15	0.21	98.49	0.44	0.13	-	0.22	0.36	-	-	-
			b	0.45	0.42	96.32	-	0.10	-	0.20	-	2.51	-	-
			c	1.24	0.33	96.75	-	0.51	-	0.24	-	0.93	-	-
			d	0.30	0.36	96.95	0.41	0.21	0.03	0.34	1.41	-	-	-
			e	0.59	0.28	94.26	0.35	3.73	-	0.15	-	-	0.64	-
2	54	銅板	a	0.31	-	98.55	-	0.66	-	0.11	-	-	0.37	-
			b	0.36	-	91.63	-	-	-	0.16	-	7.26	0.59	-
			c	0.17	-	90.96	-	-	-	0.14	-	8.05	0.68	-
			d	0.43	-	90.26	-	4.19	0.09	1.10	-	0.07	3.63	0.24
			e	0.21	-	89.36	-	4.88	0.10	0.23	-	-	4.91	0.30
3	12	釘隠し	a	0.36	0.28	98.14	-	0.69	-	0.11	-	0.41	-	-
			b	0.38	0.14	97.87	-	0.38	-	0.10	0.43	0.18	0.53	-
			c	0.06	0.16	98.12	-	0.32	-	0.10	1.24	-	-	-
			d	0.83	0.12	95.77	-	2.55	-	0.12	-	-	0.62	-
			e	0.08	0.08	91.59	-	8.10	-	0.13	-	-	0.02	-

表 30 金属製品の半定量分析結果 (mass%)

分析No.	遺物番号	器種	Fe	Cu	Zn	As	Se	Ag	Sn	Sb	Pb	備考
4	57	銅板	0.99	96.70	0.30	0.56	0.03	1.15	0.01	0.01	0.24	照射径 8mm
5	-	銅板	0.07	98.24	0.30	0.37	0.01	0.99	-	-	0.03	照射径 1mm、 金属露出部

[分析 No.1 (遺物番号 53) 釘隠し]

分析 No.1 (遺物番号 53) の釘隠しは、主に銅 (Cu) からなる化学組成で、一部ヒ素 (As) がやや多く含まれる箇所 (ポイント e) が検出された。また、金 (Au) の輝度がやや高い箇所があり、ポイント分析では少量の金 (Au) が検出された (ポイント b, c)。視認はできなかったが、これらは鍍金に由来する可能性がある。なお、鍍金部には水銀 (Hg) の分布も伴うのが通常だが、今回は金 (Au) が検出されたいずれの遺物からも、水銀 (Hg) は検出されていない。空襲の際の被熱により、水銀は揮散したと考えられる。ほかに、微量の鉄 (Fe)、ニッケル (Ni)、亜鉛 (Zn)、セレン (Se)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) が検出された。

[分析 No.2 (遺物番号 54) 銅板]

分析 No.2 (遺物番号 54) の銅板は、主に銅 (Cu) からなる化学組成で、一部ヒ素 (As) と鉛 (Pb) がやや多く含まれる箇所 (ポイント d, e) が検出された。また、金 (Au) の輝度の高い箇所の分布がみられ、ポイント分析では金 (Au) が多く検出された (ポイント b, c)。これらの箇所は、マイクロスコープ観察でも金色の物質が観察され (図 55-3)、鍍金と考えられる。金 (Au) のマッピング図をみると、主に魚々子文の箇所の残存が良いが、魚々子文以外の箇所にも分布がみられるため、元は全面に鍍金が施されていたと推定される。ほかに、微量の鉄 (Fe)、セレン (Se)、銀 (Ag)、ビスマス (Bi) が検出された。

[分析 No.3 (遺物番号 12) 釘隠し]

分析 No.3 (遺物番号 12) の釘隠しは、主に銅 (Cu) からなる化学組成で、一部ヒ素 (As) がやや多く含まれる箇所 (ポイント d, e) が検出された。また、金 (Au) の輝度がやや高い箇所があり、ポイント分析では微量の金 (Au) が検出された (ポイント a, b)。視認はできなかったが、これらは鍍金に由来する可能性がある。ほかに、微量の鉄 (Fe)、ニッケル (Ni)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) が検出された。

[分析 No.4 (遺物番号 57) 銅板]

分析 No.4 (遺物番号 57) の銅板は、主に銅 (Cu) からなる化学組成であった。ほかに、微量の鉄 (Fe)、亜鉛 (Zn)、ヒ素 (As)、セレン (Se)、銀 (Ag)、スズ (Sn)、アンチモン (Sb)、鉛 (Pb) が検出された。

[分析 No.5 (遺物番号無し) 銅板]

分析 No.5 (遺物番号無し) の不明銅板は、主に銅 (Cu) からなる化学組成であった。ほかに、微量の鉄 (Fe)、亜鉛 (Zn)、ヒ素 (As)、セレン (Se)、銀 (Ag)、鉛 (Pb) が検出された。

表 31 分析結果一覧

分析 No.	遺物番号	器種	地の材質	表面処理等
1	53	釘隠し	Cu(-As)	金検出、鍍金か
2	54	銅板	Cu(-As-Pb)	金明瞭に検出、鍍金か
3	12	釘隠し	Cu(-As)	金僅かに検出、鍍金か
4	57	銅板	Cu	不明黒色塗膜 (4 章第 1 節参照)
5	-	銅板	Cu	

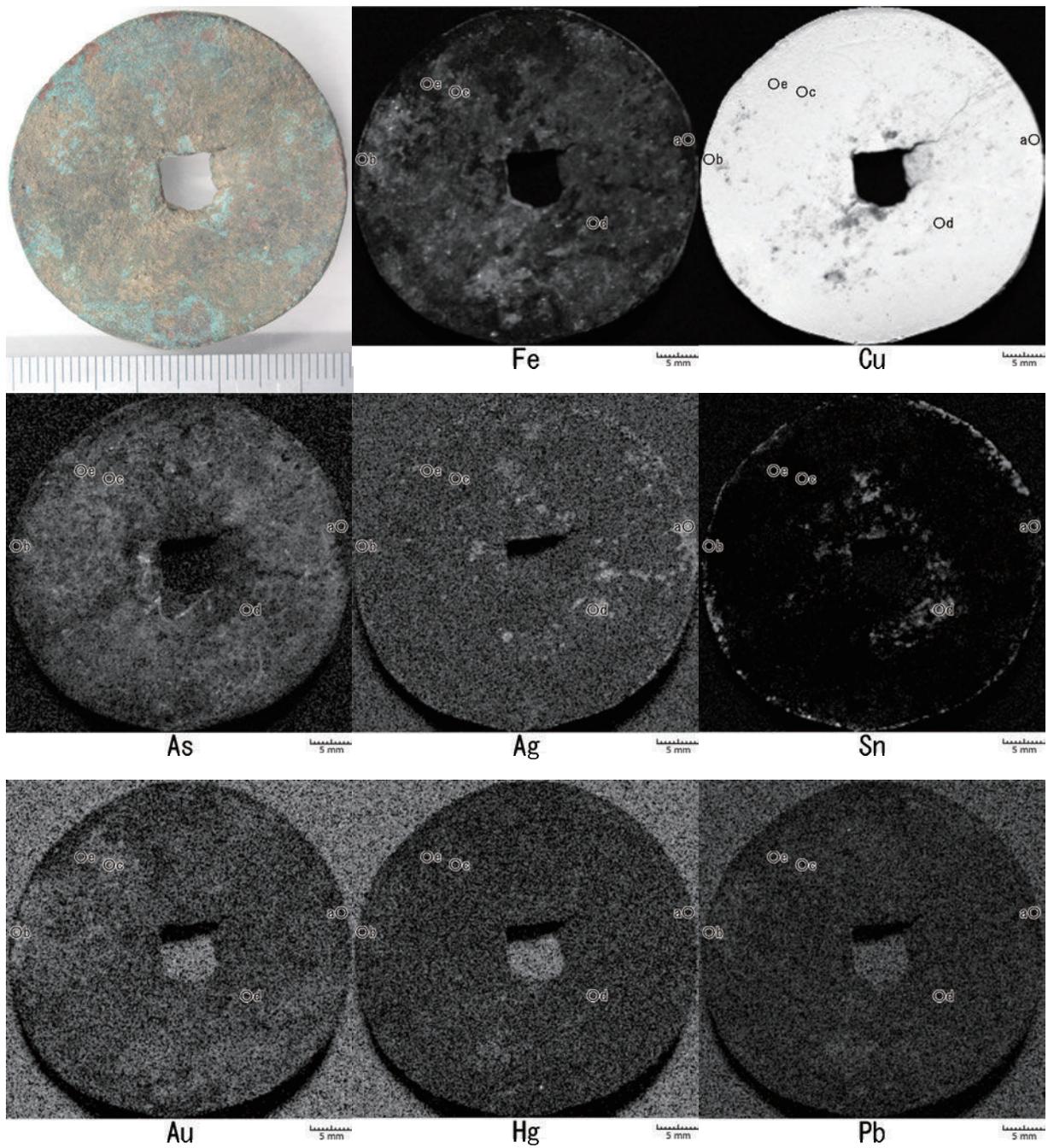


図 54 分析 No. 1 の元素マッピング図

Fe : 鉄 Cu : 銅 As : ヒ素 Ag : 銀 Sn : スズ Au : 金 Hg : 水銀 Pb : 鉛

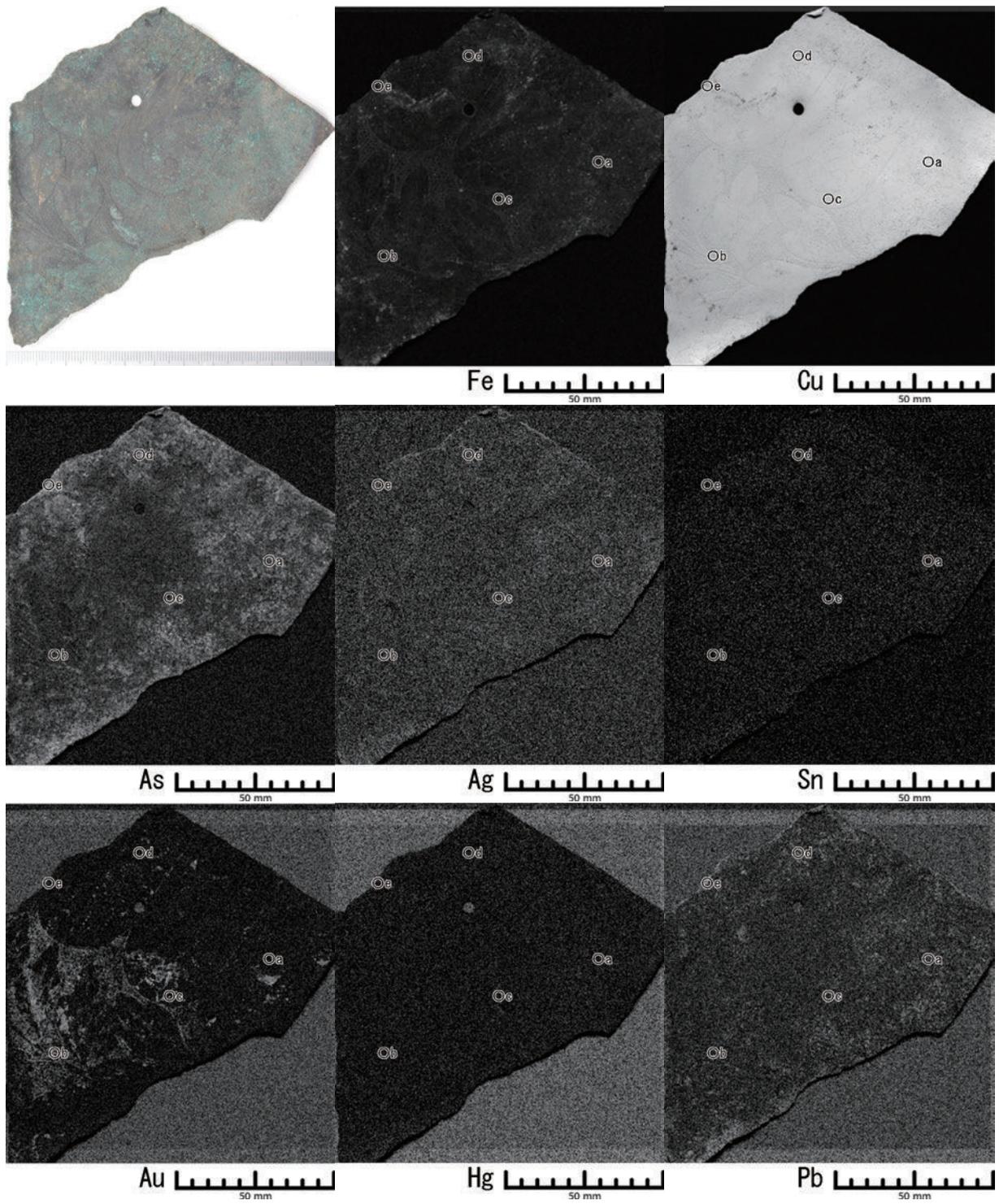


図 55 分析 No. 2 の元素マッピング図

Fe : 鉄 Cu : 銅 As : ヒ素 Ag : 銀 Sn : スズ Au : 金 Hg : 水銀 Pb : 鉛

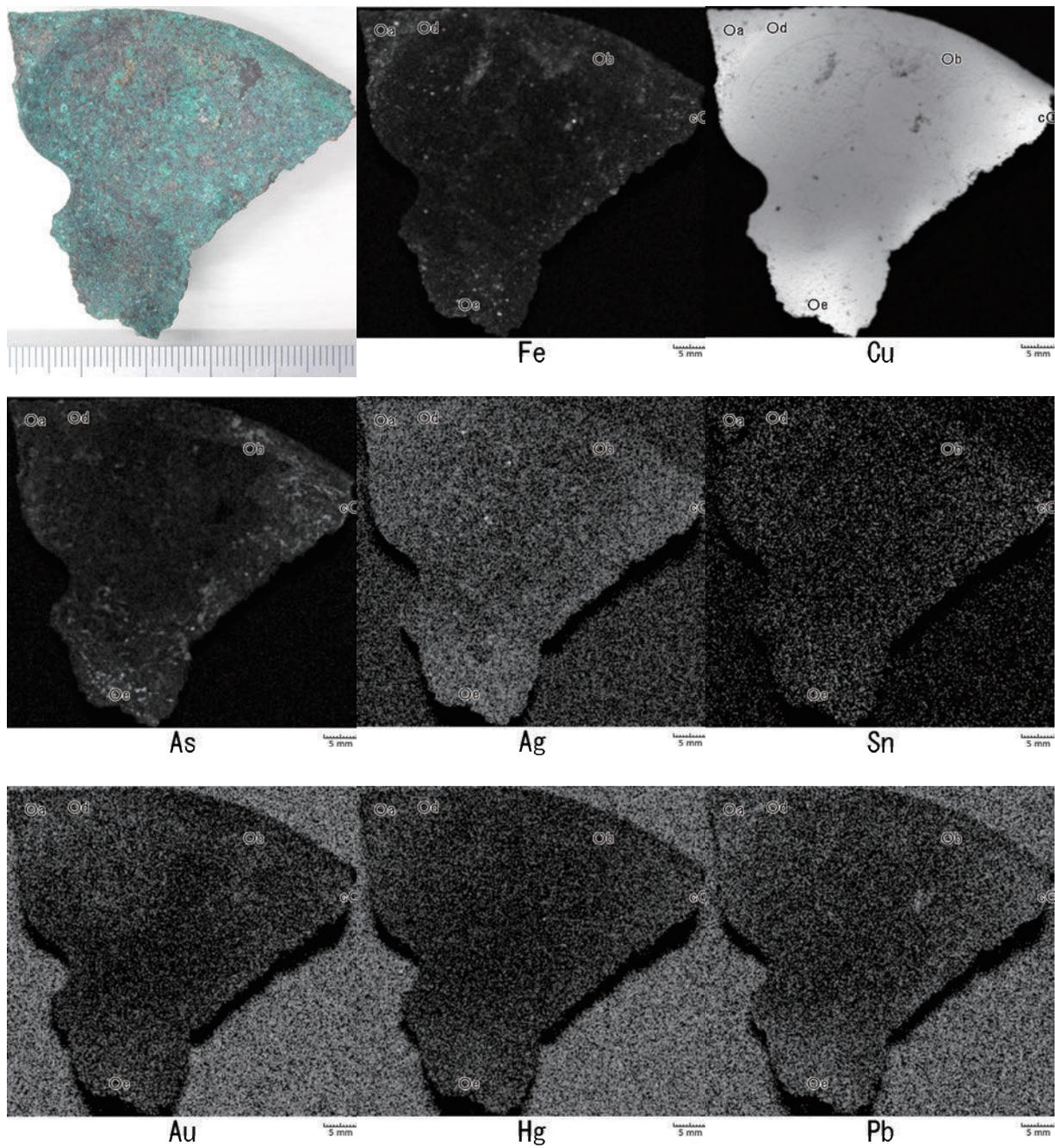


図 56 分析 No. 3 の元素マッピング図

Fe : 鉄 Cu : 銅 As : ヒ素 Ag : 銀 Sn : スズ Au : 金 Hg : 水銀 Pb : 鉛

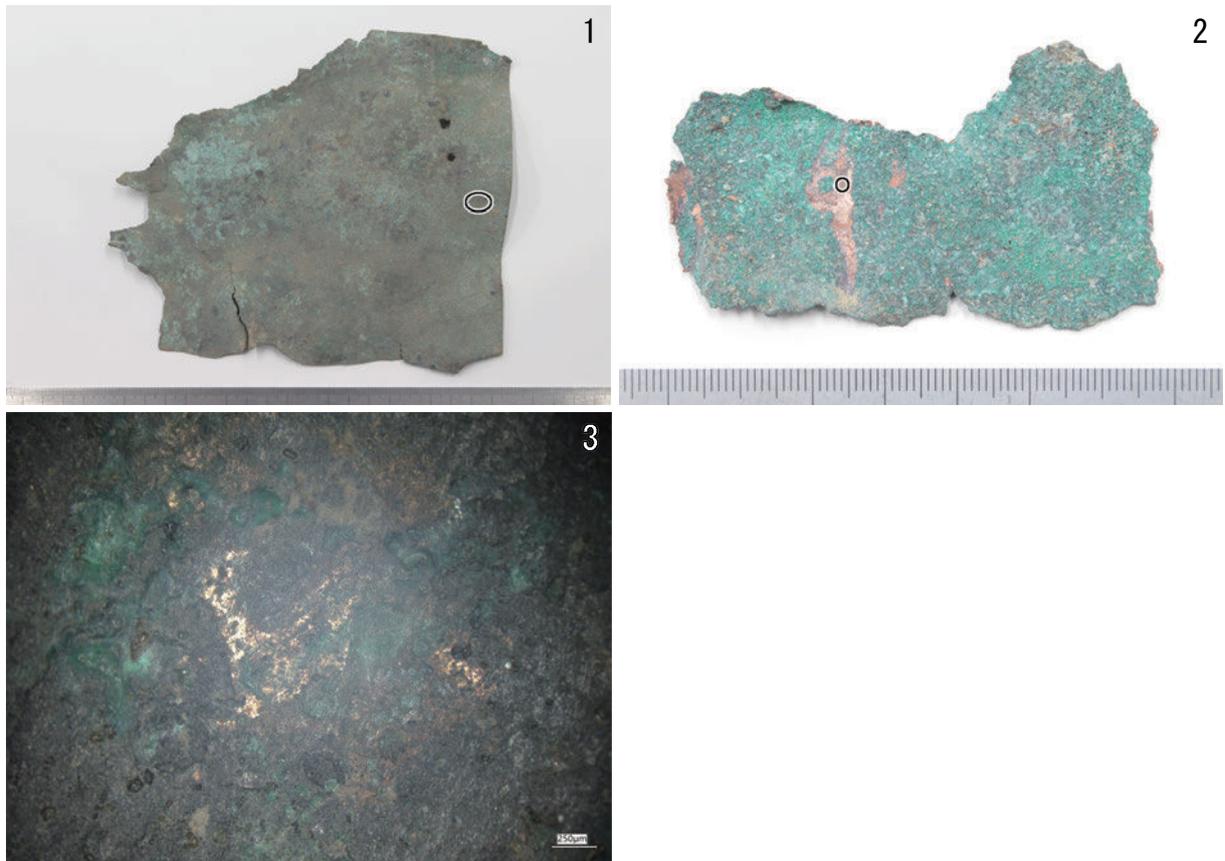


図 57 分析 No. 4 (1)、分析 No. 5 (2) の蛍光 X 線分析位置および分析 No. 2 のマイクロスコップ画像 (3)

## 参考文献

- 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』2007年
- 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』2012年
- 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 猿投系』2015年
- 赤田昌倫・金 旻貞・佐藤昌憲・高妻洋成・島津達也「油性塗料材料の劣化に関する研究」『第28回日本文化財科学会大会要旨』  
2011年 pp.198-199
- 香取正彦・井尾敏雄・井伏圭介『金工の伝統技法』1986年 理工学社 p230
- 公益財団法人瀬戸市文化振興財団編『令和4年度公益財団法人瀬戸市文化振興財団 企画展 戦時下の瀬戸焼—近代後期の瀬戸窯と  
美濃窯—』2022年
- 石川県金沢城調査研究所『金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 12 金沢城跡 —本丸附段・北ノ丸』2019年
- 石川県金沢城調査研究所『金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 15 金沢城跡 —鼠多門・鼠多門橋Ⅱ—』2021年
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター編『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第44集 名古屋城三の丸遺跡(Ⅳ)—愛知県警本部  
地点の調査—』1993年
- 静岡市教育委員会編『静岡市埋蔵文化財調査報告 44 駿府城跡Ⅰ(遺物編)』1998年
- 田口一男、佐藤好司、中野光孝「石材から見た名古屋城石垣」椋山女学園大学編『椋山女学園大学教育学部紀要』pp.217-231 2019  
年
- 中井 泉編『蛍光X線分析の実際』2005年 朝倉書店 p242
- 長野 裕・井尾建二『金工の着色技法』1998年 理工学社 p157
- 名古屋市編『特別史跡名古屋城跡 天守台周辺石垣発掘調査報告書』2019年
- 名古屋市教育委員会編『名古屋城三の丸遺跡 第4・5次発掘調査 —遺物編—』1994年
- 名古屋市博物館編『特別展 尾張名古屋は地下で待つ 城下町大発掘』2008年
- 名古屋城総合事務所編『名古屋城特別展 巨大城郭 名古屋城』2013年
- 名古屋城検定実行委員会編『近世城郭の最高峰 名古屋城』2019年
- 村上 隆『金工技術 日本の美術 443』2003年 至文堂 p98
- 安田善三郎『釘』1916年
- 山崎信二『近世瓦の研究』2008年 同成社
- 山崎信二『瓦が語る日本史 中世寺院から近世城郭まで』2012年 吉川弘文館

# 圖 版



1 A区全景（南から）



2 A区サブトレンチ北壁断面（南から）



3 B区全景（北から）



4 B区SB01 検出状況（東から）



5 B区SB01 拡大（南から）



6 B区西壁断面（東から）



7 B区3層中の間知石（西から）



1 D区全景（北から）



2 D区東壁土層断面（西から）



3 D区南壁7層拡大（西から）



4 E区全景（東から）



5 E区南壁土層断面（北から）



6 E区SK01検出状況（北西から）



7 E区SK01検出状況拡大（北から）



8 E区SK01瓦出土状況（東から）



1 F区全景（西から）



2 F区東壁断面（西から）



3 F区17層検出状況（東から）



4 G区全景（北から）



5 G区2層掘削状況と出土金属製品（東から）



6 G区2層掘削状況（西から）



7 G区南壁断面（北から）

図版 4



1 H区全景（東から）



2 H区西壁断面（東から）



3 J区全景（南から）



4 J区 SK03 断面状況（東から）



5 J区 SK03 断面状況（南から）



6 J区 SK03 断面状況拡大（南から）



7 J区南壁（北から）



8 J区西壁（東から）



1 K区全景（東から）



2 K区 SK04 検出状況（北から）



3 K区 SK04 断面（西から）



4 K区東壁断面（西から）



5 L区全景（北から）



6 L区 5' 層検出状況（東から）



7 L区東壁断面（西から）



8 L区西壁断面（東から）



1 M区全景（北から）



2 M区 SK05 断面（西から）



3 M区 12層、13層検出状況（西から）



4 M区南壁断面（北から）



5 N区全景（西から）



6 N区 7層内の軒棧瓦（東から）



7 N区北西隅テストピット掘削状況（南から）



8 N区西壁断面（東から）



1 C区全景（西から）



2 C区サブトレンチ西壁断面（東から）



3 C区管路掘方断面（北東から）



4 I区全景（西から）



5 I区管路掘方断面（北から）



6 O区全景（東から）



7 O区攪乱検出状況（西から）



8 O区管路掘方断面（南から）



1 P区全景（南西から）



2 P区7層中の礫検出状況（南から）



3 P区8層検出状況（南から）



4 P区東壁断面（西から）



5 a区全景（南から）



6 a区南壁断面（北から）



7 b区全景（北から）



8 b区5層検出状況（北から）



1 c区全景（南から）



2 c区北壁断面（南から）



3 d区全景（東から）



4 d区南壁断面（北から）



5 e区全景（西から）



6 e区南壁断面（北から）



7 f区全景（南から）



8 f区北壁断面（南から）



1 g区全景（北から）



2 g区全景（西から）



3 g区北壁断面（南から）



4 h区全景（東から）



5 h区西壁断面（東から）



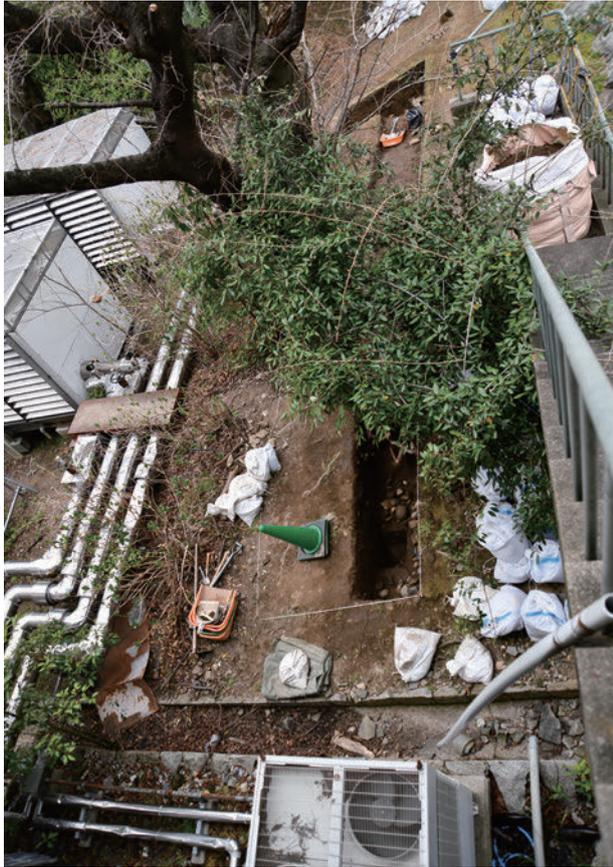
6 i区全景（西から）



7 i区9層検出状況（南から）



8 i区南壁土層断面（北から）



1 Q区全景（東から）



2 Q区西側トレンチ全景（南西から）



3 Q区西側トレンチ8層検出状況（西から）



4 Q区西側トレンチ東壁断面（西から）



5 Q区西側トレンチ西壁断面（東から）



6 Q区東側トレンチ全景（西から）



7 Q区東側トレンチ南壁断面（北から）



1 E区表土除去状況（西から）



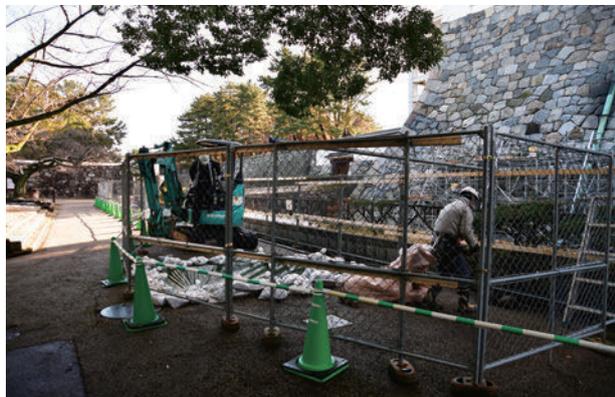
2 A区近代層掘削状況（北東から）



3 O区現代層掘削状況（西から）



4 G区SK02掘削状況（東から）



5 C区フェンス設置状況（西から）



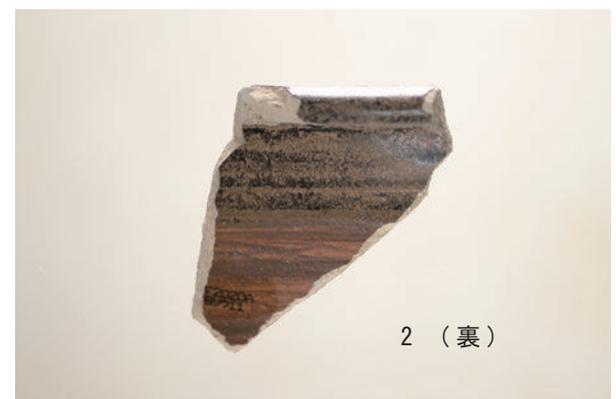
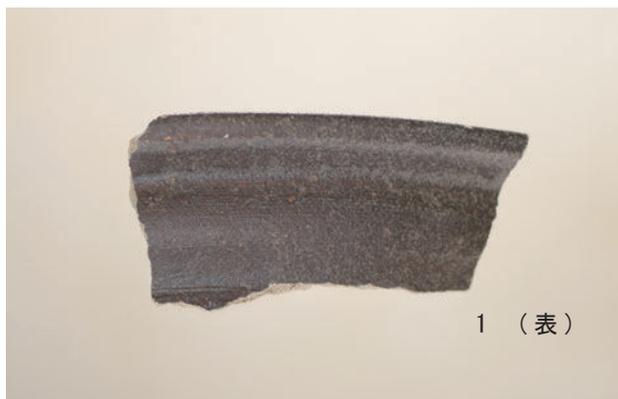
6 E区雨水排出状況（東から）



7 B区遺構面養生状況（南から）



8 B区埋め戻し完了（北から）

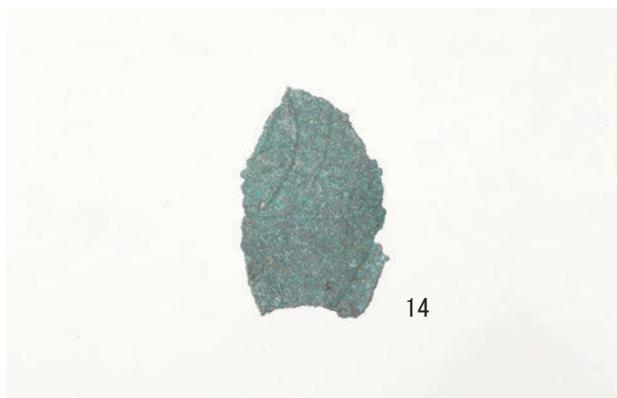
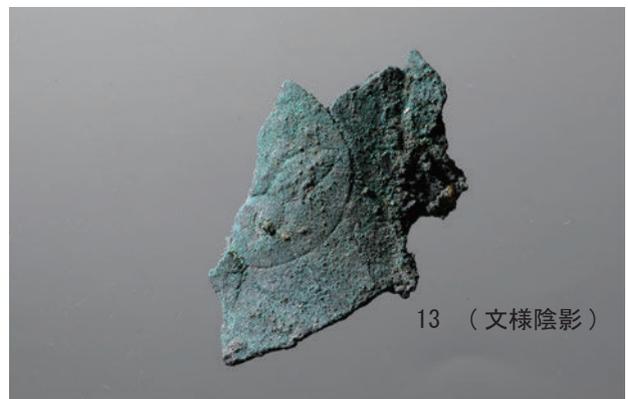
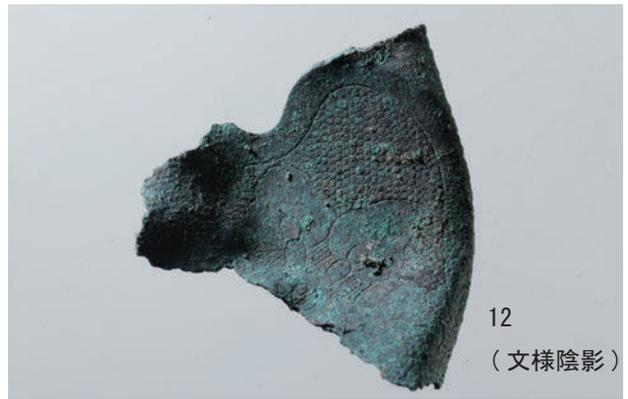
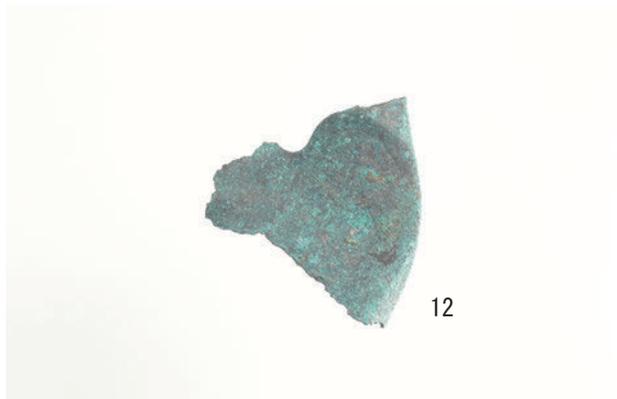


出土遺物写真 1(1～2:A区 3:B区 4:E区)

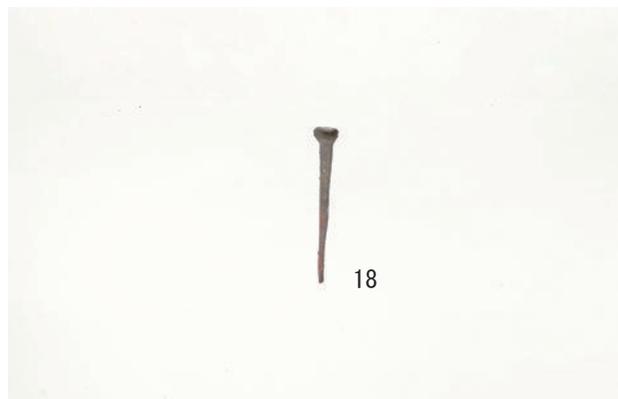




空襲により被熱した金属製品  
(G区2層出土)



出土写真遺物3(11:F区 12~14:G区)





出土遺物写真 5 (21 ~ 28:G 区)





36



37



38

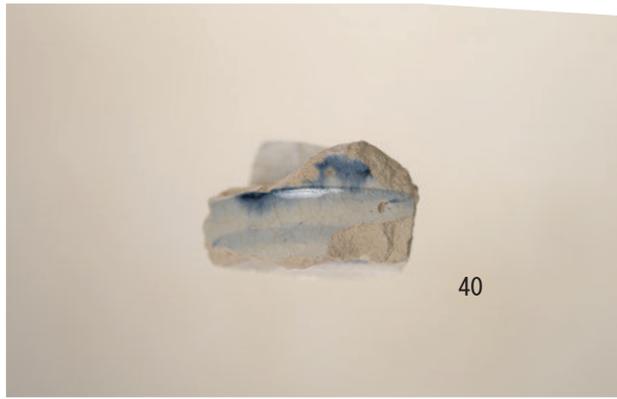


39 (表)

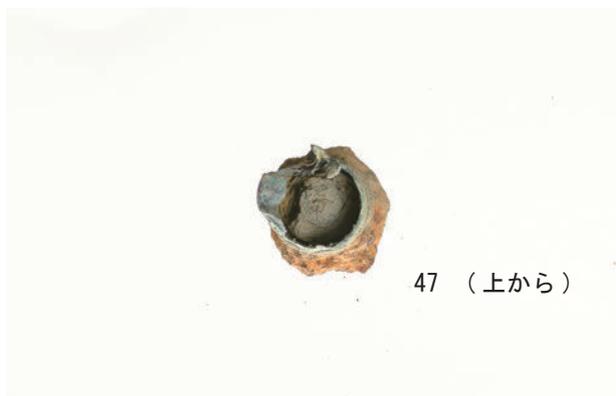


39 (裏)

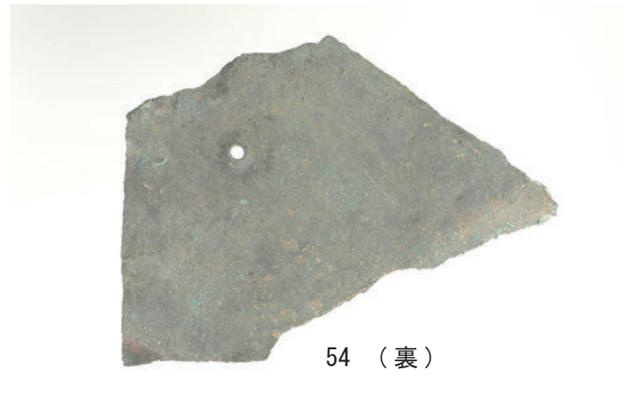
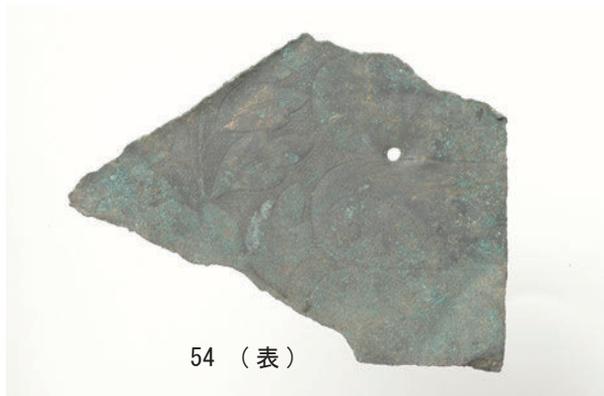
出土遺物写真 7 (36 ~ 39:G 区)



出土遺物写真 8 (40 ~ 42:H区 43 ~ 46:J区)

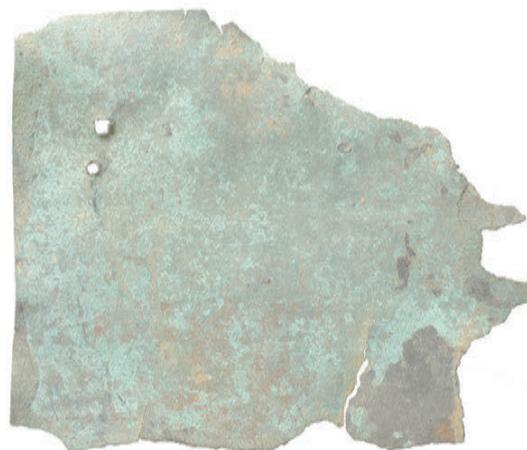


出土遺物写真 9 (47 ~ 48:J 区 49 ~ 52:L 区)

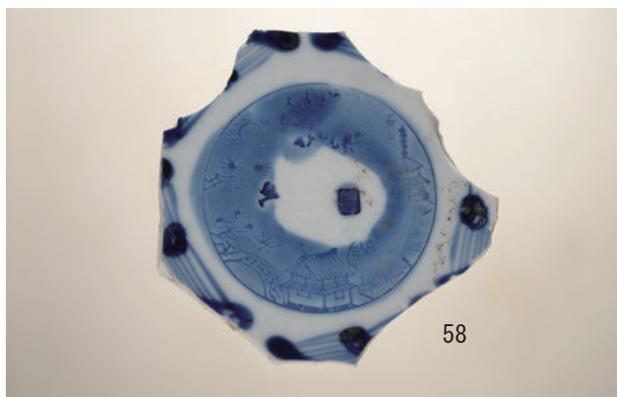




57 (表)



57 (裏)



58



59

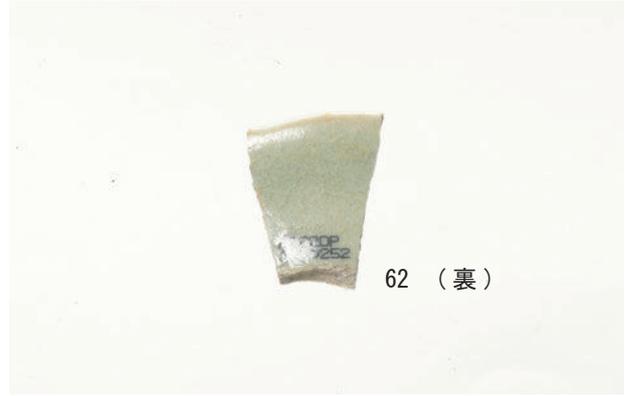
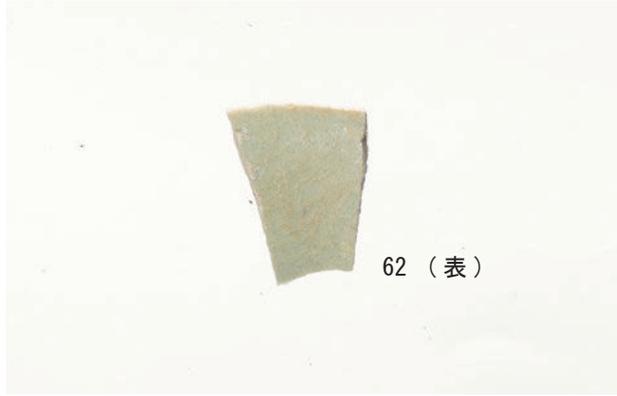


60



61

出土遺物写真 11 (57:L区 58~61:M区)





出土遺物写真 13 (68 ~ 69:g 区 70 ~ 71:Q 区)

# 報告書抄録

ふりがな	とくべつしせき なごやじょうあと おふけまる・こてんしゅにしがわはっくつちようさほうこくしよ						
書名	特別史跡名古屋城跡 御深井丸・小天守西側発掘調査報告書						
副書名	名古屋城調査研究報告 10 埋蔵文化財調査報告書 7						
編著者名	二橋慶太郎 竹原弘展 藤根久						
発行機関	名古屋市観光文化交流局 名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター						
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区本丸1番1号 TEL 052-231-1700						
発行年月日	2024（令和6）年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経		
なごやじょうあと 名古屋城跡	あいちけん 愛知県名古屋市 なかくほんまる 中区本丸	23100	7-1	35度 11分 6秒	136度 53分 59秒	2020.12.14 ～2021.3.24	118㎡ 御深井丸・小天守西側における遺構残存状況の確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
名古屋城跡	近世城郭	近世、近代	近世盛土、石列、土坑		瓦・陶磁器・金属製品		
要約	名古屋城跡内の御深井丸、小天守西側における地下遺構の残存状況を確認するために26か所の調査区を設定し、発掘調査を実施した。調査の結果、22か所の調査区で近世盛土層を検出したが、その他の遺構は御深井丸B区の水路遺構側壁のみであった。近代～現代の遺構は、廃棄土坑が複数検出された。御深井丸G区では太平洋戦争時に天守等から焼け落ちた焼損金具が多数出土し、中には六葉釘隠し等の装飾金具が複数含まれていた。						
資料の保管機関	名古屋城総合事務所						

名古屋城調査研究報告 10  
埋蔵文化財調査報告書 7

特別史跡名古屋城跡  
御深井丸・小天守西側発掘調査報告書

令和6年3月31日

編集・発行 名古屋市観光文化交流局  
名古屋城総合事務所  
名古屋城調査研究センター

印刷 西濃印刷株式会社